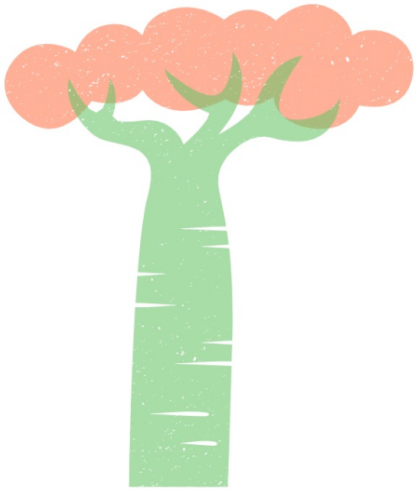
# ハルカ砂漠とトモロウの木

青大井空



# 目次

序
**序** . . . . . 3

(一) アシスエデン
**(一) アシスエデン** . . . . . 7

(二) シャング村とチポ
**(二) シャング村とチポ** . . . . . 15

(三) チポと保雄
**(三) チポと保雄** . . . . . 21

(四) チポの夢
**(四) チポの夢** . . . . . 29

(五) チポとカポ
**(五) チポとカポ** . . . . . 39

(六) テロ、復興と結婚
**(六) テロ、復興と結婚** . . . . . 47

(七) ミサ・横浜
**(七) ミサ・横浜** . . . . . 57

(八) スキャンダル
**(八) スキャンダル** . . . . . 63

(九) 旅立ち
**(九) 旅立ち** . . . . . 71

(十) 一日目
**(十) 一日目** . . . . . 77

(十一) エデンの森
**(十一) エデンの森** . . . . . 87

(十二) ニ日目

**(十二) ニ日目** . . . . . 97

(十三) ハルナッツとサウダ
**(十三) ハルナッツとサウダ** . . . . . 105

(十四) カセットテープレコーダー
**(十四) カセットテープレコーダー** . . . . . 115

(十五) 三日目・停電、スコール
**(十五) 三日目・停電、スコール** . . . . . 123

(十六) 四日目・ヤポの夢、ピポの夢
**(十六) 四日目・ヤポの夢、ピポの夢** . . . . . 131

(十七) 五日目・シティの買い物
**(十七) 五日目・シティの買い物** . . . . . 137

(十八) 六日目・ハルカ砂漠の砂
**(十八) 六日目・ハルカ砂漠の砂** . . . . . 141

(十九) 七日目
**(十九) 七日目** . . . . . 147

(二十) トモロウの木
**(二十) トモロウの木** . . . . . 153

終わりに
**終わりに** . . . . . 163

# 序

# 序

少女は泣いていた。

季節は春三月。中学を卒業したばかりの少女は、父親の好きだった大桟橋の外れにひとりぼっちで立っていた。目の前には港町横浜の港の夜景が広がっている。ヨットハーバー、山下公園、連なるハーバーライトの波また波、絶えることなく打ち寄せる夜の海の潮騒……。

父親の好きだった大桟橋……詰まり、過去形。なぜなら少女の父親は、今朝、五十歳の若さで息を引き取り、帰らぬ人となったからである。それ故少女は最愛の父の死を悲しみ、ひとりぼっちで泣いていたのだった。

ところがそんな少女の耳に、不意に何かが聴こえて来た。幽かに、けれど確かに……。

何。

驚いた少女はつい泣くことも忘れ、音に向かって耳を傾けた。その正体は、誰かの歌う声だった。聴き覚えのない女の人の歌声……。

でも、何処からこんな歌声が。少女は訝った。周りをきょろきょろ見回してみても、何処にも人影などない。さっきから音を立てているのは、波止場に砕け散る波、潮騒だけである。なのに確かにその歌声は波音に混じって、少女の耳に響いて来るのだった。

少女は頬に落ちる涙の滴もそのままに、歌う声のする方角へと目を向けた。暗い夜の海の水平線の彼方へと。例えば潮風が少女の体を包むように、そしてそのミステリアスな謎の歌声は、悲しみに沈む少女の心をそっとやさしく、包み込むのだった……。

# (一) アシスエデン

# (一) アシスエデン

西暦二〇一五年。アフリカ大陸の南方に、ザンビアとジンバブエに挟まれた『アシスエデン』という国があった。

この国は、面積約一万五百平方キロメートル、人口約百五十万人という貧しい小国であった。しかしながら立派な農業地帯、台地、平原が広がり、山脈があり、砂漠もあり、それから湖と河川があった。ただし海はない。

アシスエデンには、主に『グリラ族』が住んでいた。この民族は陽気で、みんな歌って踊ることが大好きな黒人たちである。

国の言語はふたつ有り、英語と地元の『グリラ語』である。国民はその時々で必要に応じ、英語とグリラ語とを上手く使い分けていた。

この国には、野生動物も多い。ワニやカバが川沿いに、山にはゴリラが、また平原には象が棲息していた。しかし国民のモラルは非常に高く、密猟などというあくどい所業を犯すような不届き者は誰一人としていなかった。

首都『トピア』の中心部には、近代的なビルが建ち並ぶ。ここには官公庁、外資系を含めた企業、銀行のオフィスが集中し、ホテル、娯楽施設、商店、レストランが所狭しと連なり、先進国の都会にも見劣りしない洗練された都市空間を構築していた。

しかしながら現代文明の栄華を感じさせる街並みが見られるのも、僅かにこのトピア中心部のみである。ここ以外の地方都市、村落は勿論のこと、トピア内部ですら郊外に一歩足を延ばせば、その光景は一変する。広大な農場地帯が果てしなく何処までも続き、その中にぽつりぽつりと農民たちの集落が見られる程度だった。

国の政治体制は一応議会制民主主義の形を取ってはいたが、国連に加盟することもなく独自の道をひたすら歩み、『ゴリラン大統領』による独裁政治が長期に渡って続いていた。

確かに独裁ではあったが、国民の味方だった。農地を国民にただ同然で貸したり、税金が安い、或いは低所得者は無税にするなど、弱者、国民思いの政策を誠実に実行しており、現在のところ国民の間にゴリラン大統領への不満は一切なかった。むしろゴリランが既に八十歳の高齢を迎えていることもあって、彼以後の後継者について殆どの国民が心配していた。

では産業並びに経済面を見てみよう。アシスエデンにはこれといった資源も観光地もなく、また工業も発達は遅れていた。その為どうしても、農業中心に成らざるを得なかった。従って大部分の国民は農業に従事しており、農民たちはみな貧しく、質素な生活を

送っていた。例えば多くの大人たちが朝食を取らず、一日二食の食生活をしている。しかし自給自足のライフスタイルが定着しており、日本人には理解し難いかも知れないが、貧しいことに不満を抱く者は殆どいなかったのである。

農業以外ではインフラを支える公共事業を請け負うゼネコン、衣食住に関わる製造業(例えば衣料、食品加工、建築、家具、日用雑貨、紙、その他楽器遊具などの製造) と、それらの商品の流通業、小売業、サービス業などがあった。農産物も含め海外との貿易は電化製品や車の輸入など極僅かで、殆どの商品、物資は国内の需要と供給とによって上手く賄われていた。詰まり贅沢さえしなければ、国内の自給自足で何とかやっていけないこともないという現状だった。

また金融面では日本などと異なり、国家が中央銀行を所有していた。詰まりアシスエデン政府自身が、自国の貨幣 (単位は『エデン』) を発行していたのである。その為、商業銀行は発行された貨幣の市場、国民への流通と、決済業務だけを担っていた。

次に環境、衛生面はどうか。インフラ、公共施設、医療機関等が先進国並みに整っているのは、矢張り首都トピア中心部に限られ、郊外、地方に出るとまだまだ不充分であった。

電気は国の全土に供給されていたが、不安定で停電は日常茶飯事。これが電化製品の普及を妨げているひとつの要因である。ガスの供給もまた首都中心部のみに限られており、他の地域には設備すらなかった。通信設備も似たようなもので、田舎には公衆電話が集落にひとつあるかないかといった程度に過ぎなかった。

水道設備も完備されているのは矢張り首都中心部のみで、田舎では専ら井戸水に頼っていた。風呂、シャワー、トイレの普及率も低く、衛生環境は劣悪と言うしかなかった。ただし売春、風俗産業は法律で禁じられ、厳格にそれが守られているせいか、ＨＩＶ、その他性病感染者は殆どいなかった。

文化面もまた同様であった。マスコミ、図書館などの文化施設もトピア中心部に集中しており、郊外と地方の民家にはＴＶもラジオも新聞もなく、書籍の類すら少なかった。またアシスエデン自体には、ショービジネス、芸能界といったものは存在せず、トピアで見られるＴＶ番組は報道を除いてすべて、海外からの輸入に頼っていた。

教育体制は小学校、中学校、高校、カレッジとあった。小、中学校は義務教育であるが、多くの国民は貧しい為、中学に通えない子も多数いた。田舎の学校の生徒たちは教科書を共有し合い、ノートとペンを交代で使っており、多くの小学校は校舎を持たず、野外で授業を行っていた。

宗教はキリスト教徒が殆どで、皆信仰心が厚く、熱心に教会に通っていた。その他、大地や火、水といった自然を崇める土着の信仰も存在する。

最後にアシスエデンの治安についてであるが、国民は皆真面目で穏やか。しかも信仰心がある為、貧しいながらも助け合いながら暮らしていた。そのお陰で治安は良かった。むしろ先進国並みの生活水準を有し貨幣経済に大きく依存したトピア中心部ほど、窃盗や暴行などの犯罪が時折り見受けられた。

このようにアシスエデンという国は経済的には決して豊かとは言えず、むしろ貧しい位である。が国民は皆穏やかに、日々を逞しく生きているのだった。

このようにアシスエデンは貧しい国であったが、それに付け込んだ米国と西欧諸国の首脳が、西暦二〇〇〇年、アシスエデンを経済的に隷従させ支配しようと企んだことがあった。

具体的には独裁者ゴリランに対し、アシスエデンの中央銀行を民営化し、国際決済銀行に加盟させること、並びに国連と国際通貨基金（ＩＭＦ）への加盟を迫った。もし従わなければ経済制裁を実施すると共に、政権転覆の市民革命を起こすぞと脅しをかけた。ところがゴリラン大統領は、国民を不幸、否地獄に陥れるような脅し、外圧に屈する訳にはいかないと、断固これを突っぱねたから、さあ大変。

欧米諸国首脳は烈火の如く怒り、すぐさま自国のメディアを駆使して先ずはゴリラン大統領のネガティブキャンペーンを展開した。国連にも加盟出来ない野蛮国家の、ヒトラーも顔負けの独裁者ゴリランだとか、アシスエデンの至る所でジェノサイドが行われ国民を犠牲にして贅沢三昧、酒池肉林に耽る狂気のゴリランだとか、そりゃもうあることないこと言いたい放題。しかしそもそも国連に加盟していないゴリランには、これらネガティブキャンペーンに対して、反論し国際社会に訴える手立てすら何ひとつなかったのである。

そして欧米諸国首脳たちは予告通り、国連安全保障理事会の決議に基づいた経済制裁を発動した。しかしこれは、アシスエデンに大きな打撃を与えることは出来なかった。なぜなら被害は限定的であり、困ったのは国民の中のほんの一部、先進国かぶれの物質的利便さと贅沢を享受する金持ちと役人のみにとどまったからである。対して、大半の国民は元々質素な環境で暮らしていたから影響を殆ど受けず、たとえもし経済的に何か不自由することがあったとしても皆我慢強くタフだから、黙々と耐え忍んだであろうことは想像に難くない。

先のゴリラン大統領に対するネガティブキャンペーンにしても、幾ら国際世論で批判が高まり、彼の国際社会に於ける立場が悪化しようが、それによって大統領職から失脚、追放させられる訳でもないから（もしそうなったら内政干渉）、実質的には何らの効果もなかった。ゴリランにしてみれば痛くも痒くもないから、どうぞ好きにおやんなさい、と静観の構えでいられたのである。

そこで仕方なし、欧米諸国首脳の面々は遂に実力行使に及んだ。まずゴリラン大統領の暗殺を謀ったのである。しかし流石は独裁者、そこら辺のガードは実に堅かった。自分の周囲に強力なガードマンを配置するのは勿論、国境の警備と国内で唯一の空港であるトピア国際空港の入国チェックを厳重に行い、国外からの暗殺者を退けた。

そこで次なる手は、革命である。予告通りゴリラン政権の転覆を狙って、アシスエデンの国中で独裁を批判して民主化運動を起こし、貧しい国民を扇動する。そして国全体でゴリラン反対の渦を巻き起こして首都トピアへ雪崩れ込み、仕上げは暴力的な革命を起こしてゴリランを大統領の座から引き摺り下ろす。後釜には西側諸国の傀儡を据え、自分らに都合のいい政策を押し付ける。とまあシナリオは、こんな具合。

名付けて、じゃーん『トピアの春』。

早速ＣＩＡが養成した扇動員、所謂民主化運動員たちがアシスエデンに続々と観光客を装って入国した。彼らは迅速に国内各地に飛んで、貧しい農民たちを前にゴリランの

横暴を批判し、革命を訴えていった。
「みんなーっ、騙されちゃいけねえよ。やつが俺たち国民の財産を独り占めしてやがんだぜ」
「民主化すれば、もっと金持ちになれる。良い暮らしが出来るし、みんな楽になれるんだ。ほら、ヨーロッパ各国の市民生活を見てみなよ。みんな贅沢してるし、便利だし、実に幸せそうじゃねえか」
「さあ、みんなで立ち上がり、ゴリランを倒そう。そしてこの国を、すべての金を、我々民衆の手に取り戻そうじゃないか、なあ諸君。そしてみんなで幸せになるんだ。さあ、エイエイオー」
　しかし扇動に対するアシスエデンの国民、貧しい農民たちの反応は鈍く、一向に乗って来る気配はなかった。
「あたしたちのボス、ゴリランは、そんな悪いやつなんかじゃないわ」
「あいつはね、国民思いの本当にいいやつなんだよ。俺たちゃ、今の生活に充分満足してるしね」
「そうそ。そりゃ確かに貧しくて不便かも知んないけど、わしらその日の食いもんさえありゃ、それで充分だしね。後はのんびりやれりゃ、言うことなし。今の暮らしのまんまで、充分幸せなんだよ」
　ありゃりゃ。駄目だ、こりゃ。こうして民主化運動は、あえなく挫折した。残る手段は暴力に訴えるのみ、即ちテロである。ＣＩＡの手先である民主化運動員たちがそのままアシスエデン内に潜伏して、今度はテロリストに大変身。次々と各地でダイナマイト、手榴弾を使った爆破騒動を起こしていった。
　これにより確かにそれまで平和だったアシスエデンに大きな被害と打撃を与え、穏やかな国民たちはパニックと悲劇に見舞われ、肉体的にも精神的にも大きな傷と深い悲しみを負った。しかしこれも徐々に鎮圧されていった。以後テロリスト侵入防止の為、観光客への厳しい入国チェックが為されることとなった。
　こうしてアシスエデンの国家転覆工作が悉く失敗に終わった欧米諸国の連中は、とうとうやけっぱち。どうしたかと言えば、アシスエデンという国家自体を世界地図から抹消するという暴挙に出たのである。
　世界地図から抹消……。具体的にどうしたかと言えば、先ず国連の場で独裁国家アシスエデンについて協議を行い、国連安全保障理事会が、同国を野蛮な『ならず者国家』として非難声明を発表した。
　そして西暦二〇〇五年八月十五日のこと。先の経済制裁、民主化運動も成果が見られなかった点を鑑み、ここに国際社会は同国を主権国家として認められない旨を、全世界に向かって高らかに宣言したのである。この宣言を、『アシスエデン・国家廃絶決議案』と呼んだ。
　この決議案を根拠として、国連は全加盟国に対しアシスエデンを国家として認めず、可能な限り外交関係を絶つよう要請した。この要請に強制力はなかったが、多くの加盟国がこれに同調した。
　日本も同様、右に習えで従った。何しろ日本は、第二次世界大戦終戦後から米国の言い成り。かつ終戦から既に何十年と経過した今ですら、国連憲章上は未だ連合国の敵国

扱いにされたまんまなのである。そんな我が国、日本であるからして、従わざるを得なかった。

よってこの時より日本を始めとする国連の殆どの加盟国に於いて、アシスエデンという国は存在しないものとなってしまったのである。こうしてアシスエデンは、世界地図から抹消されてしまったという訳。地球上でも僅かにアフリカ大陸の近隣諸国、南アフリカ、ザンビア、ジンバブエなどの数カ国だけが、継続してアシスエデンを国家として認め、外交関係を維持しているのみであった。

## (二) シャング村とチポ

(二) シャンプ有さ?

# (二) シャング村とチポ

チポ・エンデ (三十歳)。

グリラ族の彼女は、『シャング』という村に住んでいた。

シャングは、国際社会から抹殺された悲運の小国アシスエデンの首都トピア中心部より北へ五十キロメートル離れた郊外にある、自然豊かな農村であった。村には森があり、『アシタ湖』と呼ばれる湖があり、『ハルカ砂漠』という国内最大の砂漠も有していた。

シャングの人々はハルカ砂漠に立つと、砂の大地が何処までも果てしなく果てしなく、丸で地球の果てまでも続いているかのように思えてならないのだった。

シャングには広大な農地があり、その中に二十の集落が点在し、村人たちはそこで生活を営んでいた。ひとつの集落に平均五十世帯、約二百人余りが住んでおり、従ってシャング全体の人口はおおよそ四千人位である。チポ・エンデの暮らす集落も、平均とほぼ同数の世帯と人が住んでいた。

チポは大柄な体格で、背中まで垂れ下がった太くごわごわとした黒髪を後頭部でギュッと束ね、頭にはしっかとバンダナを巻いていた。丸々とした二の腕は大きめサイズのTシャツの袖から惜しげなく出され、双子の山のようなオッパイもはち切れんばかりにTシャツの生地を伸ばして、歩く度豪快に揺れるのだった。下半身はと言えば長く広めの、風通しの良いスカートで覆われ、逞しきその大根足を拝むことは滅多にない。がっちりしたそのパワフルボディを、薄っぺらいゴムのサンダルが辛うじて支えていた。

男勝りのチポ。そんな彼女が毎朝集落の中をのっしのっしと闊歩すれば、あちらこちらから顔を出し、みんなが陽気に声を掛けて来る。

「ビュテ (おはよう)、チポ」

「夕べはトマトをミスュ (ありがとう)。美味しかったわ」

「ヤポとピポは、もう学校行ったかい」

「チポ、風邪もう治ったの」

するとチポはいつもにこにこ、大きく手を振って答える。

「ビュテ、みんな。風邪なんかへっちゃら、へっちゃら。二日も寝てりゃ、けろっと治っちゃうから。ええ、旦那も元気よ。子どもたちもみんな、やんなっちゃうぐらい元気なんだから。ミスュ、それもこれも村のみんなのお陰よ。お陰で、今日もわたしは一日、テアズ、テアズ」

テアズ、テアズ……。テアズとは、グリラ語で『幸福』を意味していた。しかしチポの言葉には程遠く、シャングの村の暮らしはとても裕福などと呼べるものではなかった。

チポの家は四人家族。石と藁でこしらえた家に夫のカポ・エンデ (三十五歳) と、長男のヤポ (十一歳)、長女ピポ (九歳) と住んでおり、ふたりの子どもは小学生。近くの『シャ

ング小学校』に通っていた。チポの両親も健在で、父アポ・トウカと母ミポ・トウカが隣家に住んでいた。

家の造りや大きさ、広さと言ったら、集落の何処の家もみんな似たり寄ったり。それぞれ約十二畳程の面積のワンルームと、キッチンを備えているだけ。その中で家族が一緒に暮らしていた。家の中にはトイレも風呂もなく、では室内にあるものと言ったら、夫婦のベッドと子どもたち各々のベッド。あとは棚が幾つかあり、雑貨品がきちんと整理され収められていた。

照明は天井から吊り下げられた、はだか電球がひとつ。停電した時に備えて、何処の家庭でも蝋燭が用意されていた。

キッチンに水道はなく、大きなたらいと、水を貯めておく大きな甕 (かめ)、また井戸から水を汲み上げ運んで来る時に使う一回り小さめの甕がある。それから電気コンロと炭火のコンロがひとつずつあり、他には皿、スプーン、鍋、調味料、食材等を収めた棚があるのみで、冷蔵庫はなかった。

集落の広場に村人の水源である共同の井戸があり、日々女たちが水汲みに集い、わいわいがやがやと世間話を交わしては、甕に一杯に入れた水を持ち帰ってゆくのであった。

また集落の広場には男女各々三つずつの共同トイレと、そしてシャワー室があった。ただしシャワー室は西暦二〇〇七年にようやく設けられたもので、それ以前は風呂もシャワーもなかった。

では村人たちはどうやって体を洗っていたかと言えば、各々の家でたらいに貯めた水で洗うのである。また同じたらいで、洗濯も行っていた。

このような訳でシャング村は決して衛生面に於いて良好とは言い難く、家の中や集落にはそれなりの臭いが漂っていた。が住めば都、住んでいれば、直ぐに慣れて来るものである。また家の周りが畑であることもあって、ハエや小さな羽虫が絶えず飛び回っており、慣れないうちは不快で堪らないが、これも慣れてしまえば大したことはなく、事実村人たちは涼しい顔で日々を暮らしていた。しかしながら人々はみんなきれい好きで、自分が使ったトイレはきれいにして出て来るのであった。

ここシャングでも電気は各家庭に供給されているが、三日に一度は停電になり、ひとたび停電すると数時間ひどい時は丸二日復旧しないこともざらである。これは設備自体が脆弱なこともあるが、火力発電による安定した電力は専らトピア中心部に供給され、他の地域はハルカ砂漠を吹く風によって起こす風力発電に頼っていることも関係している。着の身着のまま、すべては風任せという訳である。

こんなインフラの不充分なシャングの村ではあるが、五キロメートル程南下した場所に、チポたちが俗に『シティ』と呼ぶ繁華街があった。そこには衣食住に関わる商品が陳列された市場があり、キリスト教のチャペルがあり、救急病院があり、『トピア北中学校』がある。シャングの村で自転車を持つ家は少なく従ってチポたちは皆、片道二時間を掛けシティまで歩いて通っていた。中学生たちも朝早く起き、元気に歩いて通学している。また村人たちは自分の畑で収穫した作物を市場の店に買ってもらうことで、貨幣を手に入れていた。

このように先進国に比べれば開発が遅れ、物質的には確かに貧しいシャングの村ではあったが、その中でチポたちは毎日逞しく陽気に暮らしていた。

みんな早起きで、朝から鍬を持って近くの畑に出掛け、土を耕し、種を蒔き、作物を育てた。農薬は使わず、もし使いたくとも金がないから買えなかったが、それでもそこそこ作物は育った。収穫の少ない年もあるが、貧しいながらも最低限、自給自足出来る程度には大体いつも収穫出来ていた。

そもそもアシスエデンが貧しい国だとか、シャングの村が貧しくその中で農民たちは貧しい生活を強いられているとか言っても、貧しいか、そうでないかを決める基準は、無論金銭があるかないかである。がチポたちのように貨幣経済に巻き込まれておらず、お金に無理に依存しなくとも何とか食って生きてゆける、せいぜい市場で買い物をする程度の人々にとっては、その基準自体に意味がない。詰まりどうでも良いことで、従って貧しかろうがそうでなかろうが、余計なお世話と言ったところなのである。

事実集落の人々はチポも含め、敬虔なクリスチャンだし、みんな助け合いながら暮らしていた。食べ物を分け合い、不足している家には他の家が自分の食物を与える。また或る集落が困っている時は、隣りの集落が助ける。そしてシャングの村全体で食べ物がない時は、仕方がないからみんなで共に我慢して、一緒に飢えを堪える。食べ物に限らず、農具、料理道具も共有し合ったり、雑貨品も分け合う。だからトイレや井戸が共同でも問題なく運営されている。汚れていれば誰かが掃除し、誰かしらが市場で買ったトイレットペーパーを補充する。言わば集落とシャングの村が、ひとつの大家族みたいなものなのであった。

チポの家の畑は一ヘクタールの広さで、そこでは主にトウモロコシ、トマト、イモを育てていた。国の主食がトウモロコシであり、農家は何処もトウモロコシ中心。チポの所も農地の半分がトウモロコシ畑である。果てしない青空の下にトウモロコシ畑が何処までも続き、ハルカ砂漠の砂まじりの風がトウモロコシの葉を揺らす音は、さながら大地の笑い声のようであった。

シャングでは他に大豆、『ムリオ』と呼ばれる緑色野菜、バナナも実った。畑の他に、家畜を養う家もあり、その種類は鶏、ヤギ、豚、牛など。チポはいつも向かいの家から、鶏の卵を分けてもらっていた。代わりにトマトやイモをお返しする。実質物々交換であり、これがシャング内部での主なる取引手段であった。詰まりシャングの経済は、物々交換によって支えられているようなものなのであった。

夜明けには鶏が鳴き、目覚まし時計の役を果たしてくれていた。ちなみに村の民家に時計は一台もない。早朝の畑には色取り取りの野鳥が舞い降り、作物をついばむ。農民には迷惑な話だが、可愛らしい声で鳴いてくれ、人々の心を慰めてくれるので、何とも憎めない連中である。それに比して甚だ迷惑なのが、イノシシ。畑を駆け回り、思う存分荒らしたかと思うと、さっさと逃げてゆく。まったく煮ても焼いても食えない相手なのであった。

チポの集落ではどの家も週に一度のペースでシティに出掛け、市場で買い物をするのが習慣であり、楽しみでもあった。どんな物を購入するかと言えば、食パンや加工された肉類などの食料、調味料、衣料、タオル、トイレットペーパー、髭剃り、石鹸等々である。

グリラ族の主食は『ハルナッツ』と呼ばれるトウモロコシの粉を煮詰めたもので、これをベースに、野菜や肉と共に食事をする。料理は電気コンロが使えれば使うが、停電の時は木の摩擦で火を起こして木炭に着火し、炭火のコンロで行っていた。

チポたちの夕ごはんの後の楽しみは、みんなで集落の広場に集い、火を囲んで話したり、音楽と踊りに興じることであった。音楽と踊りと言えば、シャングの村人たちの最大の楽しみは、何と言っても『パラダ』と『ダイス』。

民族楽器である『ユート』と呼ばれる横笛とマラカス、それに『ジャンベ』(太鼓) で演奏し歌うグリラ族の民族音楽パラダは、祭囃子のような陽気で軽快な音楽。そしてそのパラダに合わせて体全体で生きる喜びを表現するが如くに激しく踊るのが、ダイスというダンスであった。

収穫祭、クリスマスなどの年中行事、また婚礼など目出度い席は勿論のこと、葬儀に於いてもグリラ族は熱狂的に歌い踊った。悲しみを受け入れ、涙を噛み締めながら、それでも陽気に歌い踊り、みんなで賑やかに死者を見送るのである。それがチポを始めとするシャングの人々の性分であり、また死生観、哲学でもあった。

## (三) チポと保雄

# (三) チポと保雄

プラネット・フォー・アフリカ。略してＰＦＡは、英国はロンドンに本部を置く、アフリカ大陸の貧困国、開発途上国に於ける国民の生活向上を支援する国際ＮＧＯ団体である。歴史は古く、西暦一九五二年に英国で設立されるや、世界中に支援の輪が拡大した。

支援プログラムのひとつに教育サポートがあり、教育の機会に恵まれないアフリカの貧しい家の子どもたちの為に、広く海外から経済的里親を募り支援を行っている。この経済的里親はＰＦＡペアレントと呼ばれ、彼らの援助によって多くの子どもたちが小学校、中学校に通っている。日本にも事務局があり、新聞、雑誌等の広告を通じて、積極的に支援を呼び掛けている。

アシスエデンも支援の対象国に指定されており、西暦二〇〇五年の国連による『アシスエデン・国家廃絶決議案』によって同国が先進国の世界地図から抹消された後も、変わらぬ支援が続けられていた。アシスエデンに於けるＰＦＡの事務局は、シャングのシティにオフィスを構えていた。

時は西暦一九九〇年。チポが五歳から六歳にかけて、であるからまだチポがチポ・トウカであった時代のことである。ＰＦＡアシスエデン事務局は、貧しいトウカ家のチポに教育支援を行うことを決定した。チポの担当者は、アリス・ヘンダーソンという二十五歳の英国女性であった。

ＰＦＡではＰＦＡペアレントに対し、例えば国や性別などと言った、どんな子どもを援助したいかという希望は一切考慮せず、無作為に支援を受ける子どもとのカップリングを行っており、それは現在も変わらない。チポと彼女のＰＦＡペアレントの場合も同様で、誰が選ばれたかと言うと、その頃ＰＦＡに教育支援を申し込んでいた日本人男性、海野保雄 (三十五歳) であった。彼には妻の美鈴と、一人娘の美砂がいた。

海野保雄はチポの小学校入学前と、チポが小学校、中学校に通う間の、合わせて約十年間、チポへのサポート、具体的には毎月二万円を継続してＰＦＡに送金することを約束した。それだけの金額があれば、チポ一人の教育費並びに生活費用までも賄うことが出来たのである。こうしてチポの教育支援プログラムはスタートした。支援の期間中ＰＦＡから定期的にチポの成長レポートが海野に郵送されると共に、チポと海野はＰＦＡを介してエアメールのやり取りが出来た。

入学準備が整い、チポが無事シャング小学校に入学すると、チポの父アポと母ミポから海野宛に感謝のエアメールが送られた。ただしアポもミポも貧しさゆえ小学校すら充分に通えず、グリラ語を話すのがやっとだった。そこで彼らのお喋りを英語に翻訳したものプラス日本語訳 (日本事務局による) が、海野の元に届いたのである。

『遠い国の友、ヤスオ・ウミノに感謝します。
　娘のチポは無事シャング小学校に入学しました。毎日元気はつらつとして小学校に通い、勉強に励んでいます。これもヤスオのお陰です。あなたに多幸あらんことを、いつも家族全員で祈っています。
　チポ・トウカに代わって、アポ・トウカとミポ・トウカより』
　加えて『今後チポが小学校で英語を習うようになれば、チポの成長と共に彼女直筆の英語の手紙があなたのお手元に届くようになるでしょう』と、アリス・ヘンダーソンの追記が為されていた。
　その言葉通り、チポは毎日一生懸命勉強し英語も上達した。チポの成長の姿を、海野は三ヶ月に一度のペースで送られて来るＰＦＡ発のエアメールによって知ることが出来た。アリスからの成長レポートにはその時々のチポと家族の写真が添えられ、加えて毎回チポ直筆の英語の便りも読むことが出来た。海野は実の娘である美砂の成長と同様に喜び、毎回必ずチポに英語で返事を書いた。
『親愛なるチポ、お元気ですか。
　わたしの住む日本の横浜は、国際的な港町です。夜の景色がそれは美しく、海も青く、とてもきれいです。わたしは海が大好きで、時間があればいつも海を見にゆきます。海を見ながら、アシスエデンはどんな国なんだろうといつも想像します。それがわたしの生活の、楽しみのひとつになっているのです。
　どうかチポが学校生活をエンジョイ出来ることを、心より祈っております。
　それでは、海野保雄』
　文面の通り、海野は海が好きであった。海が好きで、波の音が好きで、時間が許せば一日中でもぼんやりと海を見ていられる、そんな男だった。

　時は流れ、チポが十歳の春。小学五年生に上がったチポは両親と共にシティのチャペルにゆき、そこで洗礼を受けクリスチャンとなった。チポは親思いの、聡明で心のやさしい少女になっていた。そんなチポが、或る時こんなエアメールを海野に送った。
『親愛なるヤスオ、お元気ですか。
　いつもあなたの海の話を読むのが、わたしの何よりの楽しみです。でもご存知の通り、わたしの国アシスエデンには海がありません。シャングの村には湖がありますが、湖と海は全然違いますか。今日五年生の社会科の教科書に海の写真が小さく載っているのを見付け、わたしは胸がワクワクしました。けれど残念ながらそれだけでは、ヤスオ、あなたがわたしに語ってくれた、果てしない海の広さも、透き通った海の青さも、そして海の波音の美しさも、感じることは出来ません。ああ、一生に一度でいいから海を見てみたい。海の音をこの耳で聴くことが出来たなら、どんなにか素敵なことでしょう。また、海の話を聞かせて下さいね。楽しみにしています。
　いつも変わらぬサポートを、ありがとうございます。あなたへの尽きぬ感謝の思いは、とても言葉で言い表せるものではありません。それでは、チポより』
　このチポの海への憧れに対し、海野はどうにかしてチポに海を体感させて上げたいと心から願った。彼は一生懸命、知恵を絞った。

例えば、海水や砂浜の砂を送ってはどうか。けれど海自体をイメージ出来ないチポには、ただの水と砂の粒に過ぎないのではあるまいか。従って、これは没。

では海の音をカセットテープに録音して送ってみるのはどうか。しかしこれにも問題があった。なぜならチポの家に、カセットプレーヤーがあるとは思えないからである。加えて高価なプレゼントは遠慮してくれと、アリスからの要請も受けている。それに灼熱の国では、磁気テープなど直ぐに傷んでしまうのではないか。その点も気になった。これらのことから、この案も諦めた。

では仕方がない。安易ではあるが海の写真を送ることとしよう。取り敢えず横浜の海の写真を、美鈴そして美砂と三人で写った家族の記念写真と共に送ることにした。しかしそれだけでは矢張り何か物足りない。他に何か妙案はないものだろうか。

海野は真剣に悩んだ。幾日も大桟橋に足を運び、じっと海を見詰め、海に問い掛けた。そんな海野に、海はただ港に寄せ返す波音を聴かすのみであった。海野の耳に響く、波止場に打ち寄せる潮騒また潮騒……。

ああ、やっぱり海の音はいいなあ。そうだ、やっぱりチポには、この海の音を聴かせて上げたい。午後の大桟橋に佇みながら、海野は思った。でもカセットテープは駄目。ではどうやって。

悩める海野。青い空から降り注ぐ午後の陽射しが、きらきらと海の面、寄せ返す波に当たって、それは眩しく煌めいていた。海野はその黄金色の煌めきが、丸でオルゴールの音色のように思えた。オルゴール……。

そうだ。海野ははっと閃いた。オルゴールだ。チポにオルゴールを贈ろう。勿論、ただのオルゴールではない。それは海を感じさせる、海の潮騒を奏でるオルゴールなのだ。

オルゴール。これなら電気もいらないし、高価でもない。それにオルゴールさえ壊れない限りは、半永久的に聴くことだって出来るではないか。よーし、決まり。

こうしてチポにオルゴールを贈ることを思い付いた海野であったが、すんなりとはいかなかった。直ぐに問題に直面した。なぜなら海を感じさせる、海の潮騒を奏でるオルゴールなどというものが、市販品には見当たらなかったからである。しかしそれも当然と言えば当然。

ならば。海野は決意した。いっそのこと自分で作ってしまえ。海をイメージさせる、あたかも海の潮騒を思わせるメロディを自作し、それをオルゴールに奏でさせよう。海野はそう考えた。詰まりメロディもオルゴールも自作。

早速海野は若い頃弾いていたフォークギターを使って、彼なりに海の潮騒を思わせるメロディを作曲した。

メロディが出来上がると、今度はオルゴール本体を個人で作れるものなのか否か調べた。あれこれと調べてはみたが、結果は芳しくなかった。結論として、個人で作るのは困難だと分かった。仕方なく海野は、オルゴールの製作会社に発注することにした。

先ず自作のメロディを、カセットテープに吹き込んだ。そして出来上がったテープを『サンキョー』というオーダーメイドでオルゴールを製作してくれる会社に持ち込んだ。するとオルゴールは直ぐに完成した。費用は十万円したが、出来上がったオルゴールは納得のいくものだった。海野は満足した。

シリンダータイプの三十弦オルゴールで、演奏時間は四十秒。外装はゴールドのオル

ゴール本体が見える、透明なプラスチックケースにした。シンプルではあるが、この方が下手に洒落た木製の箱型タイプ等より長持ちしそうに思えたからである。それに同等の市販品なら千円もしない筈であるから、高額だからとＰＦＡに断られる心配もないであろう。

海野は完成したオルゴールを、直ぐにチポへと送った。こうして一人の日本人の中年男性の願いを込めたオルゴールは、遥々海を越え、ＰＦＡ経由でアリスの手からチポへと届けられたのである。

オルゴールに添えられた、海野のチポへの便りはこうであった。

『親愛なるチポへ。

お元気ですか。今日はあなたに、ささやかなプレゼントを送りました。これはオルゴールと呼ばれる楽器の一種で、ネジを巻けば音楽が流れるようになっています。流れて来るメロディは、わたしなりに可能な限り海の音に近いものになるよう作りました。これを聴いて、あなたが少しでも海を感じられたら良いのですが。

同封した海の写真と共に、楽しんでもらえたらと思います。ついでにわたしの家族の写真も同封しましたので、御覧下さい。右が妻の美鈴、中央が娘の美砂、そして左がわたしです。

では、また。海野保雄より』

しかし生まれて初めてオルゴールというものを目にしたチポは、戸惑うばかりだった。それを見たＰＦＡのアリスがにこっと笑みを浮かべながら、チポに語り掛けた。

「どうしたの、チポ。ヤスオからの折角の贈り物なんだから、遠慮せず手に取って御覧なさい」

アリスに促され恐る恐る箱からオルゴールを取り出すと、チポはそっと自分の掌に乗せた。

「そう、そのネジを巻くのよ」

アリスに言われるまま、チポは無言で頷き、恐る恐るネジを回した。一回、二回……。すると海野のオルゴールが息を吹き込まれた小鳥のように、魂が宿った生命体のように、チポの掌の上で海野のメロディを奏で始めた。ゆっくりゆっくりと、それはやさしい音色、旋律だった。

うわあ……。吃驚したチポの顔は、けれど直ぐに笑みへと変わった。くすぐったそうにチポは微笑んだ。眩しいシャングの午後の陽が差し込むように、チポの頬に見る見ると光が拡がり、少女の瞳は眩しく煌めいた。その顔は宝石箱の蓋を開けた乙女のように、きらきらと輝いていた。どきどき、どきどきっ……、そしてチポの胸は感動に震えていた。

吸い込まれたようにじっとオルゴールに耳を傾けるチポに、アリスは静かに微笑み掛けた。

「良かったわね、チポ。こんな素敵なプレゼントを頂いて。次のレターでヤスオに御礼を伝えなきゃね」

はにかみながら、チポは頷いた。

海野からもらったピカピカに光るゴールドのオルゴールは、チポにとって正に衝撃的なプレゼントであり、その後の彼女の人生に大きな影響を与えた。チポにとってオルゴー

ルは単なる玩具ではなく、それは魔法の箱であり、単調だったそれまでのチポの暮らしを一変させた。

チポはオルゴールを自分のベッドの棚の引き出しの中に、勉強道具や今迄受け取った海野からのエアメールと一緒に大事にしまった。引き出しに鍵はなかったが、盗む者など誰もいない。唯一心配なのがやんちゃ坊主である弟のタポ。弟が悪戯をしないように、母ミポからしっかりと注意してもらった。

本当なら学校に持っていって自慢し、みんなに聴かせて上げたかった。しかしアリスから禁じられた。シャング小学校に通う子どもたちの家は何処も貧しかったが、みんながＰＦＡペアレントのサポートを受けられる訳ではなかった。そこへチポがＰＦＡペアレントから貰ったという魔法の箱のようなオルゴールを持参しようものなら、生徒たちの間に羨望と同時に嫉妬や不満が生じるであろうことは言うまでもない。またＰＦＡペアレントのサポートを受けている他の生徒が自分も欲しいと、自身のＰＦＡペアレントにおねだりすることも考えられる。アリスはそこいらを大いに心配したのである。

だから学校が終わるやチポは一番に飛んで家に帰り、先ずオルゴールの所在を確かめるのだった。それからそれは大事に大事にオルゴールを取り出し手に取ると、ゆっくりと丁寧にネジを巻いた。すると変わらぬ音色と旋律が、チポの耳を満たした。チポはしばしその音に酔いしれた。チポにとってそれは夢のひととき、至福の時間であった。

その後は夢から覚めたように、チポは家事と勉強に追われた。ミポを手伝って夕ごはんの支度。家族揃っての晩餐を済ませ、再び後片付けのお手伝い。それから学校の予習と復習。加えて英語の読み書きを済ましたら、子どもとしてはもう就寝の時間。外はもうすっかりまっ暗である。それに停電の時は何も出来ないから、就寝の時間は更に早まった。

でもチポはベッドに入る前に、雨天でなければ必ずオルゴールと共に表に出た。家の前に出て、月の光と幾千万の星々の瞬きの下でしばしオルゴールに耳を傾けた。あたかも月と星たちに聴かせるかの如くに。

家の前で立って聴いている時もあれば、それから集落の近くにある『エデンの森』の『トモロウの木』の下に腰を下ろして、膝を抱えながら聴くこともあった。いずれにしてもチポがオルゴールを聴く時は、いつもひとりぼっちだった。それは他人には聴かせたくないと言うような度量の狭さからでは決してなく、一人でいたいチポを集落のみんなが邪魔せず、そっとしておいてくれたからである。

とは言っても矢張りチポのオルゴールのことは、一時期集落の中でも大変な話題になった。

「チポが何か不思議な玩具を持っているそうだね」

「いや、あれは玩具じゃないんだよ。何でもオルゴールと言って、楽器の一種らしい」

「楽器かあ。それにしちゃ、随分小さいね」

「何でもジンバブエの、ムビラが起源だそうだよ」

「成る程、ムビラかあ。道理できれいな音だと思った」

「あの音が聴こえて来たら、ああ、チポが学校から帰って来たんだなあって直ぐ分かる」

「ほんと。あの子、すっかりあの魔法の箱に夢中なんだから」

シャングの村の夜の静寂、或いはエデンの森の深い沈黙の中で、また集落の家々から漏れ聴こえ来る人々の談笑のざわめきの中で、チポはいつも目を瞑りオルゴールを聴き

ながら、以前海野がエアメールの中で語ってくれた海の話を思い出すのだった。
『海とはね、この地球で初めて生命が誕生した場所なんだ。だから海は、わたしたちすべての生きものの故郷なんだよ。海はいつでもやさしく、わたしたちに歌い掛けてくれる。いつまでもいつまでも、わたしたちが死んだ後も、たとえ人類が滅び去ったとしても。それでも海はやっぱり絶えることなく歌い続ける。海の歌はね、すべての命の、子守唄なんだよ』

海の歌は、すべての命の子守唄……。チポは海野のオルゴールの旋律と音色を、まだ見ぬそしてまだ聴いたことのない海の波音、潮騒に重ね合わせた。いつかチポは、オルゴールに名前を付けた。その名は『ララバイ・オブ・シー』。

シャングの村の片隅、ハルカ砂漠から吹いて来る砂混じりの風の中で、毎日毎晩チポの聴くララバイ・オブ・シーが鳴っていた。きらきらと瞬く星空の下で、星々の瞬きと共に鳴り響くララバイ・オブ・シーの音色に包まれながら、チポはまだ見ぬ、いやもしかすると死ぬまで目にすることのない海というものを、シャングの夜の暗闇の中に夢想した。一生耳にすることもないであろう海の音を聴くその日、その時を、そして一途に待ち焦がれるのだった。

海への憧憬に瞳を輝かせ、胸をいっぱいに膨らませたチポはララバイ・オブ・シーを大事に手に抱えながら家に戻り、硬いベッドの上で眠りに就いた。ララバイ・オブ・シーは飽きることなく褪せることなく、変わることなく大切なチポの宝物であり続けた。

# (四) チポの夢

# (四) チポの夢

ドンドコドン、ドンドコドン、ドンドコ、ドンドコ、ドンドコドン……。威勢の良いジャンベが鳴り響く。合わせて、チャッチャカチャ、チャッチャカチャ、チャッチャカ、チャッチャカ、チャッチャカチャ……。マラカスも軽快にリズムを刻む。お次は、ピーヒョロロ、ピーヒョロロ、ピーヒョロ、ピーヒョロ、ピーヒョロピー……。アシスエデン名物、横笛楽器のユートが、野鳥にも負けない澄んだ音色で人々を民族舞踏のダイスへと誘う。民族音楽パラダのオープニングである。

リズムに乗った集落の大人も子どもも立ち上がり、手を思い切り空に向け、踊り出さずにはいられない。みんなが踊るダイスはちょうど日本の阿波踊りを更にスピードアップさせたふうで、狂ったように絶叫し、くるくると激しく回転しながら踊るのである。

チポが初めてパラダを聴いたのは、物心付いてまだ間もない四歳の時。隣家の娘さんの婚礼の儀式の時であった。普段は生真面目で大人しい集落の人々がダイスに熱狂する姿に、言い知れぬ違和感を覚えたのをチポは今も忘れることが出来ない。正直なところチポは、ただ騒々しいだけのパラダもダイスも好きにはなれなかった。兎に角みんな何かに取り憑かれたかのように、我を忘れて踊り狂う。何が楽しいのかしら。何処にそんなパワーが潜んでいたのかと驚く程に、人々は時を忘れ、大声で歌い絶叫し、そして踊り明かすのである。収穫祭、ハロウィン、クリスマス、復活祭、結婚式……。

そして葬儀の時ですら、そうであった。本来なら人の死を悼み、死者との別れに涙し、故人が精霊となって安らかに天国へ赴けるよう、厳かに見送るのが礼儀なのではあるまいか。まだ子どもながらも、そう思うチポであった。なのにシャングの大人たちと来たら、丸で目出度いお祭りか何かの如く陽気に騒ぎ、賑やかに歌い踊り明かすではないか。

チポは集落のみんなのことが大好きだったけれど、このバカ騒ぎの習慣だけはどうしても好きになれず、パラダとダイスには上手く馴染めずにいた。年々成長し大人に近付いてゆくにつれ、その思いは強くなる一方だった。そんなチポの孤独を慰めてくれたのも、矢張り海野のオルゴール、ララバイ・オブ・シーであった。

十二歳になったチポは、海野の援助によって無事シャング小学校を卒業した。しかしトウカ家は相変わらず貧しく、加えて今度は弟のタポを小学校に入れなければならない。よってチポの中学への進学など、とても出来そうになかった。そこでアリスが奔走し、タポにＰＦＡペアレントが見付かった。チポへの援助も海野が継続して行い、無事チポは中学に入学することが出来た。

チポが通う中学は、シティにあるトピア北中学校だった。中学には制服があった。上着もスカートも紫で、襟に二本の白いラインが入り、細長い白のネクタイを締めるセーラー服だった。チポは真新しい制服に身を包み、白いショルダーカバンを下げ、胸弾ま

せてトピア北中学校に通い始めた。しかし自転車などないチポの家。毎日早朝に起きて集落の他の中学生たちと共にぺちゃくちゃお喋りしながら、五キロの道を延々と約二時間掛け、果てしなく続く緑の農場地帯の中をてくてくと歩いてゆくのである。ただしトラックや車の交通量も多いから、道はちゃんと舗装されていた。

まだ薄暗い夜明けの地平線から陽が昇るのを眺めながら歩いていると、いつしか頭上には眩しい青空が広がっていた。スコールの時はカバンを大事に胸に抱え、体はびしょ濡れになりながら通学路を急いだ。

トピア北中学校には立派な校舎があり、シャング小学校の時のように雨風に授業が妨げられることはなかった。集落の同い年の友だちの中には中学に行けず或いは自ら辞退し、親の農作業を手伝い、既に働いている子もいた。だからチポは常に感謝の念を抱きながら、尚一層勉学に励んだ。往復四時間の道も苦にはならなかった。ただ家に帰る時間が遅くなり、その分ララバイ・オブ・シーを聴く時間がめっきりと減ってしまったのも事実である。勉強時間も増えて、ゆっくりとオルゴールなど聴いていられなくなった。それがチポの唯一の不満だった。

中一の夏、そこでチポは或ることを思い付いた。大好きなララバイ・オブ・シーのメロディをハミングで口遊めばいい、或いは口笛で。そうすれば大切なララバイ・オブ・シーを、常に自らの唇に携えておけるではないか。いつでも好きな時に、思い切り楽しめるではないか。よーし。

チポは長い通学路の途上や学校の休憩時、時間を見付けてはララバイ・オブ・シーのメロディを口遊んだ。パラダの祭囃子のような賑やかな音楽しか知らず、それまでパラダの歌ばかりを口遊んで来たチポは、甘く切なく繊細でやさしいララバイ・オブ・シーの旋律を口遊む喜びに浸った。

しかしハミングと口笛だけでは、段々と物足りなくもなって来た。そこでチポは、ララバイ・オブ・シーのメロディに歌詞を付けることを思い立った。自作の詞、自分の思いを言葉にして、思い切り歌うことが出来たなら、どんなに素敵だろう。よーし。その日からチポは瞳を輝かせ、ララバイ・オブ・シーの詞を書くのに夢中になった。それは数日を費やした。

詞はグリラ語で紡いだ。生まれた時から馴染んでいる言語の方が、自分の気持ちを素直に表現出来ると思ったからである。詞が完成するとチポは先ずエデンの森に行って、ララバイ・オブ・シーの歌をお披露目することにした。しかし、誰に対して。それは森のトモロウの木々に、そして森を吹く風に向かって。

エデンの森は昼間でも、あまり人が訪れない場所である。小動物がいて野鳥たちがいて、彼らの楽園だった。だからそこへゆけば、必ずひとり切りになれた。そして誰にも遠慮することなく、思いっ切り声を出して歌うことが出来たのである。

鳥たちの鳴き声と、ハルカ砂漠から吹いて来る風がトモロウの木々の葉を揺らす音の中で、チポはララバイ・オブ・シーの歌詞を口遊んだ。少し緊張しながら歌い出した。だから最初は震える声で、けれど徐々に緊張は解け、まっ直ぐ澄んだ声となって。するとチポを祝福するかのように、眩しい午後の木漏れ陽がチポの全身を包み込み、その頬を、唇を、きらきらと照らした。

チポは目を閉じて、思い浮かべずにはいられなかった。まだ見ぬ海を、そして耳にし

たことのない海の歌を。すべての生命の母なる海への畏敬の念と感謝の気持ちに、その小さなハートを震わせながら。

『いつか限りない
　海の青さとひとつになって
　みんなの涙の海を
　青く青く染め上げよう

　いつか終わらない
　海の調べとひとつになって
　疲れたみんなを
　やさしい眠りへと導こう

　いつかわたしは
　世界中の海になって
　たくさんの子どもたちを産もう
　いつまでもいつまでも
　この大地から
　笑い声が絶えぬよう』

　エデンの森の静寂の中に、チポの歌声が響き渡った。それは丸で妖精か或いは天使の歌声かと疑う程の美声であった。チポの声は森中を震わせた。鳥たちは嫉妬しながら沈黙し、ハルカ砂漠の風は讃えるようにチポの頬を撫でていった。動物たちは木の葉の陰、木の穴の中や木の根元のほら穴の中に身を潜めながらも、この森にどんな女神が降臨したのかと恐る恐る顔を出した。チポは陽が沈むまで時を忘れ、幾度も幾度も繰り返し歌い続けた。

　チポの歌声に包まれたエデンの森は、正にパラダイスだった。チポの歌を子守唄に動物たちは眠り、チポの歌に合わせてハミングするように木々の葉が風にさらさらとさざ波を立て、虫たち、鳥たちは森の中をゆっくりと夢見るように飛び回っていた。透き通ったチポの声はハルカ砂漠にまで届き、荒涼と広がる砂漠の砂たちですら笑みを浮かべ、月の光にきらきらと輝いていた。こうして生きとし生けるものみながうっとりと、また涙しながら、チポの歌を聴いているのだった。

　チポ自身もまた歌うことに興奮を覚え、酔いしれていた。嬉しくてならなかった。歌うということは、こんなにも気持ちの良いものなのか。歌とはこんなにも楽しく、人を夢中にさせ、虜にしてしまうものなのか。事実チポは、歌うことの虜となっていた。

　自分の思いで綴った歌詞を、大好きなララバイ・オブ・シーのメロディに乗せ、腹の底から声を出し、思い切りこの大気中へ、この世界へと放つ、即ち歌うということ。それは自分というものを歌によって表現し、限りなく自分を高め、自分が今この世界の中に生きているということを確かめること。そういうことなのだと、チポは感じた。

　ああ、私は歌いたい。歌うことが、わたしのすべて。だって歌は、わたしの存在そのものなのだから……。

「何してんの、チポ」

　ところがそこへ突如、聞き覚えのある声がした。空腹も忘れまだまだ歌っていたかったチポの耳に、その声は飛び込んで来た。そして魔法が解けたように、チポは夢から現実へと一瞬にして引き戻されてしまった。気付けば目の前には、母ミポ・トウカが立っていた。いつまでも帰って来ない我が娘を心配し、集落中を捜し回った後、ここまで迎えに来たのである。
「ママ」
　ミポに返事をすると共に、お腹がぐうーっ。もうお腹はぺこぺこ。眩暈に襲われふらあっとなって、ミポの腕に寄り掛かった。
「ばかね。何してたのよ、あんた。みんな晩ごはんも食べずに待ってんだから、さっさと帰るわよ」
　黙って頷き、ミポに手を引かれながらエデンの森を後にしたチポ。しかしこの日は生涯忘れることの出来ない、大切なチポ中学一年の夏の日となったのである。
　こうして歌う喜びと巡り会い、歌うことが大好き、人生の中で最大の楽しみとなったチポは、最早歌わずにはいられない。そこでシャングの小さな歌姫は、毎日夕ごはんの後こっそりとエデンの森に行って、ひとりぼっちで歌うようになったのであった。

　海野保雄の支援を受け、順調に中学二年、三年と進級したチポは、相変わらず歌うことが好きだった。ララバイ・オブ・シー以外にも、自分で詞とメロディを作り、レパートリーを増やしていった。しかし誰かに聴いてもらおうなどという考えは、一切なかった。ただ個人的な楽しみとして、そして生きてゆく支えとして歌うばかりだった。従ってチポの主なる歌のステージは夜のエデンの森であり、チポの歌を聴いているのは森のトモロウの木々、月の光、星々の瞬き、ハルカ砂漠の風と砂、野鳥、動物たち、虫たち、そして足元に咲く草花のみであった。
　ところが或る日、集落のみんなの前で歌わされる羽目になった。と言うのは夜のエデンの森に、人が誰も来ないかと言えばそうでもなく、時には年寄りが散歩に足を踏み入れたり、若い恋人たちが人目を忍んでデートなどといったこともある。その際にひとりで歌っているチポと遭遇し、みんなは目を丸くした。そして、トウカの娘はいつも森で歌を歌っている、しかもその歌はとても上手く声もきれいだ、などと言う噂や評判が立った。そんな中、その年のハロウィンのお祭りを迎えたのである。
　ハロウィンのお祭りは、いつものように賑やかなパラダとダイスで幕を開けた。お祭りの場所は集落の広場で、集落のみんなが集合した。進行役は長老のバボバ・ソトムである。お祭りが順調に進んでゆく中、突如バボバがチポを呼んだ。
「チポや、ちょっとこっちへおいで」
　吃驚したチポは一体何事なのかと緊張しながら、バボバの待つ広場の中央へと出ていった。バボバは皆の前でチポに問うた。
「おまえは、歌が上手いそうじゃないか」
　えっ。行き成りそう聞かれてもどう答えれば良いのか分からず、チポは心臓をどきどきさせた。無言のままじっと俯くチポに、バボバは更にこう告げた。
「チポや、どうだろう。今からここでおまえのその自慢の喉を、みんなに披露してくれ

ないか」

　えっ。またまたチポは吃驚して、目をくるくると丸くした。嘘でしょ、わたしがみんなの前で歌うなんて。しかし広場に集まった観衆から、盛大な拍手が湧き起こった。

「いいぞ、チポーーっ」

「がんばれーーっ」

　これでは何もせずに引き下がる訳にもゆかない。見れば親のアポとミポが、嬉しそうにまた誇らしげにチポを見守っているではないか。でも、上手く歌えるかなあ、わたし。こんな場所で、みんなの前で。どきどき、どきどきっ……。チポは不安と緊張に苛まれた。しかし透かさず、バボバが耳打ちした。

「チポや。リラックスして、いつも通りに歌えばいいんだよ。ほら、みんな心待ちにしているじゃないか」

　その言葉にチポは腹を決め、バボバに無言で頷いた。

「よし、良い子だ。そう来なくちゃ」

　チポの頭を撫でると、バボバは改めてみんなに紹介した。

「良いか、皆の衆。これからこの子が歌を聴かせてくれる。大いに楽しんでくれ。それじゃ、チポ。用意はいいかね」

　マイクなどないし、伴奏もない。青空の下のアカペラである。ごくりと唾を飲み込み、チポは気を鎮めようと深呼吸。でも心臓は、ぱくぱく、どきどきっ……。こんなに緊張したのは生まれて初めて。再び観衆の拍手が起こった。恐る恐る顔を上げ広場を見回すと、そこにはアポとミポの顔が。ふたりはじっとチポを見守っていた。拍手が収まり、広場はしーんと静まり返った。みんなチポが歌い出すのを、今か今かと待ち構えている。どきどき、どきどきっ……。緊張はピークに達したが、もう逃げ出す訳にはいかない。目を瞑り、チポは静寂のエデンの森を脳裏に思い浮かべた。

　そうよ、ここはエデンの森の中。今ハルカ砂漠の風が吹き、わたしの目の前にいるのは、無邪気なリス、兎、梟、カメレオンに、野鳥たち。チポは震える唇を開いた。そしてまだ見ぬ海への憧憬で思いを一杯に満たしながら、遂に歌い出したのだった。

『いつか限りない

　海の青さとひとつになって

　みんなの涙の海を

　青く青く染め上げよう……』

　歌い出すと、もう止まらない。唇と声の震えはいつか消え去り、緊張も目の前の観衆もすべて忘れ、チポは夢中で歌った。思い切り、かつ堂々と歌い上げた。

　歌いながら、チポは思った。人前で歌うってなんて気持ちいいんだろう。もっと自分の歌を、みんなに聴いてもらいたい。もっとたくさんの人の前で、思い切り歌いたーーーい。そしてみんなに感動を与え、みんなをテアズにしたい。みんなの胸を震わせたいの。ちょうどわたしが生まれて初めて、ララバイ・オブ・シーを聴いた時のように……。

　それは、それまでずっとアシスエデンというアフリカ大陸の貧しい小国の、シャングという片田舎で平穏に、平凡にひとりの大人しい少女として生きて来たチポが、生まれて初めて抱いた、夢、であった。

　歌い終えたチポは頬を上気させながら目を開き、満足げに広場中を見渡した。ところ

がである。観衆の反応は、しかし今ひとつだった。それどころか、みんなはむしろ白けたように、しーんと沈黙したままだった。中には退屈そうに大欠伸したり、居眠りする者さえちらほら。ババも釈明の為に、慌てて飛んで来た。

「これは皆さん、失礼しました。チポ、もう下がっていいよ」

　ええっ。チポはどんなリアクションをすれば良いか分からないまま、さっさと身を引いた。みんなの反応に、正直がっかりだった。どうしたんだろう、みんな。わたしの歌、もしかして、詰まんなかったのかなあ……。

　観衆に向かって、ババは続けた。

「皆の衆、しんみりした、おセンチな歌のせいで、折角盛り上がっていたお祭りに水を差してしまって申し訳ない。さ、気を取り直して、威勢の良いパラダのリズムで、再び盛り上がろうではないか」

　イエーイ。歓声が湧き上がった。広場の中央にパラダのバンドが現れ、ドンドコドン、ドンドコドン……と始めるや、観衆も踊り出し、直ぐに活気を取り戻した。そうなんだよ、なあ、皆の衆。音楽ってのは、こうでなきゃ。陽気で、胸が弾けて、ついつい心も体も躍り出す。ウキウキ、みんなテアズ、テアズ。チポの歌の余韻など何処かへ吹き飛ばし、ハロウィンのお祭りは賑やかに過ぎてゆくのだった。

　一方チポはと言えば、自分の歌に対する観衆の冷やかな反応とババの言葉に、その小さな胸を痛めていた。しんみりした、おセンチな歌、ですって……。チポはお祭りの人だかりから離れ、いつかエデンの森の中にひとりぽつんと佇んでいた。その目に一杯の涙を浮かべながら。

　しかし思えばババの言葉も、集落のみんなの反応も無理からぬことではあった。なぜなら生まれた時からずっと賑やかなパラダに慣れた彼らからしたら、チポの歌は確かに美しいメロディではあったけれど、繊細で感傷的過ぎる。あれでは静か過ぎて、折角のお祭り気分がしぼんでしまう。みんな、そう思ったのに違いない。

　チポの落胆は大きかった。堪えていた大粒の涙が、瞳から頬へとまっ直ぐに零れ落ちて顎まで伝い、音もなくトモロウの木の立つ地面へと落ちていった。

　この日のことがきっかけとなり、以後チポは集落の大人たちに段々と失望を覚えるようになっていった。チポの周りにいる大人たちは、みんな熱心なクリスチャンではあったけれど、お酒とお喋りも大好き。彼らの楽しみといったら、何と言っても酒を飲んで陽気に騒いだり踊ったりすること。年がら年中、何か起これば誰かの家や広場に集まって、お喋りばかりしている。確かにみんな明るくて元気だけれど、思春期のチポはそんなシャングの大人たちに上手く馴染めなかった。あんなこと、何が楽しいんだろう。あの人たちの人生の目的って一体何。わたし、あんな大人たちみたいになんか、絶対に成りたくなーーーい……。

　トピア北中学校に行けば、近代化されたトピアの中心部に詳しいクラスメイトたちが、自慢げに都市生活の便利さや華々しさばかりを話して聞かせるから、チポもついつい憧れを抱いてしまった。

「家の中にトイレもお風呂もあって、毎日快適なんだから」

「大人たちはスーツにネクタイに腕時計。エアコンの効いた綺麗なオフィスできびきびと仕事をこなし、がっぽりとお金を稼いでいるんだ。兎に角ね、洗練されててすべてが

クール」

「停電なんかしないから、ＴＶだって見放題なんだって。羨ましい」

　それに比べてシャングの村の貧しさ、大人たちの幼稚さときたら、何もかも下らな過ぎる。あーあ、わたしもトピアのお金持ちの家に生まれてくれば良かった。そしたら今とは全然違う人生を送れたのに。このままじゃわたし、一生死ぬまで貧乏な農婦で終わってしまう。ああ、なんてこったい……。それ程までにチポは、向学心、向上心共に強い少女でもあった。

　ため息を吐きながら、気付けばいつも口遊んでいるララバイ・オブ・シーの歌。チポにとって歌うことだけが、唯一の慰めだった。しかし歌う場所は相変わらずひとりぼっちの、聴いてくれる人など誰もいないエデンの森。一度は、たくさんの人の前で歌いたい、自分の歌でみんなの胸を震わせたい、そう願った想いも今は空しく、チポの胸に生まれた夢は泡粒の如く潰えた。

# (五) チポとカポ

(11) ゥ ホ ど ル ル

# (五) チポとカポ

西暦二〇〇〇年。十五歳の春、チポは家族の協力と海野保雄の支援によって、無事トピア北中学校を卒業した。在学中、成績優秀なチポに対してＰＦＡのアリスから、もしチポが希望するなら海野に支援継続をお願いしてみるからと、高校進学を勧められた。

高校かあ。

そこでチポは大いに悩んだが、長女であるチポはトウカ家の農作業の貴重な働き手として当てにされている。それにシャングの近くに高校はなく、もし高校進学となればトピア中心部にある高校に通わねばならなくなる。そうなると家から歩いての通学など不可能であり、どうしても何処かに部屋を借り下宿せねばならなくなる。従って経済的負担は大幅に増え、海野に頼む支援額は少なくとも今の二倍に増額してもらわねばならなくなると言う。これまでの恩人であり、ララバイ・オブ・シーを贈ってくれ、かつ歌う喜びをも教えてくれた海野に、これ以上の負担を掛けさせる訳には絶対にいかない。

そう思ったチポは勉強は続けたかったが、やむなくアリスに進学辞退を申し出た。アリスはがっかりしたが、チポの気持ちを尊重し更なる説得はしなかった。

これにてＰＦＡを通じた、海野からチポへの教育支援は終了した。海野が四十五歳の時のことである。

しかしＰＦＡは以後もふたりの交流の手助けをしてくれたので、引き続きチポと海野はＰＦＡを介したエアメールのやり取りを続けることが出来た。

『親愛なるヤスオへ。

あなたのお陰で、わたしは小学校はおろか中学校までも通うことが出来ました。丸で夢のような日々でした。その中でわたしは実にたくさんのことを学ぶことが出来ました。これらはみんな、わたしの宝物です。

これからわたしは家の畑を手伝い、農作業に従事してゆきますが、あなたから頂いたすべてのことが、日々生きてゆくわたしの心の支えとなってくれることでしょう。あなたには本当に、どれ程感謝の言葉を述べても述べても足りないのです。にも関わらずあなたに何も恩返し出来ない自分が、歯痒くてなりません。

ヤスオ、どうか是非一度、わたしの国アシスエデンのシャング、そしてわたしの家に遊びに来て下さい。家族と共に熱烈に歓迎します。わたしも一生に一度で良いから、ヤスオの国へ行ってみたい。そしてヤスオと一緒に、ヨコハマの海を見てみたいです。

あなたから頂いたオルゴール、わたしはララバイ・オブ・シーと名付け呼んでいます、は今も大切に聴いています。それでは、あなたとあなたの家族に多幸のありますように。チポより』

チポからの便りを読んだ海野は、感慨に胸が詰まった。自分の毎月の僅かな援助によって、遠い国のひとりの少女が無事、中学まで通うことが出来たのだ。それにあのオ

ルゴールを贈ってから既に五年の時が経過しているにも関わらず、彼女は今も大事に聴いてくれているという。何という、素晴らしいことなのだろう。しかも特別な愛称まで付けて、呼んでくれているなんて。海野はチポに贈った、あのゴールドのオルゴールの姿を思い出さずにはいられなかった。あの時一生懸命に作って本当に良かったと。

海野とて行けるものならば、家族を連れてアシスエデンを訪ねたい。いやもし妻や娘が、そんな辺鄙な国なんて嫌だわ、などと言おうものなら、単独で渡航したって一向に構わないとすら思っていた。しかし実はこの頃、海野は体調が芳しくなかったのである。その為様子を見て、もし体調が回復したならば、その時は是非遠慮なくアシスエデンに行かせてもらおうと決めていた。ただし余計な心配をさせないよう、チポへの返事には体調不良に関しては一切書かなかった。

『親愛なるチポへ。

中学校卒業、おめでとう。よく頑張ったね。これからは御家族と共に、農作業にお励み下さい。わたしへの恩返しなど一切不要、何も気にすることはありません。今後もあなたが毎日元気でいてくれることが、何よりのわたしの喜びなのですから。わたしの方こそ、あなたと出会え、あなたが学ぶことの手助けが出来、加えてアシスエデン、シャング村のことも知ることが出来て、何物にも代え難い幸いでした。

あなたの国、あなたの家に遊びにゆきたいのは山々ですが、実はわたしはまだ一度として海外旅行というものをしたことがないのです。なかなか外国へ出る勇気と時間がありません。だから今は遠くから、あなたの幸せを祈らせてもらいます。ララバイ・オブ・シーとは、何て素敵なネーミングでしょう。ありがとう、チポ。オルゴール、大切にしてくれているのですね。

では、お元気で。海野保雄』

海野へのエアメールにも書いたように、中学を卒業したチポは、家の畑に出て働き始めた。

アシスエデンでは農地は国家が所有し、農民にその土地を貸し与えていた。ただし期間は無期限で、借地料の徴収も行われてはいなかった。シャングでは集落毎に必要なだけの土地が割り当てられ、各集落単位でその土地を管理していた。集落の農地は更に世帯毎に平等に割り当てられ、トウカ家には一ヘクタールの土地が与えられていた。トウカ家では農地の半分をトウモロコシ畑にしており、残り半分でトマトといもを育てていた。

チポは朝からアポ、ミポと共に出掛け、畑で働いた。それまでミポが行っていた作業をチポが受け継ぎ、ミポは徐々に家事に専念していった。アポはチポのことなど気にせず自分だけとっとと午前中馬車馬のように働いたら、それで彼の一日の労働は終わり。午後からは同じように農作業を済ませた集落の男たちと広場に集まり、ゴロンと横になって昼寝したり、お喋りしたり、兎に角ゆったりとくつろぐ。シャングの男たちの生活は、大体みんな、こんなものだった。

チポはと言えば麦藁帽子を被り、一日中畑でせっせと汗を流し黙々と働いた。畑は家から歩いて十分程の所にあり、昼になるとチポは一旦家に戻って、ミポとふたりでランチを取った。弟のタポは小学校に行っている為、まだ帰っては来ない。その後アポがいなくなった午後の畑に戻って、再びチポは黙々とひとりぼっちで働くのだった。若いチ

ポにとって農作業は覚えればそんなに大変ではなかったし、それに集落の中で特に親しい友もいなかったチポは他に特別やるべきこともなかった。

孤独。確かにチポは、集落の同世代の中で孤立していた。成る程中学を卒業した当初こそ、同じ年頃の娘たちの集まりにも積極的に顔を出していたものだったが、結局上手く馴染めなかった。

集落の家は何処も似たり寄ったりで、同じように貧しかった。従って他の娘たちもみんなチポと同じように、家の畑の手伝いをしていた。男たち同様に午前中働いたら年頃の娘たちも広場に集まり、午後のお茶を楽しむ。世界中どの国の娘たちもそうであるように、シャングの乙女たちもまた、ぺちゃくちゃといつ終わるとも知れない世間話を延々と交わすのであった。そうやって彼女たちの午後のひと時は夢の間に過ぎてゆく。そしてアシスエデンの娘たちも、やがて静かに年を取ってゆくのである。

シャングの人たちが飲むお茶は『サウダ』と呼ばれる、アシスエデンでのみ採れるほんのりと甘い日本の抹茶に似たエメラルドグリーンのお茶である。お湯でなくとも、水でも良く溶ける。

チポが娘たちの午後のお茶会に顔を出していた頃は、新米ということもあり、彼女はいつも仲間の輪の端っこに座して皆の話を聴いていた。昨日何処何処の家でこんなことがあったとか、今朝これだけトウモロコシが採れたとか、隣りの集落のポパ・ターザンという男が精悍でイケメンだとか、ムポ・カンガがセサ・ミカドに求婚したとか……。最初は新鮮さもあって興味を持って聴いていたチポであったが、同じ類の話ばかりが毎日のように延々と続くものだから、いい加減直ぐに飽きが来てしまった。

それに無理ないことではあるが、年頃の娘たちときたら恋と結婚のことしか頭になく、チポとしたらそんな彼女らが物足りなく思えてならなかった。虚しさを感じ、哀れに思い、幼稚にも思えた。そんな訳でいつしかチポは娘たちのお茶会に顔を出さなくなり、同世代の集まりから遠ざかった。しかしそうなると、集落の中で居場所がなくなってしまうのも事実である。今更高校に行きたいなどとも言えないし、中学校や小学校に戻る訳にもいかない。自然チポは孤立、孤高の人となり、ひとりでいるのを良しとするようになっていったのである。

農業に従事しながらもチポの向学心、向上心は変わることなく、常に知識欲、学びに飢えていた。が、生憎そんなチポの欲求と望みを満たしてくれるような場所も相手も、残念ながらシャングには存在しなかった。図書館などの文化施設は首都トピア中心部にしかなかったからである。よってチポの居場所は、唯一畑しかなかった。

そのうちチポは周りに人がいないのを良いことに、畑の中で歌うようになった。誰もいない広大な大地の中で、眩しい空と太陽と風の中で、それは気持ち良く思う存分歌うことが出来た。すると単調な畑仕事が楽しくなったし、何だか作物たちが自分の歌を聴いてくれているようにも思えた。そこで作物に向かって歌い掛けてみると、確かに作物が嬉しそうににこにこ笑っている気がする。作物も喜び、共に歌っている、そんな気がしてならなかった。そのせいかどうかは定かでないが、チポは自分の畑の作物の育ちが以前よりも良くなったように思えた。こうしてますますチポは、歌うことも農作業も楽しくなっていった。ひとりでいる筈なのに、いつもにこにこにこにこ、それは嬉しそうに作物に向かって歌い掛けながら、チポは畑仕事に精を出したのだった。

或る日、そんな畑の中の夢見る少女であり乙女であるチポの前に、ひとりの青年が現れた。チポより五歳年上のカポ・エンデである。

カポの家の畑は、チポの畑の隣りにあった。詰まりカポの家族も、チポと同じ集落に住む仲間だった。だからふたりは互いに、顔と名前位は知っていた。がまだふたり切りで言葉を交わしたことは、一度としてなかった。

隣りの畑とは言っても、農地の境界に沿って各々背高のっぽのトウモロコシ畑が広がり、視界を遮っていた。だからチポがもしも歌を歌わずただ黙々と働いていたならば、もしかするとカポはチポの存在、チポが直ぐ隣りにいることに一生気付かなかったかも知れない。けれどトウモロコシ畑を吹き抜ける風が、チポの歌声をカポの耳元へとそっと届けたのである。

カポは姿の見えない乙女の美声に心奪われ、胸をときめかせた。歌っているのがトウカ家の娘であることは、畑の場所からして見当が付いた。しかしそれにしても、何と美しい声なのだろう。丸で天使のようだ。

チポの歌を聴きながらの農作業は、カポにとっても楽しいものへと変わった。シャイな性格のカポであったが幾日かチポの歌を聴いた後、遂にチポに話し掛ける決意をした。それはチポ十六歳の、春の日の午後であった。

ザワザワザワーッ、ザワザワザワーッ……。トウモロコシ畑の葉を掻き分けながら、カポはチポの畑へと一歩足を踏み入れた。どきどき、どきどきっ……。胸の鼓動を高鳴らせながら、そしてカポは勇気を振り絞り唇を開いた。繊細な乙女を脅かさぬよう、そっとやさしく囁くように。けれど相手に届くよう、はっきりとした声で。

「ドリム (こんにちは)」

えっ。突然のカポの挨拶に、チポが驚かぬ筈はなかった。チポはちょうどカポに背を向け、トマトを収穫している最中だった。いつものように、トマトに向かって歌い掛けながら。しかしその歌声をピタッと止め、チポは恐る恐る振り返った。

「だーれ」

そこには、カポが立っていた。

カポ……。

チポは小さく、ため息を零した。一方カポは頬を強張らせながら、ガラス細工に接するが如くチポに向かって微笑み掛けた。

「素敵な歌じゃないか、チポ」

えっ。驚いたチポは、カポの顔を見詰めずにはいられなかった。なぜなら自分の歌を褒めてくれた人は、カポが初めてだったからである。

この時を境にして、チポとカポは徐々に言葉を交わすようになった。そして少しずつではあったが、接近していった。ただし畑で、ふたりだけでいる時に限って。集落という小さな世界では、若い男女が仲良くなると、直ぐに噂となって集落中を駆け巡ってしまうものであったから。

しかしふたりは直ぐに、恋に落ちた。

ふたりは互いに相手の畑を手伝い、作業が一段落するとトウモロコシ畑の陰に並んで

腰を下ろし、休憩を取った。カポはそれまで孤独だったチポの良き話し相手となり、唯一の彼女の歌の理解者ともなった。カポはいつも嬉しそうに気持ち良さそうに、チポの歌を聴いてくれた。チポもまたカポに心奪われ、少女から乙女へと成長し、胸をときめかせた。

そんなふたりの仲は直ぐに集落のみんなの知るところとなったが、誰も悪く言う者はいなかった。ハンサムとは言い難いが好青年のカポと、美人とは決して言えないが愛嬌があって聡明なチポ。ふたりとも大人しくて、真面目でシャイ。似た者同士、もし結婚したらおしどり夫婦になるわねえ、などと気の早い婦人たちは噂する始末。両方の家族も概ね好意的に受け入れたのであった。

集落公認の仲になると、畑仕事を終えた後もふたりは遠慮なく行動を共にするようになった。各々家で夕ごはんを済ませた後、エデンの森でデートを重ねた。カポと出会うまではエデンの森で風、動物たち、木や植物を相手にひとりぼっちで歌っていたチポであったが、今の彼女には愛するカポがいた。エデンの森でカポに向かって歌い掛けながら、チポはこう心に誓うのだった。

わたし、カポの為に歌いたい。これからもずっとわたしは、カポの前で歌い続けよう。

# (六) テロ、復興と結婚

(八) テロ、侵入と結婚

# (六) テロ、復興と結婚

しかしそんな幸福絶頂のふたりの前に、そして平穏なシャングの村に、突如悲劇が襲い掛かった。チポ、十八歳の夏のこと。悲劇、それはテロリストによる襲撃である。

テロリストとは言っても前述の如くその正体は、安定したゴリラン大統領の政権を転覆せんが為、欧米諸国具体的にはＣＩＡが養成し送り込んで来た傭兵たちのこと。そいつらの無慈悲残虐なる破壊活動が、とうとう我等シャングの村にも押し寄せて来たという訳である。

先ずシティが襲われた。複数のビル、建物に仕掛けられた時限爆弾が爆発し、人だかりの中に手榴弾が次々と投げ込まれた。

ドッカーーーン。

ドッカーーーン。

ドッカーーーン……。

辺りは一瞬にして炎の海と化し、煙の渦に巻き込まれた。テロだの爆弾だの、そんな物騒な類とは一切縁のなかった村人たちは、忽ちパニックとなり右往左往するばかり。女、子どもは悲鳴を上げ泣き出し、男たちとてただおろおろとする始末。

破壊されたのは雑居ビルの他に、市場、チャペル、救急病院、トピア北中学校。そしてアリスたちがせっせと働くＰＦＡアシスエデン事務局のオフィスが入っているビルも爆破され、アリスたちの職場は壊滅状態となってしまった。

襲撃はシティにとどまらなかった。傭兵たちは地方へ地方へと攻撃を拡大していった。そして或る日、村人たちがランチを終えて間もない時刻、チポの集落にも五人の偽武装ゲリラどもが乱入した。彼らは広場そして民家目掛け、次々と手榴弾を投げ込んだ。至る所で爆発音がし、家が倒壊する音、人々の悲鳴が木霊し、周囲に響き渡ったのであった。

集落は大パニック。民家の多くが崩壊し、夥しい数の死傷者が出た。広場の井戸は幸い無事であったが、広場の敷地内にある集会所、共同トイレはやられた。シャング小学校はそもそも校舎がなかったのが幸いし、襲撃に遭わず子どもたちは無事だった。

チポの弟タポも事なきを得た。チポの父アポは例によって広場で休憩中だった為、攻撃を受け大怪我をしたが、手足を失うまでには至らずに済んだ。母ミポは集落の主婦連中とシティの様子を見に行こうと、家を離れていた為無事だった。

そして我等がチポとカポのふたりは、いつものように畑にいて無事だった。しかしカポの家族、両親と妹は自宅にいた為攻撃をもろに食らい、全員死亡してしまった。他にも世帯全員死んだ家族や、家族を失った者も多数いた。

一瞬にして起こった白昼の悪夢であった。惨事の後、同日夕方、スコールが傷付いた血だらけのシャングの村に降り注いだ。雨を避ける気力すら失くした住民たちは皆、ず

ぶ濡れになりながら立ち尽くしたり、その場にしゃがみ込むしかなかった。彼らの頬に落ちる滴が涙なのか雨なのか、その区別すらつかなかった。

チポ、カポを始めとする生き残った村人全員がただ呆然とし、或いはすすり泣き、悲嘆に暮れるばかりであった。チポの家族のミポとタポは負傷した父アポを支え、チポは一瞬にして家族を失い悲しみのどん底に突き落とされたカポを懸命に励ました。

長老バボバもまた満身創痍であったが、落胆のみんなを鼓舞して回った。バボバの指揮の下、生き残った集落の人々はその日の夜から広場に避難し、一緒に野宿し励まし合い慰め合い、数日を共に過ごした。

本来ならばアシスエデン政府が率先して指揮を執り、傷付いた国民を救助せねばならない筈である。が何しろトピア中心部を始め被害は国土全域に及んでおり、とてもじゃないが追い付かない。シャング村の民衆は当面自分たち自身で何とか凌ぐしかなかった。

数日が経過した。当初は食事すら喉を通らない程打ちひしがれていたシャングの村民たちも、ようやく落ち着きを取り戻し、食欲も徐々に回復して来た。食料については各自の畑の作物があり、何とか食いつないだ。

村人たちは破壊された自宅の被害状況を把握し、今後どうすべきかを決めていった。修理で済みそうな家は修理を行い、そうでない家は取り壊して、新しく建て直すことにした。どちらにしろ自分たちの手でやらねばならない。しかし国全体で被害を受けた住居が多く、材料となる石と藁が不足した。その為シャング村への材料の供給は、まだ先になるとのこと。それまで集落のみんなは、住める家、修理の終わった家に身を寄せ合い、協力し助け合って暮らした。

チポたち一家も避難していた広場から、自宅に戻ってみた。しかし壁は崩れ落ち、ぺしゃんこになっていた。チポは壁の破片を払い除け、自らのベッドを捜した。ベッド自体はその片鱗を残していたが、ベッドの棚は無残にも粉々に壊れ、最早見る影もなかった。そして海野のオルゴールもまた然りであった。

プラスチックケースは吹き飛び、ネジはもぎ取られ、ゴールドのメッキは剥げ落ち、櫛は何本も折れ、筒はぺちゃんこ。これでは最早、演奏など不可能である。

予想はしていたものの、我がいとしのオルゴールのその変わり果てた姿にチポは言葉も出なかった。海野の贈り物、ララバイ・オブ・シーのあのメロディを、もう二度と聴くことは出来ない。それはチポにとって、魔法の箱の魔法が解けたようなものだった。

勿論チポは落胆したが、カポを始め集落のみんなはそれ以上に傷付いていた。自分にはまだ家族がいるし、カポだっているではないか。オルゴール位で嘆き悲しんでなどいられない。そう自分に言い聞かせたが、涙は止め処なくチポの頬を伝い流れ落ちた。それを見たカポが、やさしくチポの肩を抱き寄せ慰めた。

涙を拭うとチポは、破壊されたオルゴールのすべてのパーツを拾い集めた。それを麦藁帽子の中に入れ、家が復旧するまでそのまま大事に保管していた。

テロという名の謀略、偽りの破壊活動から一週間が経過した。しかしシャングの村人たちの心の傷は深く、みんなまだまだ沈んでいた。とは言えど彼らには、どうしても早急にやらねばならない一番大事なことが残されていた。それは、犠牲となった愛する家

族、同胞たちの葬儀、遺体の見送りである。

アシスエデンでは、遺体は火葬することになっていた。しかし火葬場は首都トピアの中心部に二箇所しかない。そこで従来シャングでは村で葬儀を行った後、遺族が同乗する車で遺体を火葬場まで運び、火葬した後、骨を持ち帰り村の墓に埋めていた。今回も同手順を踏むつもりでいたが、何しろ遺体の数が多かった。

テロ以前のチポの集落人口は二百六人であったが、そのうち五十一人がテロで亡くなった。約二十五パーセントの減少である。これに加え当然他の地域でも死者は多数出た訳で、火葬場は混み、国全体で待ちの状態に陥っていた。そこで政府は火葬場の混雑緩和の為に、火葬場を使用する日を地区毎に定めた。決められた日にその地区の遺体をまとめて火葬場に運び、一気に火葬するのである。

それに則り、バボバに火葬場の割当ての日が通知された。十日後であると言う。その当日の午後、政府が用意した大型バス五台に五十一人の遺体を乗せ、火葬場まで輸送する。そこでバボバは当日の朝、集落合同で葬儀を行うことを決め、住民たちもこれを了承した。

さて、十日後の朝である。広場に五十一人の遺体各々を納めた棺を並べ、集落合同の葬儀が開始された。これから愛しい家族、恋人、同胞たちとの告別、そして死者の国へと見送らねばならない。従来ならば、チポが常々不謹慎ではないかと思っていた程に、陽気に皆パラダのリズムに乗って歌い、ダイスを踊ってばか騒ぎしながら、死者を見送った筈である。

しかし今、集落の人たちにそんな元気はなかった。未だに心も体も傷付いたまま、悲しみと絶望に打ちひしがれていたのである。パラダの楽器であるジャンベ、マラカス、ユートは辛うじて無事であったが、それを使って勇ましくパラダを演奏しようという者も、ダイスを踊ろうとする者も誰一人いなかった。みんなしーんと静まり返って、それは他国で通常見られる、しんみりとした葬式の風景に他ならなかった。チポとて同じこと。家族三人の遺体に縋り付き、涙ながらに別れを告げるカポの痛々しい姿を、ただ無力に見守るしかなかった。

笛吹けど踊らず、である。困ったのは、バボバ。政府のチャーターバスが来る前に、何とか葬儀を終えなければならないのだが……。悲嘆と惜別の涙に覆われた広場を見渡しながら、バボバは思わずため息を零した。しかしである。ふとチポの顔を見掛けた時、バボバははっと閃いた。

そうだ、チポのあの歌だ。こんな時こそチポに、あの歌をもう一度歌ってもらえないだろうか。以前はあんなに小ばかにしたが、今は妙にあのしんみりとした歌が恋しく思えてならない。きっと今なら、傷付いた皆の心に染み渡るのではあるまいか。数年前のハロウィンでチポに歌わせた時のことを思い出し、バボバはそんなふうに思ったのである。

思えばチポとて村が襲撃された日より、ずっと歌うことを忘れていた。一度としてエデンの森へもゆかず、その渇いた唇に歌を遊ばせることすらなかった。

早速バボバはチポの許へ歩み寄り、チポの耳元に囁くように告げた。

「チポ、お願いがある」

神妙な顔付きのバボバに、不安げな面持ちでチポは問うた。

「何、バボバ。手伝えることがあるんだったら、わたし何でもする。言って」

「ありがとう。実はな、チポ。ほら、御覧の通り、どうやらまだみんなパラダをやる元気もないらしい。そこでだ、チポ」
「うん」
　ババをじっと、チポは見詰め返した。
「尊き死者たちを、どうかせめておまえのあの歌で慰め、見送ってもらえないだろうか」
「えっ」
　これには流石のチポも驚いた。
「本当にいいの、わたしの歌なんかで」
　まさかババがわたしに、歌ってくれ、なんて。しかもララバイ・オブ・シーを……。この時迷うチポの背中を押したのは、誰あろう、最愛のカポその人であった。
「そうだ、俺もすっかり忘れていた。こんな時こそ、チポ、おまえの歌が聴きたい。みんなの為にも、おまえのあの美しい歌声を聴かせておくれ」
「カポ……」
　カポにまで頼まれては、もう断れない。そうだ、こういう時こそ歌わなきゃ、わたし。愛する集落のみんなの為に。
　カポとババの両方に無言で頷くと、チポは広場の中央に立った。その手に、オルゴールの部品の欠片が入った麦藁帽子を握り締めながら。歌うは、ララバイ・オブ・シー……。
　晩夏の午前である。眩しい陽射しがチポの全身を包みながら、大地へと降り注ぐ。ハルカ砂漠の風が吹き、エデンの森の野鳥のさえずりもしている。目を閉じてこの星の母なる海を思い描きながら、チポは歌い出した。ただひたすら祈るように。
　するとどうだ。チポの歌声を耳にした集落の人々の表情が一変した。俯いていた者が顔を上げ、しゃがみ込んでいた者たちは立ち上がった。チポの美声が今、傷付いた集落のみんなの胸に染み入るように、嘆きの大地に響き渡っていた。
　短い歌は直ぐに終わった。しかしチポが歌い終わるや大歓声。チポが目を開けると、周りには集落のみんなが集まっていた。
「凄いぞ、チポ」
「素晴らしい歌ね」
「ミスュ、チポ」
「ミスュ……」
　ババがチポの手をぎゅっと握り締めた。みんなが笑顔でチポの肩を叩き、チポを讃えた。みんなの顔には、熱い血潮が燃えたぎっていた。
　ドンドコドン、ドンドコドン、ドンドコ、ドンドコ、ドンドコドン……。威勢の良いジャンベが鳴り出した。誰かが叫び声を上げた。
「よーし、今度は俺たちの番だぞ」
　チャッチャカチャ、チャッチャカチャ、チャッチャカ、チャッチャカ、チャッチャカチャ……。マラカスも小気味良く響き出す。
　ピーヒョロロ、ピーヒョロロ、ピーヒョロ、ピーヒョロ、ピーヒョロピー……。ユートはいつもの音色で、人々をダイスへといざなった。
「さあ、どうした、どうした、皆の衆。そんな浮かない顔してちゃ、死んだ同胞も浮かばれねえよ」

「そうだ、そうだ」
「いつものように、俺たちゃ、シャングの人間なんだよ。泣きっ面なんざ、似合わねえときたもんだ」
「そうさ、そうだよ、まったくだあ」
「明るく元気に、歌って踊って。賑やかに笑いながら、死者を冥土へ送って上げようぜ」
　ドンドコドン、ドンドコドン、ドンドコ、ドンドコ、ドンドコドン……。チャッチャカチャ、チャッチャカチャ、チャッチャカ、チャッチャカ、チャッチャカチャ……。ピーヒョロロ、ピーヒョロロ、ピーヒョロ、ピーヒョロ、ピーヒョロピー……。
「皆の衆、ほーれほれほれ、歌わにゃ損々、踊らな損。死んだおいらのかあちゃんだって、時化た顔なんざ見たくもねえってよ。かあちゃんの為にも、賑やかに歌って踊って下されやあ」
「おーし、わかったあ。ほーれ、ほれほれ、ほれほれほーっ」
　パラダのリズムに乗って、集落のみんなは遂に踊り出した。それは驚くべきパワー、悲しみと逆境を乗り越えんとする、人間たちの底力がそこにはあった。
　そんな仲間たちの姿に誰よりも感動していたのは他ならぬ、チポであった。
　みんな、凄い。本当はみんな悲しい癖に、あんなに一生懸命、明るく元気に歌い踊っているなんて。
　いつしかチポもみんなの輪に加わり、夢中でダイスを踊っていた。その姿に感化されたのはカポ。
「チポーーーッ」
　チポの名を大声で呼びながらチポに駆け寄るや、カポもまたチポの隣りで踊り出した。その顔には少年のような笑顔が滲んでいた。それは家族を失ったあの日からずっと、カポの顔から消えていた笑顔だった。
「カポーーーッ」
　今度はチポがカポの名を呼び、そのまま思い切りカポの胸に抱き付いた。どきどき、どきどきっ……。最愛の人の鼓動に抱き締められながら、そしてチポはすすり泣いた。
　するとチポの涙に気付いたみんなが、踊り続けながら次々とチポに声を掛けていった。
「がんばれ、チポ」
「スマイル、チポ、スマイル」
「みんな、あんたのことを愛してるのよ」
　えっ。驚いたチポ。
　わたしはなんてテアズな人間なのだろう。こんなやさしい人たちに囲まれて、ずっと今迄、わたし生きていたなんて。ちっとも気付かなかった。それなのに、なんてわたしは愚かだったのか。こんな素晴らしい人たちを、ずっとばかにして来たのだから。
「みんな、ミスュ。さあ、カポ。わたしたちも踊らなきゃ」
「よし、今日は思い切り踊るぞ」
　チポとカポ、ふたりは再びみんなのダイスの輪へと入っていった。ドンドコドン、ドンドコドン、ドンドコ、ドンドコ、ドンドコドン……。
　わたしはこれからもずっと、この集落の人たちと生きてゆこう。一生懸命、このシャングの大地の上で生きてゆこう、みんなと一緒に。

カポと共に汗だくで踊りながら、そう心に誓うチポであった。

こうして激動に飲み込まれながらもチポは、残された集落の人々と共にシャングと集落の復興を目指し懸命に働いた。しかし決して険しい道のりではなかった。なぜなら生まれつきの陽気さで皆で助け合い、苦楽と食料とを分かち合う日々だったから。

それに以前と違って、みんながチポの歌を聴いてくれるようにもなった。年中行事、お祭りの中では、必ずチポのミニコンサートが開かれた。チポにとっては正に夢のような展開となったのである。

しかし辛い別れもあった。アシスエデンの事務局が壊滅状態となったＰＦＡが、一旦オフィスを閉鎖することを決めたのである。これによりＰＦＡのメンバーはみんな、帰国するか他国へ移動せねばならなかった。アリス・ヘンダーソンはチポたちとの別れに涙しつつ、隣国のジンバブエに赴いた。これによって、チポと海野とのエアメールの交流もまた遂に途絶えたのだった。

一方海野の方は、ＰＦＡ日本事務局からアシスエデンの状況を知らされた。チポたちが無事であったことに安堵しながらも、チポとのエアメールのやり取りが出来なくなってしまったことに、海野は寂しさを禁じ得なかった。

翌年、西暦二〇〇三年の春。十九歳になる前にチポは、集落の復興に励むみんなの祝福の中、カポと結婚した。

トピアから少しずつ入って来る家の建築材料を分け合いながら、先ずトウカ家の住居を建て直し、そこにチポの家族四人と新郎のカポが共同で住んだ。それからカポとチポはエンデ家があった場所に、自分たちの新居を建て始めた。それが完成するとふたりはトウカ家を出て、自分たちだけの夫婦生活を開始した。

次の年の冬、チポ二十歳にて長男のヤポを出産。次いで二年後、チポ二十二歳にて今度は長女ピポを産んだ。ふたりともチポのおっぱいを思い切り吸って、どんどん成長していった。チポは子育て、畑作業に奮闘しつつ、シャングの復興作業も手伝い、いつしかタフな大人の女性へと成長していった。チポを支えたのは愛する家族と集落のみんな、そしてララバイ・オブ・シーの歌であった。

西暦二〇〇七年。チポが二十三歳を迎えた年、シャングの村はあの忌わしい悲劇から五年を費やし、遂に復興を遂げたのであった。シティの中学校、教会は立派なものに建て直され、市場には以前の活気が甦った。

チポの集落でも破壊された家をすべて建て直し、全世帯の家が揃った。テロ以前はどの家にも玄関にドアという物はなかったし、窓もなかった。しかし今回建て直した家には、玄関にアルミ製のドアを付け、部屋にガラス張りのサッシの窓も設置した。

それから広場には、みんなが協力して建て直した集会所とトイレが完成。おまけにトイレの横には、女性たちが切望していたシャワー室が造られたのである。

ＰＦＡもアシスエデンの地方の教育施設が復興して来たのを受け、以前のようにシティのビルに事務局を置き、ＰＦＡペアレントの支援も再開した。しかしメンバーは一新し、その中にアリス・ヘンダーソンの顔はなかった。また既にＰＦＡペアレントでなくなっていた海野保雄の存在は、旧オフィスがテロ攻撃を受けた際のデータ消失と共にすっかり忘れ去られていた。加えて海野は体調不良が悪化して、チポが二十歳の春既に

他界していたのであった。

チポは勿論、海野のことを忘れてはいなかった。が、新しいＰＦＡスタッフに遠慮して、海野とのエアメールのやり取りを再開したい旨を言い出せずにいた。従ってチポはまだ、海野の死についてはまったく知らずにいたのである。

それからハルカ砂漠の風がシャングの村に幾年月を運び、雨季と乾季の季節が巡り、西暦二〇一五年に至った。チポは三十歳になっていた。人間として女として母として成長を続け、アシスエデンの大地のように逞しく、それでいて陽気。常に笑顔を絶やさず、物静かで信仰心が厚い、穏やかな女性となっていた。

その年の五月のことである。シティのＰＦＡ事務局に、アリス・ヘンダーソンが訪れた。彼女はジンバブエに赴任後しばらくして、英国に帰り結婚していた。その日は英国から家族と共に旅行に来たのであった。アリスはシャングの村を巡り、立派な大人となったチポと再会した。

「チポ、元気だった」

「アリス、あなたこそ。でも会えて嬉しい」

ふたりは力強く抱擁し合い、涙を流して再会を祝した。会話は弾み、自然ふたりの話題は海野保雄へと及んだ。チポは海野の壊れたオルゴールの部品、破片を見せ、ふたりは改めて武力攻撃の恐ろしさを痛感せずにはいられなかった。チポは今でもオルゴールのことを魔法の箱だと信じており、このオルゴールこそが身代わりとなってわたしとわたしの家族を守ってくれたのだと、未だに感謝を忘れずにいた。

「ヤスオとは、連絡を取っているの」

問うアリスに、けれどチポは悲しげにかぶりを振った。

「あらまあ、どうして」

事情を聞いて驚いたアリスは、久し振りに海野に連絡を取るようチポに促した。同時に、以前のようにチポと海野がエアメールのやり取りを行えるよう、ＰＦＡ事務局に頼んでくれた。

期待と不安の中、早速チポは海野宛のエアメールをしたためた。無事海野に届けば、約十三年振りの便りとなる。チポは祈る気持ちで、ＰＦＡにエアメールを託したのであった。

# (七) ミサ・横浜

# (七) ミサ・横浜

ミサ。

本名、海野美砂 (二十五歳)。独身の彼女は、今売り出し中のシンガーソングライター。生まれも育ちも横浜で、現在横浜市の自宅にて母、海野美鈴とふたり暮らしである。

ミサは、若い世代、特に同世代の女性の支持を得ていた。その理由としては、当然ながら先ず歌である。澄んだ歌声、若い女の子の共感を呼ぶ歌詞、親しみやすく覚えやすい、従って歌いやすいシンプルなメロディ。それでいて時に、これでもかと言う程感情をどっぷり込めて、切々と歌い上げる情熱的な歌い方。例えば囁くように、語り掛けるように、否それ以上、嗚咽するが如くに。それがぐっと感動を呼び、聴く者のハートを鷲掴みせずにはおかなかった。

加えて容姿も端麗。ロングヘアの似合う、如何にも清楚な大和撫子タイプ。漂う爽やかさと清潔感は、好感度アップにもつながっていた。

歌手を志したのは、ミサがまだ十五歳の時。中学を卒業したばかりの三月、最愛の父、海野保雄、享年五十歳を心筋梗塞で亡くしたその日からである。その日の夜の或る出来事をきっかけに、ミサは歌い出した。

早速高校入学前にフォークギターを購入し、独学でギター演奏をマスター。高校のクラスメイト吉田奈々と意気投合してデュオグループ『ミサ＆ナナ』を結成。厳しい練習を課して、歌唱力を磨いていった。

しかし高校卒業後ナナは就職、ミサは神奈川学芸大学に進学した。ミサ＆ナナは解散し、ふたりはそれぞれの道へと進んだ。ミサはキャンパス内の音楽サークルのひとつに所属し、歌手を目指して音楽活動を継続した。

音楽サークルでは『チャーリー・アインシュタイン』という男性ボーカルバンドを結成し、ミサは紅一点としてメンバーに加わった。バンドは学生街のライブハウスに出演したり、プロの前座を務めたりと積極的な活動を行い、ミサとしても一挙に活躍の場が拡がった。それまでの地道な努力と練習によって培って来た歌唱力が認められ、観衆を前にソロで歌わせてもらえる機会にも恵まれた。ミサはその数少ないチャンスを確実に生かし、自らの存在と歌をアピールしていった。

ミサのボーカルは天使の歌声の如く、聴く者の心を虜にしていった。決して派手ではないけれど、少しずつ評判を得、ファンも着実に増えていった。そして遂にレコード会社のスカウトの目に留まり、ミサは二十二歳、大学卒業と同時に、芸名ミサとしてソロデビューを果たしたのだった。

デビュー曲がスマートフォンのＣＭに採用されるという幸運にも恵まれたミサは、一気に注目を浴びた。前述した清楚な容姿と相俟って、一躍時の人となった。しかし一発屋では終わらせまい、あくまでも実力派シンガーソングライターとして売り出そうという戦略を、レコード会社は貫いた。ＴＶ、雑誌への露出は極力控え、地道にラジオ出演、レコード店巡りをこなしつつ、ＣＤの販売とコンサート活動に専念した。それは本人の望むところでもあり、ミサはストイックなまでに自らの音楽を追い求めていった。

場所は、眩しいスポットライトが照らす横浜アリーナのステージである。キーボード、ギター、ベース、ドラムのバックバンドを従え、何万人もの観衆を前に歌うミサは、輝かしい歌姫だった。アンコールも無事終えて、会場を埋め尽くしたファンに別れを告げるミサ。

「みんなーーっ。これからもわたしは、人に喜びを与えられるような、励まし共に力強く生きてゆけるような、そんな歌をいつも歌って、いくからねーーっ」

「ヒューヒュー、ミッサーーッ」

「いつもそう強く願いながら、歌い続けてゆくつもりです。みんな、今夜はほんとにありがとーーっ」

「ミサ、ミサ、ミッサーーッ」

鳴り止まない大歓声と共に幕が下りた。興奮冷めやらぬファンたちのハートは熱かった。

「ねえ、ミサの歌っていいよね」

「なんちうか、魂に向かって来るんよ」

「来る来る。それでいてやさしい」

「正にその通り。もう堪んない、あたし」

かつてミサがユーミンや中島みゆきに胸を震わせたように、今ミサのファンがミサの歌に夢中だった。

しかし光あらば、影もある。目映いスターの世界にも、闇は付いて回るもの。順調にシンガーソングライターとしてのキャリアを積んでいたミサにも、じわじわっと芸能界のデンジャラスな罠が忍び寄って来た。シンガー仲間や芸能人の知り合い、主に同世代の女性である、が増えるにつれ、中には要注意人物も現れるようになったのである。

例えばミサの熱狂的なファンだと公言してはばからない、アイドル歌手の井香川麻里もそのひとりだった。

「ミサちゃんは、絶対関わんないでね」

そんな前置きをして、麻里が話してくれた芸能界の暗部。

それによると先ず麻里自身が枕営業によって、仕事にありついていると言う。相手をさせられるのは、ＴＶ、マスコミ、広告代理店のお偉方、プロダクション社長、果ては政治家、暴力団組長、暴力団幹部連中までまで。麻里のみならず、他のアイドルたちだってやっているんじゃないかと漏らす。

当然ながら憤慨するミサ。

「何てひどい大人たちなの。夢と引き換えに若い女の子たちの体を弄ぶなんて。絶対許せ

なーい」
「でも、それが現実なのよ」
　ハイライトの煙を鼻から吐き出すノーメイクの麻里は、丸で年増ババアさながら、疲れ切った表情で溜息をこぼすのみであった。
「それにプロダクションによっては、ヤクザのフロント企業だったりするところもあるし、自社タレントのスキャンダルをヤクザに揉み消してもらったりとか、結構裏社会とずぶずぶだったりすんのよねえ」
　ずぶずぶ、何それ。目を丸くして麻里の話を聴くミサ。それから麻里は小声になって、ミサに耳打ち。
「そいでさ、ここだけの話。アイドルの中にはねえ、そのルートでシャブやってる子もいるって、う、わ、さ」
「うっそ。やだ、そんなの」
「はい、シャブシャブ一丁上がり、なんてね」
　そこで笑う麻里に、真剣な眼差しでミサが問うた。
「麻里ちゃんは、やってないよね、そんなこと」
「えっ、わたし……」
　しかし麻里の答えは歯切れが悪い。
　ははーん。さてはこの子、やってるな。見抜いたミサは、麻里にお説教開始。
「麻里ちゃん、駄目よ。そんなものに手出しちゃ絶対。人間止めますか、になっちゃうよ」
「はいはい、分かってるってば。ミサお姉様」
　まこと芸能界の闇は深いらしい。
　お次はシンガー仲間というか女性シンガーソングライターの大御所的存在である、神小路サラ。特にバラードが絶品で、ハスキーボイスで切々と訴えるような歌唱は聴く者の心を揺さ振らずにはおかない。姐御肌で若手の面倒見も良いと来ている。が一面何処となく危うい、とげとげしたガラス細工のようなひ弱さも感じさせる。そこが彼女の魅力なのだと言ってしまえばそれまでだが、親しくなればなる程その点が、ミサには気掛かりでならなかった。
　それは、中野サンプラザホールで開催されたひな祭りコンサート終了後のこと。サラに誘われたミサは、六本木のクラブのＶＩＰルームにいた。部屋にはサラとミサのふたり切り。サラの注文でテーブルには贅沢な料理とアルコールが並んだ。酒も煙草もやらないミサは、ひたすら食べるの専門。対してサラは酒豪かつヘビースモーカーときている。ステージで歌っている時以外は、片時も煙草を離さないという愛煙家。そんなサラがとろんとした目で、ミサに何やら煙草らしき一本を差し出した。
「ねえ、ミサ。これ、ちょっと吸ってみな。すんごく気持ち良くなれっから」
　しかしミサは断った。
「やだ。わたしが煙草やんないの、知ってる癖に。サラ姉さんったら」
「だから、煙草じゃないってば、これ」
「うっそ。じゃ、なーに」
「それは、ひ、み、つ、です、お嬢さん。いいから、騙されたと思って吸ってみな、ほら。ミサも病み付きなんの、間違いなし」

「でも」
　ミサはドキッとした。これって、もしかして……。と言うのも以前よりサラにはドラッグ常用の噂が絶えなかったからである。やばーい、どうしよう。ミサは焦った。
「ほーら、いい子だから。これ吸うと、歌は上手くなれっし、いい旋律だってぽんぽん浮かんでくんのよん。何てえの、神様が落っこちて来たーーっ。来たーーって感じ。凄いっしょ」
「うん、でも……」
　何度誘っても断るミサに、サラ姐御は遂に逆上。
「こら、ミサ。つべこべ言わずに、吸ってみやがれ。天下のサラ様に恥かかす気か、こんにゃろ」
　こんにゃろ、って。サラお姉さんたら、お下品……。しかし幾ら凄まれようとも、吸えない物は吸えない。たとえ相手が大先輩、大御所のサラであっても。そこで意を決して、ミサは確かめる。
「これって。もしかして、あれ、でしょ」
　あれ。流石のサラも焦った。
「あれ、って、何よ」
「だから」
　サラの目をじっと見詰めながら、ミサは続けた。
「サラ姉さん。こんなのに頼ってちゃ駄目、絶対駄目だから」
「何、行き成り言い出すの、あんた。サラ、さっぱり訳分っかんない」
　白を切るサラに、痺れを切らしたミサはきっぱり。
「歌っていうのは、自分の心と魂で作り出し、歌うものだと思うの。だからそんな、ドラッグなんて、わたしには必要なーい」
　あーあ、とうとう言っちゃった、ドラッグって……。でももう後の祭り。サラは顔面蒼白。
「何よ、何、生意気なこと言ってんの。いいわよ、いいわよ。だったらもうあんたの面倒なんか、一切見てやんなーいから。とっとと出てけーーっ」
　エキサイトしたサラは半狂乱で、ミサをＶＩＰルームから追い出した。これにてミサは大御所、神小路サラに嫌われ、決別せざるを得なくなった。以後大御所から思いっ切り嫌がらせも受けたが、それでも自分のしたことは間違ってはいなかったと、今でもミサは自分に言い聞かせている。
　とまあ、こんなふうに欲にまみれた見せ掛けだけのショービジネスの世界。その実、裏側は暴力と退廃とがはびこる芸能界に、ミサは段々と失望していった。
　しかしそんなミサに追い討ちを掛けるように、突如スキャンダルが襲い掛かった。恋人との破局である。これにてミサは身心共に、ぼろぼろになってしまう。そのスキャンダルとは……。

## (八) スキャンダル

# (八) スキャンダル

二十二歳でデビューして以来、いや歌手を志した少女の時からずっと音楽一筋で生きて来たミサに、女としての転機が訪れたのは二十三歳のクリスマスイヴ。遂に恋人となる男性が出現したのであった。相手はしかも一般人ではなくアーティスト。飛ぶ鳥も落とす勢いの人気ロックバンド、ゲゲゲ一家のギタリスト、その名も大黒寅造であった。

七歳年上の寅造は、母性本能をくすぐるタイプ。女にモテモテで、常に恋人の噂が絶えなかった。それでもその頃の寅造はまだ世間的には一応独身とされており、ミサもそう信じていた。そして訪れたミサ二十三歳のクリスマスイヴである。

その夜ミサは神奈川県関内市民ホールにて、クリスマスコンサートを催していた。会場を埋め尽くしたのは、熱々のカップルばかり。客席の熱気に負けじとミサはクリスマスソングを始め、オリジナルや海外のラヴソングを熱唱。恋人たちに熱き夜をプレゼントしたのであった。

ところがコンサートの途中で、思いも掛けないサプライズ。なぜか突如大黒寅造がギタリストとしてステージに乱入して来たのである。実はスタッフはみんな知っていたが、ミサを驚かそうと本人にだけ黙っていたという仕組み。ではなぜ寅造が乱入したかと言えば、勿論清楚なお嬢様ミサへの下心から。

ラストにロバータ・フラック＆ピーボ・ブライソンの名曲『愛のセレブレイション』をミサと寅造がデュエットすれば、会場は割れんばかりの大歓声、熱狂の渦に包まれた。コンサート後会場を後にした恋人たちは夢見心地そのままに、迷わず近くのラヴホテル街へと直行したのだった。しかも曲の最中、寅造がミサの肩を抱き寄せる一幕があり、ミサは内心どきりっ。うぶなミサは頬をまっ赤に火照らせ、観衆の爆笑を誘い喝采を浴びた。

コンサートの幕が下りるや、寅造は速攻でミサを飲みに誘った。ミサは断るに断れず、二人だけで夜の東京六本木へ。その夜は軽い飲みだけで済んだが、何気に携帯の電話番号を教えたのが運の尽き。翌日から寅造の本領発揮、こまめな電話攻勢が待っていた。

何しろ男にうぶなミサのこと。狙った女は逃がさないプレイボーイ寅造の手練手管に引っ掛かれば、もういちころ。早々と三回目のデートで、遂に男女の深い仲へ。大人の世界へようこそ、フォーリンラヴしたのであった。以後寅造なしではもう生きてゆけない、恋する女ミサの出来上がりである。

人気者のふたりは、密かに交際を始めた。寅造から片時も離れたくない。でも……、でも歌も大事。ミサは寅造との恋に溺れながらも、何とかシンガーとして歌い続けた。

ところがである。寅造と付き合ってちょうど一年が経過した、ミサ二十四歳のクリスマスイヴのこと。突如週間文春に、ふたりの関係がすっぱ抜かれてしまった。でもふたりとも独身なら、芸能人とはいえ何ら問題はない筈。しかし記事に目を通してみれば、な、な、なんと。寅造は独身どころか、既に妻子持ちであるという。

うっそーーっ、でしょ。誰よりもショックを受けたのが、ミサだったのは言うまでもない。それまで清純派シンガーソングライターとして支持を得て来た筈のミサが突如、不倫、略奪愛の主役として、忽ちスキャンダルの渦中へと投げ込まれてしまったのである。そしてバッシングの始まり、始まり……。

他人の不幸は蜜の味。それはもうお祭り騒ぎで連日連夜の大騒動。ワイドショー、週刊誌のマスコミ連中が、事務所へ自宅へ押し寄せて来た。

「いいえ、わたしは何にも知りませんでしたから。大黒さんとは純粋な恋人として……」

しかし世間も芸能レポーターも、容赦はしなかった。

「大人しそうな顔して、やることえぐいわ、まったく」

「ふざけんじゃないわよ、あんたは今や日本中の女の敵よ」

「この悪女、売女」

「ＡＶ出演、いつですかあーーっ」

完全なるイメージダウン。ファンだった同世代の女の子たちからも見放された。

「歌とのギャップあり過ぎ」

「ミサだけは信じてたのに」

「がっかり。もうミサの曲なんか、死んでも聴かなーい」

ＣＤの売り上げは激減し、コンサートのチケットは大量に売れ残る始末。結果、コンサート会場の観客席はがーらがら。ありゃりゃ……、落ちるとこまで落ちたミサ。

ショックで、歌えなくなった。大黒寅造への熱は一気に冷め、速攻で縁を切った。野次馬やマスコミへの恐怖から人間不信にも陥り、外出すらままならず、家の中に閉じこもる日々。ミサは芸能界ばかりか、シンガーソングライターとしての自分、そして人生にすら疑問を抱き、ひとりぼっちで絶望した。

わたしは一体何の為に、今迄歌って来たんだろう。どうして歌手になんか、なっちゃったのよ。歌って何。何の為に歌うのか、分かんない……。

ミサは自分を見失った。自分という人間が分からなくなり、自信をすっかり失った。そして遂にミサは、歌うことを辞める決意をするに至るのだった。

もう、歌なんか歌わない。もう二度と歌いたくない。歌なんかやるもんか。歌手なんか、辞めてやる。シンガーソングライターなんぞとっととおさらばして、お母さんとふたりでのんびり隠居生活だあーーっ。

そう心に誓ったミサは、所属するレコード会社の広報を通じてマスコミに休業宣言を発表、遂に休養に入った。ミサ二十五歳、春三月のことである。

四月。娑婆は新しい門出の季節。街には桜吹雪が舞い、見下ろせば地に菜の花、タンポポも咲いている。風に乗ったタンポポの種は丸で夢でもつかまえるかのように、目映い春の陽にきらきらと煌めきながら、ふわりふわりと大空へ飛んでゆく。学校には新入生が、職場にはフレッシュな新入社員が入って来る。そんな何処を見渡しても初々しい、新しい出会いの予感にうきうき、わくわく胸もふくらむ春四月。なのに、なのにすっかり世間様から忘れ去られたミサは、毎日横浜の自宅でぐだーっとくすぶっていた。

休業宣言をした後は、マスコミ、野次馬も徐々に影を潜め、今ではもうすっかりお目

にかかることもなくなった。その点は良かったが、ミサの受けた心の傷は余りにも深く、癒えて立ち直るまでにはまだまだ時間が掛かりそうであった。

歌を忘れたカナリア。今のミサに、これ以上ぴったりの言葉はなかった。それまで歌うことのみに唯一、人生の目的と自らの存在意義を見出していたミサであるから、今は何もする気になれず、だから何をするでもなくただただ無気力。来る日も来る日も部屋の中で溜息を吐き、ぼけーっ、の怠け者だった。それでいて大黒寅造やバッシングに明け暮れたマスコミどもの顔が時折り脳裏に甦り、苦々しくてならない。そんな日々の繰り返しの中で夜は悶々として眠れず、食欲も湧かずで、げっそりとやつれもした。

「ねえ美砂。もうそろそろ元気出しなさいよ、あんた」

母、美鈴も精一杯励ましては来たものの、こればっかりは時が解決してくれるのを待つしかない。それがいつのことになるのやら、それまではただひたすらじっと我慢我慢。思いっ切り腹立てて、思いっ切り泣いて、それでも最低限死なずに何とか生きててくれりゃ、それでいいわ。そう楽観的に考えようと努める美鈴だった。しかしそれにしても髪の手入れもせず、ミサ自慢のロングヘアは今やぼさぼさのアフロ犬状態。

「ねえ、せめて美容院位行ったら。見てらんないわよ、まったく」

言われてみれば、確かに。鏡に映った我が姿をまじまじと眺めれば、そこにいるのはお岩さんか口裂け女、恨めしや……。キャーッ、恐っ。確かにこれじゃ駄目。このままじゃ本当にわたし、駄目んなっちゃう。

「分かったわ。じゃわたし、ちょっと行って来る」

こうして一大決心。美鈴に見送られ、ミサは久し振りの娑婆へと出てゆくのだった。

始めは擦れ違う人々の視線など気になって緊張したものの、やつれたのとノーメイクのお陰でだーれも気付かない。それに久し振りに吸った外の空気は清々しく、空の青さは泣ける程に眩しかった。

うわーっ、気持ちいい。緊張も解け、思い切り背伸びすれば気分は爽快。何でわたし今迄、あんなにジメジメしてた訳、ばっかみたい。てな訳で颯爽と美容院に入ったミサは、昨日までの自分におさらばしようと、自慢の黒髪をバッサリとカット。ボーイッシュなショートカットにしたのだった。

じゃーん。すっかり人が変わって帰宅したミサに、美鈴は吃驚。でも、ま、取り合えず良かったと胸を撫で下ろした。しかし気分は晴れたものの、歌うことへの拒絶反応は、まだまだミサの心に根強く残っていた。とてもじゃないけどまだ譜面を見るのも、ギターに触るのも嫌。仕方ないからリビングでゴロリ。美鈴とＴＶを観るも、下らないお笑いやら、相変わらず品性のないワイドショーやら、下手くそなジャリタレの歌を垂れ流すばかり。

ふわーっ。世の中、詰まんなーい。横で美鈴が大笑いする程の大欠伸で、退屈しまくるミサだった。気分はどうにか晴れたけど、やることねえなあ……。

ミサは、海野家のひとり娘。父保雄が死んでからは、ずっと美鈴とふたりだけで暮らして来た。自宅はＪＲ根岸線の石川町駅から歩いて直ぐの高層マンションで、保雄が残してくれたものだった。さっきから欠伸ばかりのだらしない娘に、情けなさそうに美鈴が零した。

「だったらあんた、久し振りに大桟橋にでも行って来たら」

「大桟橋」
「そうよ。お父さん亡くなって、今年でちょうど十年になるんだし」
「えっ、もう十年……。あ、そっか。そうだね。言われてみればすっかり忘れてた、お父さんのこと」
「でしょ。お父さんだって、ずっとあんたのこと、心配してたんじゃない」
「そうだね。うん、分かった」
　珍しく、素直にミサは頷いた。
「じゃ、海でも見ながら、久し振りにお父さんと語り合って来るわ」
　四月とはいえ、夜の潮風は肌寒い。ミサはコートを羽織り、黄昏の大桟橋へと出掛けて行った。

　大桟橋に立てば、港と海の景色を堪能出来る。ミサはそこから華やかで玩具細工のような港町の夜景を見るのが好きだった。が父保雄はいつも、反対側の暗い海の彼方ばかりに目を向けていたものだった。そこにはまっ直ぐに伸びた水平線が見えるばかり。
　父と語り合って来ると美鈴に言って来た手前、今宵のミサは大桟橋に佇みながら、暗い海の方角に目をやった。そこには相変わらず水平線が横たわっているだけ。平日の夕暮れから夜の帳が下りる頃とあって、辺りに人影は少なく、しーんと静まり返っていた。ミサの耳にはただ、波止場へと打ち寄せる波の音が心地良く響いて来るばかり。ミサはぼんやりと、水平線を見詰めていた。
　水平線を父に見立てて、亡き父へと何か語り掛けようとしたその時、しかし突然何処からかオルゴールの音色が聴こえて来た。不思議に思ったミサは、辺りを見回した。すると若い父親と共に通り掛かった幼い少女が、その手に木箱のオルゴールを持っていた。聴こえて来たのは、その音だった。
　オルゴール。ミサははっとして我を忘れた。オルゴールが奏でる曲は、ミニー・リパートンのラヴィング・ユー。でもミサが心奪われたのは、曲のメロディではなかった。オルゴールの音色そのものが、ミサの心をとらえたのである。
　懐かしい。郷愁がミサを襲った。すっかり忘れていた幼い日の記憶、その中に眠るひとつのオルゴールがあった。ミサの脳裏に今鮮やかに、ひとりの男性の面影が甦る。それは他でもない、亡き父保雄だった。そう言えば、あのオルゴール、どうしたんだろう……。
　ミサが思い出したオルゴールとは。それはただのオルゴールではなかった。この世にたったひとつしか存在しない、亡き父作曲のメロディを奏でる詰まり、父自作のオルゴールだったのである。しかしミサはそんな大事な保雄のオルゴールを、一度か二度しか聴いた覚えがなかった。
　どんなメロディだったっけ。保雄が作ったメロディ即ち保雄のオルゴールの旋律が、ミサにはどうしても思い出せなかった。こうなるとどうしても思い出さずにはいられないのが、人情というやつである。どうしても思い出せない、くっそーっ。もう一遍聴いてみたいなあ、あのメロディ……。
　とっとと夜の大桟橋を後にして家に戻るや、ミサは間髪容れず美鈴に尋ねた。
「ねえ、お母さん。お父さんのオルゴール、何処あんの」

「何よ、帰って来て行き成り」
「だから、あのオルゴールよ。ほら、覚えてない、お父さんが自分で作った」
　すると美鈴は、大きく頷いた。
「ああ、そう言えば確かそんなの、あったわねえ。でも……何処にしまっちゃったのかしら。で、あんた、そのオルゴールがどうかした訳」
「うん。さっき港で急に思い出しちゃって。そしたらどんなメロディだったか、気になって気になって。お母さん、覚えてない」
　しかし美鈴は、かぶりを振った。
「ごめん、全然覚えてない。でも家の中捜せば、きっと出て来るわ。その方が早いわよ」
　そこでふたりは家中を捜してみたが、結局見付からなかった。
「おかしいわね」
「捨てちゃったんじゃない、お母さん」
「そんな大事な物、捨てる訳ないでしょ。でも無いわね、何処にも」
　しばらくは気にしていたけれど、そのうち諦め、ミサと美鈴はオルゴールのことを一旦は忘れた。

# (九) 旅立ち

# (九) 旅立ち

ところがである。五月、家に見慣れない一通の手紙が届いた。しかも死んだ保雄宛であった。保雄が死去して既に十年が経過しているというのに。美鈴とミサは何事かと訝った。

差し出しは『ＰＦＡ　日本事務局』とある。恐る恐る美鈴が封を切ると、中には二通の手紙が入っていた。ひとつは日本語のワープロ文書、もう一通は英語の直筆であった。

日本語のワープロ文書の内容は、こうであった。

『拝啓、海野保雄様。

突然のお便り、お許し下さい。こちらはプラネット・フォー・アフリカ (ＰＦＡ) 日本事務局です。早速ですが、以前貴殿が私共の活動にご賛同下さり、教育支援を賜りましたアシスエデンのチポ・エンデ (当時チポ・トウカ) を覚えていらっしゃいますでしょうか。幸いアシスエデンはテロ攻撃から復興し、徐々に立ち直りつつあります。そこでチポが、貴殿とのエアメールの交流を是非とも再開したいと申しております。

つきましては今回彼女のエアメールを同封致しましたので、ご一読下さい。もし彼女への返信を頂けるようでしたら、日本事務局宛お送り下されば、彼女へ転送致します。

何卒、よろしくご検討下さい。尚電話での問い合わせも受け付けておりますので、何なりとお申し付け下さい。それでは。

ＰＦＡ　日本事務局代表　古閑雅夫』

そしてチポ・エンデのエアメールである英語の直筆を、ミサが訳して美鈴に読んで聞かせた。

『親愛なるヤスオへ。遥かなる海を越えて、アシスエデンの地からチポより。

ヤスオ、お元気ですか。わたしはチポ・エンデです。結婚してチポ・トウカから変わりました。あなたがまだわたしのことを、覚えていてくれたら何よりも嬉しいのですが。あなたには本当にお世話になりながら、こちらの事情により永い間手紙を書くことも出来ず、大変申し訳ありませんでした。

わたしは今年で三十歳になります。ふたりの子どもを産み、現在育てている最中です。夫のカポも元気で、わたしは毎日とても幸福に暮らしています。これもみんなあなたのお陰です。ヤスオ、是非とも機会がありましたら、一度わたしの住むシャングの村に遊びに来て下さい。家族を始め村のみんなで歓迎します。

この突然の手紙が、貴方のご迷惑にならなければいいのですが。それではチポ』

そこで開口一番、美鈴の言葉。

「あら、わたしすっかり、忘れてたわ」

ミサもまた父保雄がチポなる少女に援助を行っていたミサが小学校低学年当時のことを、おぼろげに思い出した。

「確かお父さん、わたしが生まれた記念に、この人への奨学金の援助を始めたんだったわよね」
「そうだったねえ。わたしなんかちっとも興味なかったから、お父さん、勝手にやればって感じだったけど」
「わたしも全然興味なかった。でもアシスエデンって何、そんな国あんの」
「確かアフリカだったと思うけど」
「プラネット・フォー・アフリカって言う位だから、そうじゃない。でもどうしよう」
「そうねえ」
　しばし顔を見合わせる美鈴とミサであった。
「でも、このチポさん。まだ知らなかったのね、お父さんが死んだこと」
「そうね、そうみたいねえ。何だか不思議」
　しみじみと頷く美鈴。
「で、結局返事どうすんのよ」
「そりゃやっぱり、お父さんの代わりに書かなきゃ。少なくともお父さん死んだこと位は、教えてあげないと」
「そうだね」
　ぼんやりと答えながらミサは、窓辺に立って外を眺めた。目の前には一面のブルースカイ、眩しい五月の空が広がっている。その中を漂い流れゆく、雲の白さがまた目に沁みた。
「アフリカかあ。アシスエデン、どんな国なんだろう。果てしなく遠いんだろうなあ。でも行ってみたい。ふわーーっ」
　空の眩しさに背伸びして大欠伸するミサに、苦笑いを浮かべたかと思うと突然美鈴が大声を上げた。
「あっ、思い出した。そうだったわ」
「何、どうしたのよ、お母さん」
　何事かと振り返るミサに、美鈴は答えた。
「ほら、あんたが言ってた、お父さんのオルゴール」
「オルゴールが、どうしたのよ」
「だから。お父さん、この子にあげたのよ、オルゴール」
「ええっ、チポさんに。あっ、そっか。だから家にないんだ、なーるほど」
「お父さん、オルゴールが完成すると、さっさと送っちゃったから、確か」
「へーえ」
　ミサは再び大空に目を向けると、行ったこともない遠いアシスエデンと、そこに送られた一台のオルゴールに思いを馳せた。アフリカの大地の片隅でひとりの少女が目を輝かせ、親父の作ったオルゴールを聴いている。そんな情景が目に浮かんで来るようだった。
　親父のやつ、生前割りと良い事してたんだ。我が父ながら、かっくいい。
　何処までも続く空の青さを見上げるミサ。アシスエデンかあ。この空の彼方に、チポさんの国そしてお父さんのオルゴールが存在するかも知れない未知の国、アシスエデンがあるのね。なんか、行きたくなっちゃった……。
「ねえ、お母さん」

「なーに」
「行ってみようかな、わたし」
「何処へ」
「だから、アシスエデンへ。お父さんの代わりに」
「ええっ、正気」
「正気、正気。時間なら幾らだってあるし。それにほら、もしかしたらお父さんのオルゴール、チポさんのところにまだあるかも知れないでしょ。わたしどうしても聴きたいの、あのオルゴール」
「でも、もう二十年位前のことでしょ。いい加減、壊れてんじゃないの」
　二十年かあ。言われてみれば、そうだなあとも思う。折角遠路遥々訪ねて行っても、もしお父さんのオルゴールがなかったら、がっかりするかも。でも、チポさんにも会ってみたいし。ミサは迷った。そんなミサの隣りに立ち、美鈴も空を見上げた。
「兎に角、あんた。先ずチポさんへの返事書いてよ。わたし英語、全然分かんないから」
「いいわよ」
「ま、家でごろごろしてるより、よっぽどいいかもね。いい気分転換にもなるだろうし、嫌なこと忘れて観光のつもりで行ってくれば。もしかしたら」
「もしかしたら、何」
「もしかしたらお父さんが、俺の代わりに行って来いって、あんたに頼んでるのかも知れないし」
「ああ、成る程。じゃ、思い切って行っちゃおうかな。お母さん、一緒に行こうよ」
「ええっ、いいわよ、わたしは。もう年だし、勘弁して。あんたひとりで……でも、治安は大丈夫かしら」
「もし本当に行くんだったら、ちゃんと調べるから大丈夫」
　よし。そうと決まれば、善は急げ。早速ミサは、アフリカ大陸の未知なる国家アシスエデンの情報収集へ。それでもし万が一、若い女ひとりでの渡航が危険、困難であると分かったならば、残念だが取り止めるつもりでいた。

　先ずミサはＰＦＡ日本事務局に電話し、問い合わせた。海野保雄の娘だが、アシスエデンに遊びに来いと言うチポの誘いを受け、是非自分ひとりで行ってみたい。そこでアシスエデンという国は、若い女ひとりで旅しても安全だろうか。ただし父保雄が死んだことは教えなかった。もし出来るなら、自分の口から直接チポに伝えたいと思ったからである。
　すると、現地に確認してみるから待って欲しい、折り返し電話するから、との返事を得た。そして後日、折り返しの電話が入った。
　先ずアシスエデンの治安だが、国民は皆穏やか。テロも既に鎮圧され、旅行者が犯罪に巻き込まれる危険性も現在は全くと言って良い程無いと言う。それにもしミサが来るとなれば、現地のＰＦＡスタッフが可能な限り、サポート、案内をしてくれるそうだ。しかし御存知の通り国連を通して日本はアシスエデンを国家と認めず、その存在を否定している。従って渡航手続きにしても旅行径路にしても、一旦日本からアシスエデンと国

交を有する国を経由しなければならないとも教えてくれた。成る程、言われてみれば御尤も。

もし日程が決まりましたら教えて下されば、それに合わせて準備します。いつでもお越し下さい。そうチポと現地ＰＦＡスタッフが申しているとのことであった。何しろ向こうは首都トピア中心部を除いて、何処も貧しくはあれど自給自足ののんびりとしたライフスタイルである為、どんなにでも都合はつけられると言うのである。

なーるほど。なんか素晴らしい。一気に行く気になってしまったミサはＰＦＡの言葉を信じ、ＰＦＡの協力を得て早速旅行プランを立てた。ただし日本に居てアシスエデンに関する情報を得ることは難しかった。インターネットで検索しても殆どヒットせず、と言うのも日本国内ではアシスエデンに関するサイトはヒットしないよう規制されていたからであり、加えて書籍の類もない。試しに外務省に問い合わせてみても、そんな国、何処にあるんですかと、しらを切られるばかりだったから、ＰＦＡの言うことを信じるしかなかった。

先ず日程を決めた。六月八日、月曜日。この日アシスエデンに到着し、一週間滞在する。六月にしたのは、ＰＦＡスタッフから直ぐにでも来るのであれば、雨季が終わった六月が良いと勧められたからである。次に旅行ルートを決めた。前日に成田を立ち香港、南アフリカのヨハネスブルクを経由してアシスエデンに入国し、首都トピアの土を踏む。

ここまで決めたら、ミサはＰＦＡスタッフと打ち合わせすべく、ＰＦＡ日本事務局に出向いた。その席で、現地スタッフとの段取りが決められた。先ずトピア国際空港内で待ち合わせする。そこで無事合流出来たら、入国手続きを行って空港を出る。トピアのホテルでチェックインを済ませ、旅の疲れがなければ、その日のうちにシャングへ向かうこととした。注意として、ヨハネスブルクではトピア行きの便を待つのに三時間以上かかるが、絶対に空港から外へは出ないように、との忠告を受けた。治安が死ぬ程悪いからである。

後日、担当する現地スタッフも決まり、写真が送られて来た。オリビア・ピーターソン (二十八歳) という女性であった。ＰＦＡの尽力によって、なんとか往復の航空チケットとトピアのホテルを予約することも出来た。

そしていよいよ六月七日、日曜日である。ミサは満を持して出発した。サングラスに半袖のデニムシャツとジーパン姿でギターと共に家を出て、成田から十七時十五分発の香港行き旅客機に搭乗した。もう二度と歌など歌わない、歌手なんか辞めてやると誓った筈のミサではあったが、万が一必要になるかも知れない、その時後悔しないようにと、念の為ギターを持参したのであった。

# (十) 一日目

# (十) 一日目

成田から五時間近く掛けて、香港国際空港に到着したのは二十二時。そこで約二時間待ってヨハネスブルク行きの便に乗り込むと、機内にて直ぐに日付けが変わった。ミサの時計で六月八日、月曜日。これから十三時間以上の長距離フライトである。とは言ってもミサは機内で爆睡したから、あっという間にヨハネスブルクに着いた。

時刻は七時過ぎ。そこで三時間半待って十時半過ぎ、いよいよトピア行きの飛行機に乗った。目的の地を目の前に控え、一時間半のフライトは呆気ない程短く思えた。そして遂に無事、トピアに到着した。時刻は十二時を回り、お昼過ぎであった。

トピア国際空港は、ミサが知っている限りでは沖縄の那覇空港と同程度の規模だった。旅客機を降り空港のゲートに向かうと、ミサの許に早速一人の英国人女性が歩み寄って来た。

「ハロー、ミサ」

親しみのある、人懐っこそうな笑顔。彼女こそＰＦＡ現地スタッフのオリビア・ピーターソンであった。入国者の中にアジア系女性がミサしかいなかったことで、オリビアは直ぐにミサに気付いた。事前に写真を見ていたことで、ミサもまた相手がオリビアだとひと目で分かった。

「ハロー、オリビア」

ふたりは握手と笑顔を交わし、直ぐに姉妹のように打ち解け合った。以降アシスエデンに滞在中、ミサは英語にてオリビアやチポたちとコミュニケーションを取ることになる。

オリビアに伴われ、先ずはゲート内にあるアシスエデン政府の事務所に入った。そこで入国申請を行い、速やかに入国許可を得た。これで晴れてアシスエデンに足を踏み入れることが出来る。ミサはオリビアと共にゲートを抜け、荷物のトランクとギターを受け取った。

空港を出ると、オリビアが運転するＰＦＡの車、まっ赤なパジェロに同乗。初めにミサが宿泊する『ホテル・アシスエデン』に行き、先にチェックインを済ませた。料金は前払い、ドルで払った。今日は初日ということもあり、荷物のトランクとギターは取り合えず部屋に置いて、出掛けることにした。

「疲れたでしょ。ホテルで休憩しなくて平気」

問うオリビアに、けれどミサは快活に笑顔で答えた。

「ＯＫよ。シャングに連れてって」

時刻は十四時過ぎ。

「ＯＫ。このままシャングに直行してもいいけど、その前になんか食べない。お腹減ったでしょ」

　そう言えば、お腹ぺこぺこ。オリビアに言われて、思い出したようにお腹の虫が鳴いた。苦笑いと共に、ミサは「イエス」と頷いた。
「じゃ、案内するわ」
　オリビアの車はトピア中心部へと向かった。ここなら流石に和食はないが、観光客や外資系のオフィスで働くビジネスパーソン向けの洋食レストランがある。ただしマクドナルドやスタバの類は一切なし。二人は一軒のレストランに入った。
　遅いランチを取りながら、オリビアが語るシャングの村のこと、チポの集落の様子、またチポたちの家や彼らの暮らし振りなどを聞いた。お風呂、トイレの水廻りは勿論、電気、食事等々。日本との環境と習慣の余りの違いに、早くもここでミサはカルチャーショックを食らった。でも、来ちまったもんはしょうがねえ。どうせ、一週間だけだし……。腹を括ったミサは、レストランの綺麗なトイレで用を足すと、いよいよ出発と相成った。

　時を忘れオリビアの話に聞き入っていた為、時刻は既に十六時。ミサを乗せた赤いパジェロは、一路シャング目指して出発。トピアの中心部から舗装された道路を、北へ北へと突っ走った。
　直ぐに郊外に出た。すると行き交う車の姿がぱたっと消え失せた。横浜にも劣らなかった大都会トピアの面影は既になく、ただひたすら緑と大地の田畑地帯が続くばかりであった。
　ミサの視界に広がるものは、緑と地平線と青い空に巨大な白い雲ばかり。何だ、こりゃ。これが地球本来の姿なのねえ。ミサは限りなく広がる空間と澄んだ空気に、思いっ切り解放感を味わった。開け放した車窓から、びゅんびゅんと風が吹き込んで来る。このまま、わたし、何処までも何処までも、世界の果て、地球の果てまで行ってしまえーーっ。
　それでも広大な田畑の間に、ぽつりぽつりと家々が垣間見え、人の姿が見えなくもない。ねえミサ、アシスエデンってこんなに良い国なのよ。こんなに素晴らしいことが一杯ある国なんだから。車をかっ飛ばす間にも、オリビアがミサに語って聞かせるアシスエデンの話が尽きることはなかった。オリビアって、本当にアシスエデンが好きなのねえ。ミサにそう思わせる、オリビアの熱い語り口であった。
　ＰＦＡの活動と自分の仕事に誇りと満足感を持ち、死ぬまでアシスエデンで暮らしたい。くりくりとした大きな青い瞳を輝かせ、そう語り掛けて来るオリビアを、同年代の女としてミサが羨ましいと思ったのは勿論である。
　そんなこんなで話が尽きる間もなく一時間足らずで、ふたりは無事シャングのシティに到着した。
「オフィスに行きましょう。みんなに紹介するわ」
　パジェロから降りるとオリビアに従い、ＰＦＡのオフィスに顔を出した。
「ハイ、みんな。ミサを連れて来たわ」
「ハロー。ミサ・ウミノです」
　オフィスには、オリビア以外に五人のスタッフがいて全員女。それだけでもアフリカ大陸にあってアシスエデンという国が、如何に安全な国であるのか、その治安の良さを

物語っていた。スタッフはみんな長身、中でもオリビアは百八十センチメートル。しかも彼女はスタイル抜群のモデル級でもあった。
「シャングの村の男たちってね、最初は無愛想だけど、みんな女性にやさしく、お喋り好きが多いのよ」
　事務局のリーダー、年齢四十代のリンダも陽気な人物で、にこにこミサと握手を交わした。スタッフ全員四輪駆動の車を持ち、各々担当地区を日々精力的に回っていると言う。
　ＰＦＡスタッフとの挨拶、会話も一通り済ませ、もうそろそろ出発かなと思っていると、オリビアがミサに告げた。
「もう少し、待ってね。ちょうど今、村はディナータイムなのよ」
　ディナータイム、そうなんだ。オフィスの時計を見ると十七時半。外はまだ明るいし、日没前である。早ーっ、でも健康には良いかも。
　時間潰しにオリビアとふたりで、シティの市場を歩いた。と言っても、ここだってディナータイムの筈。何処も既に店じまいしていた。時たま通行人と擦れ違ったが、日本人が珍しいのか、みんなミサを見ると近寄って来た。
「ハロー」
「ハロー」
　気さくに英語で話し掛けて来る彼、彼女らに、ミサも手を振り、陽気に応え返した。決してたかって来たりはしない。ここら辺も治安と国民のモラルの良さである。皆屈託のない、人懐っこい笑顔を残し去っていった。
「サンク (今晩は)」
「ハッピ (さよなら)」
　時より耳慣れない言葉も掛けられたが、これこそがグリラ語。従ってミサにはさっぱり意味は分からない。何しろグリラ語の辞書など、日本では一切取り扱っていないのだから。
「じゃ、今度こそ本当に行きましょうか」
「うん」
　そろそろ陽が傾き出し、いよいよチポの待つ集落へ出発である。車なら十分足らずで着くと言う。車窓から見える夕焼けが赤々と燃え、それが三百六十度に広がっていた。その巨大で情熱的な太陽をぎゅっと抱かんとして、まっ直ぐに伸びた地平線が今か今かと待ち構えている。そんな壮大な景色の中にあっても、夕焼けの色はセンチメンタルなものだなあ、とミサは思った。何処か懐かしく切なくて、つい涙が出てしまうから。
「チポに会ったら、グリラ語の挨拶を教えてもらうと良いわ」
「そうね。うん、そうする」
　夕焼けですっかりおセンチになったミサは、少女のように頷いた。チポさん、チポかあ。いよいよチポさんと会うのか。どんな人だろう。気が合えば良いんだけど……。俄かに緊張を覚えるミサだった。
　期待と不安が胸に入り混じるミサを乗せ、オリビアはトウモロコシの畑が両側に連なる車道を走り続けた。やがて畑は途絶え、代わって家々の薄暗い灯りが見えて来た。そこがチポの集落である。
「オリビア」

「オリビアーーッ」
　集落の狭い道に入って来るオリビアのパジェロに気付いて、外で遊んでいた子どもたち三、四人が手を振りながら寄って来た。男の子は薄汚れた無地のＴシャツに半ズボン姿。女の子は涼しげな、でもやっぱり少し汚れたワンピースを着ていた。みんな、下はサンダルを履いていた。
「危ないってば」
　車の窓を開け、オリビアがやさしく注意する。でもいつものこと。子どもらはみんな、くりくりとした好奇心一杯の目を輝かせていた。澄んだ、透き通るような瞳だとミサは思った。そんな目で一体どんな夢を見ているのだろう、この子たち。
　子どもたちに注意しながらオリビアが集落の広場の隅に車を停め、ふたりが外に出た時には、もう大分辺りは薄暗くなっていた。
「あんたたち、早く家に帰んなさい」
　オリビアが親しげに子どもたちに声を掛ける。でもみんなは、オリビアの隣りにいる見掛けない客人のことが気になって仕方がない様子。
「チポの大事なお客さんなんだから、みんな仲良くしてね」
　オリビアの言葉に、子どもたちがざわついた。きらきらとした瞳が一斉に、ミサに注目した。
「へえ、チポの」
「かわいい、お人形さんみたいな人ね」
「チャイニーズかな」
　それから、ぼそぼそっとグリラ語の言葉の数々も零れた。子どもたちに見詰められたミサは、くすぐったくて堪らない。
「ハロー。ジャパンから来た、ミサです。よろしくね」
　元気にミサも、子どもたちに向かって初めて挨拶をした。
「ジャパンだって」
「ハロー、ミサ」
　戸惑ったり、恥ずかしがったりの人見知りな声が、ミサに返って来た。
「ハッピ、ミサ」
「ハッピ」
　一応ミサの正体が分かったからなのか、それから子どもたちは波が引くように何処かへ消えていった。

　時刻は十八時を過ぎていた。街灯など見当たらないから、このまま夜の帳が集落を覆ったら、きっとまっ暗になってしまう。ミサは急に疲労と不安と、そして言いようのない寂しさとに襲われた。今日のところは挨拶だけして、わたしもさっさとホテルに帰ろうかなあ。その薄暗さの中で、改めて集落の風景を眺めた。
　チポの集落では五十二世帯が暮らしており、その住居が建ち並んでいた。どこも一様に屋根が円錐形で、こじんまりとした白壁の丸い家である。石と藁を材料に、村人たちが自分たちの手で造ったのだと言う。

　そんな家の姿や集落の景色に、丸でムーミンの世界だあ。とミサは思った。ムーミン谷に迷い込んだわたし……。そう思うと、少し寂しさが和らいだ。
「それじゃ行くわよ、ミサ。もうディナーも終わってる筈だから」
「うん」
　オリビアからもらったペットボトルの水で喉を潤しながら、ミサはこっくりと頷いた。
　オリビアの後に付いて、暗い道をしばらく歩いた。さっきの子どもたちの賑わいが懐かしく思える程、それは静かな道だった。
「さ、着いたわよ」
　一軒の家の前で立ち止まると、振り返りオリビアが告げた。そこが、チポの家だった。
　トントン、トントン。
　オリビアは早速、ドアを叩いた。実は何処の家も玄関は施錠されておらず、そのまま無言で中に入っても、シャングで文句を言う者など誰もいなかったけれど。すると直ぐにドアが開いて、中から一人の男と二人の子どもが顔を出した。
「ハイ、オリビア」
　男がオリビアに愛想良く挨拶すれば、オリビアもグリラ語で男に挨拶を返した。
「サンク、カポ」
　カポ。この男こそがチポの旦那である。子ども二人はチポの子どもたち。しかし肝心のチポは不在だった。オリビアの隣りにいる初対面のミサが、チポが待ち侘びていた日本女性のミサなのだと、カポと二人の子どもたちは直ぐに気付いた。カポは家に入るよう、オリビアとミサに促した。なぜなら虫が家の灯りと人間目掛け、大量に集まって来るからである。家族と来客はさっさと家に入り、直ぐにドアを閉めた。
　家の中には、ひとつのはだか電球が灯っていた。お世辞にも明るいとは言い難かったが、それでも有るのと無いのとでは天と地の差だった。それに電球が灯っているということは、今夜は今のところ停電にはなっていないということでもあった。
　室内を見回し気になったことは他にもあったが、一番は家全体に漂う独特のにおいだった。しかし何のにおいかは分からない。かびか汗或いは体臭、それとも排泄物的な臭い。いずれにしろ、いたたまれない程の悪臭ではなく、二、三日もしたら慣れてしまうかも知れない。そんなふうにも思えた。
「サンク、ミサ」
　カポがグリラ語で挨拶した。サンク……。オリビアが直ぐに助け舟をくれた。
「今晩は、の意味よ」
　ああ、今晩は、か。
「サンク」
「ジャパンから遠路はるばる来て下さり、光栄に思います。わたしはカポです」
　はにかみながら、握手を求めるカポ。やさしい笑顔である。
「こちらこそ、カポ。あなたに会えて嬉しいです」
　にっこりと微笑んで、ミサはカポと握手を交わした。汗ばんでごつごつとしたカポの手からは、彼の温もりが伝わって来た。
　お次は子どもたちである。待ち兼ねたようにカポと交代したのは、長男のヤポ。ミサの手をぎゅっと握り締めた。彼は父親に似て、スリムで長身。既にミサと肩を並べる程

で、はにかむ笑顔もカポ譲りだった。
「サンク、ミサ。ぼくはヤポ。シャング小学校の五年生なんだ」
「サンク、ヤポ。初めまして、わたしはミサ。よろしくね」
　最後は長女のピポ。頭のリボンが可愛らしい彼女は、お澄まし屋さん。ちょっと気取ったふうで、ミサと握手。まだ小さくて、柔らかな手をしていた。
「サンク、ミサ。わたしはピポ。ヤポとおんなじシャング小学校の三年生なの。よろしくね」
「こちらこそ、ピポ。仲良くしてね」
　ふたりの子どもたちの目は、さっき会った集落の子どもたち同様澄んでいて、アシスエデンの大地を思わせる輝きを放っていた。
　そしていよいよチポである。肝心の主役はいずこに。オリビアが子どもたちに尋ねた。
「ねえ、ママは何処にいるのかしら」
　透かさずピポが教えてくれた。
「ママはね、森よ」
　森。チポは、森にいるらしい。
「森ですって。あなたたちのママは、こんな日にどうして森へなんか行っちゃったの」
　ミサが来ることはちゃんと知らせておいたのに、チポったら。オリビアは少し不満そうだった。するとママの気持ちを代弁するように、ピポに代わってヤポが説明してくれた。
「ママはね、ミサに会うのをそれは楽しみにしているんだよ。それにミサに少しでも上手く歌って上げたくて、今ぎりぎりまで歌の練習をしているんだ」
　歌、歌の練習、わたしに少しでも上手く歌って上げたくて……って、一体どういうこと。ミサには意味が理解出来なかった。
「まあ、そうだったの。チポったら」
　オリビアは納得した。しかしミサの方は困惑していた。自分がシンガーソングライターであることを、ミサはＰＦＡのスタッフには内緒にしていた。が日本のスタッフの中には、気付いた者もいたかも知れない。そのことがオリビアに伝わり、オリビアからチポに……。もしかしてそれでチポさん、わたしの為に歌って上げようなんて思ったのかも知れない。まいったなあ。そんなこと、もうしなくていいのに。わたしなんか、こんなわたしなんかの為に。わたしなんかもう、歌なんか止めちゃったのに。歌うことなんて……。日本での苦い思いが甦り、歌に対する拒否反応に苛まれるミサであった。
「ねミサ、森に行ってみない」
　森へ。誘ったのはオリビアだった。
「エデンの森と呼ばれる所なの。直ぐ近くだから」
　エデンの森。やさしく微笑み掛けるオリビアに、ミサはにこっと頷いた。
「うん。じゃ、行きましょう」
「ぼくが、案内する」
　人懐っこい笑顔で、ヤポが申し出た。しかしオリビアはそれを断った。
「だーめ。きみたちはまだ、お勉強が残っているでしょ」
「はーい」
　ヤポとピポは、オリビアの忠告に素直に従った。ふたりとも良い子だと分かる。

# (十一) エデンの森

# (十一) エデンの森

「ほんとに、直ぐなのよ」

オリビアとふたりだけでチポの家を後にすると、予想通り外はまっ暗だった。夜空から注ぐ月光と、集落の家々の窓から漏れるはだか電球の灯りだけが頼りである。もしこれで停電なんてことになったら、本当に暗黒大陸だわ。ミサは、洒落になんない、とひとりで焦った。しかし目が闇に慣れて来ると、周囲の様子も幽かではあるが見えるようになって来た。ふたりはそして集落から離れ、遂に家々の灯りからも遠ざかった。

見上げれば月の光が夜の大陸を照らし、空には地上に降り注ぐかのような満天の銀河が瞬いていた。南十字星の姿もあった。それは息が止まるかと思う程の美しき別世界で、ミサは立ち止まり頭上に広がる感動の宇宙ショーを仰ぎ見ずにはいられなかった。

「きれいでしょう」

以心伝心。ミサの感動はアシスエデンの夜空を見慣れた筈のオリビアの琴線にも伝わり、彼女もまた足を止め頭上を見上げていた。

「うん、きれい」

思わずため息を零しながら頷いたミサ。肩を並べ、と言ってもオリビアの肩の位置が圧倒的に高かったが、ふたりはしばし夜空に見入っていた。

「さ、行きましょうか。もうチポもこっちに向かっているかも知れないわ」

「はーい」

オリビアに従い、ミサは歩き出した。辺りは真空の静寂、ミサが日本では味わったことのない完全な静けさが支配していた。暗黒と静寂の世界である。ミサは自分が本当に世界の果て、地球否宇宙の果てに来てしまったような気がしてならなかった。

しかし森に近付くにつれ、チポのこと、そして再び歌のことを思い出したミサは、恐る恐るオリビアに尋ねた。

「ねえ、オリビア。チポは歌が好きなの」

「ええ、そりゃもう。シャング一の歌好きで有名なのよ。それにね」

「うん」

「それに信じられない位、上手いのよ」

歌が上手い。その言葉にミサは即座に反応し、無意識に嫉妬と対抗心を抱いた。そしてそんな自分に同時に戸惑いをも覚えた。ばっかじゃない、わたしって。何考えてんのよ、ほんと、愚かな奴……。

「へえ、凄い。そんなに上手いの」

「そりゃ、もう。初めて聴いた時、わたし涙が止まらなかったわ」

ええっ、まじで。大袈裟過ぎんじゃない。矢張り嫉妬心から、懐疑を抱くミサであった。

「だってね、丸で天使の歌声なのよ」
　天使の歌声……。そう言われてさっとミサが思い浮かぶのは、米国のミニー・リパートンである。ちょっと、ますます大袈裟なんじゃなーい、オリビアったら。ミサの懐疑心もますます強くなる一方。こりゃもう、自分の耳で確かめるしかなーーい。
「そんなに上手いなら、早くわたしも聴いてみたい」
「大丈夫よ、ミサ。慌てなくてもわたしたち、もう直ぐ目の前で聴けるんだから」
　はやるミサにウィンクしながらも、オリビアのチポの歌に関する話題は途絶えない。
「もしもここがアシスエデンではなく、アメリカとかイギリス、勿論ジャパンでも構わない。何処かショービジネスを有する国だったなら、チポは間違いなく歌手、いいえ、トップスターになっている筈よ」
　トップスター。だから、さっきからほめ過ぎだってば、オリビアのお姉様。ミサは内心、苦笑い。
「そんなに凄いんだったら、さっさとデビューしちゃえばいいんじゃない。レコード会社も芸能界も放っておかないでしょ、そんな逸材」
「だから、アシスエデンなのよ、ここは」
「えっ、どういうこと」
　きょとんとするミサにオリビアは答えた。
「この国には、音楽産業もショービジネスも存在しないのよ」
「え、ええっ。そうなんだ」
　これには吃驚のミサである。まさか、信じらんない。だったら、この国の子どもたちは一体どんなものに夢、憧れを抱くの。さっき会ったばかりのヤポやピポの顔が浮かんだ。それからオリビアのパジェロに集まって来た無邪気な子どもたちの姿が。
「さ、もう直ぐよ、エデンの森は」
「うん」
　ミサは落ち着いて頷いた。アシスエデンにショービジネスがないことにショックを受けたミサは、お陰でシンガーとしての、チポに対する嫉妬や対抗心から解放された。今は純粋にチポの歌を聴いてみたい、早くチポに会いたいと願うばかりだった。
　オリビアとミサの、ふたりのスニーカーの靴音だけが辺りに響き渡った。森に続く道に茂った草をざわつかせ、道端に身を潜める虫や小動物たちを驚かせた。しかし森の入口に近付くにつれ、段々と様々な音がふたりの靴音に加わって来た。砂混じりの風に揺れる草の音、木の枝や葉の揺れる音。夜行性の野鳥や動物たちの鳴き声も聴こえて来た。
　エデンの森に着き、ふたりは足を止めた。周囲を見回すと、ミサにも見覚えのある木が立ち並んでいた。と言っても写真や絵でしか見たことはなかったが。
「バオバブの木ね」
　オリビアに確かめたが、彼女はかぶりを振った。
「えっ、違うの」
「アシスエデンではね、バオバブのことを、トモロウの木と、呼んでいるのよ」
「へえ、トモロウの木」
　しげしげとミサは、目の前に立つ一本のトモロウの木を見上げた。
「さあ、行きましょう」

うん。ミサは黙って頷いた。

森へと入ってゆくふたりの耳に、そして遂にその声は聴こえて来た。幽かに、けれど確かに、その女の歌声が。チポの歌う声である。

ミサははっとして、オリビアの顔を見詰めた。オリビアは無言で頷いた。或いは人差し指を唇に、縦に押し当てたのかも知れない。

ふたりはもう少し前進し、チポに気付かれずそしてはっきりとチポの歌声の聴き取れる場所、一本の大きなトモロウの木の陰で足を止めた。チポへの挨拶なら、いつだって出来る。今はチポの歌を中断させたくなかったし、森のそれは冒し難い程に清らかな空気に完璧に溶け込み、森と一体化したチポの歌声に、じっと聴き入っていたかったからである。チポの歌声は、確かにエデンの森を震わせていた。森の木々を、木々の葉を、大地を、植物、草、虫たち、鳥たち、動物たち、この森に生きとし生けるすべての魂を震わせているのではないかと思える程であった。

確かに、オリビアの言った通りだったわ。ミサは納得せざるを得なかった。なんて愚かなわたし。ミサはシンガーとしての完全なる敗北を認めるしかなかったし、最早そんなことはどうでも良い、取るに足らないことのように思えた。ただ純粋に、今聴こえ来るこの歌声に酔いしれていたい……。

それ程までに、チポの歌声は美しかった。とてもこの世のものとは思えない。なんて美声なの、こんなの生まれて初めて。天使、いや女神の歌声だわ。天が与えた、これはまったく別次元の声なのよ。それに比べて、わたしときたら。こんなの、とても敵いっこない。足元にも及ばないし、嫉妬を抱く資格すらないのよ。ミサは、自分が日本でシンガーソングライターなどとカッコ付けて来たことがただただ恥ずかしく、また哀れな道化師に過ぎなかったとさえ思えて来るのだった。

我知らず、いつしかミサの目には大粒の涙が溢れていた。それは木々の隙間から差し込んで来る月の光に煌めきながら、ゆっくりとミサの頬を伝い落ちていった。何という神々しさ、何という感動。歌ってやっぱり素晴らしい。チポさん、ありがとう……。

しかしチポの歌にはまだ、ミサを驚かせる別の事実が隠されていた。実はさっきからチポはずっと、繰り返し短いひとつの曲だけを歌っていたのである。その歌を幾度も聴いているうち、ミサはふとその曲を以前自分が聴いた覚えがある、そんな気がして来たのであった。確か何処かで聴いたような。確かにわたしは、この曲を知っている。そうだ、このメロディは……、お父さん。

今ミサの記憶が鮮やかに甦った。父が作ったオルゴールに耳を傾ける、幼い日の自分の姿がおぼろげに脳裏に浮かんだ。今チポが歌っているその曲こそ、亡き父保雄のオルゴールのメロディだったのである。じわーっと懐かしさが込み上げ、涙が更にミサの瞳と頬を濡らした。間違いない、お父さんのあの曲だ。そうでしょ、チポさん。ミサは今直ぐにでも、チポの許に駆け寄って行きたかった。

来て良かった。ねえ、お父さん。わたし、ここに来れて良かった。わたしはこの歌を聴く為に遥々この地に来たのだと、ミサは心から思った。

「さあ、そろそろ行きましょう」
　ミサの肩に、そっとオリビアの手が触れた。さっきから彼女は、涙に濡れるミサをじっと見守っていたのである。
　うん。ミサは頬に残る涙の跡を手で拭いながら、無言で頷いた。チポが歌い終わるタイミングを見計らって、ふたりはゆっくりと歩き出した。チポの歌を失くした森は、丸で深い沈黙の中に落ちたかのようであった。
「チポ」
　チポへと近付きながら、囁くようにオリビアが呼んだ。えっ。吃驚したチポが、大きな目でオリビアを見詰め返した。
「どうしたの、オリビア。こんなところで」
　ミサにとっては初めて聴く、普段のチポの声だった。しかしそれは、さっきまでの歌声とは丸で別人のそれであった。アフリカの大地に生きる、逞しい二児の母親の声であった。繊細とは程遠い、けれど力強く、陽気で温もりに満ちた太い声。
　チポは自分の問いにオリビアが答えるより先に、オリビアがここに来た訳を悟った。
「あらあら、ごめんなさい。わたしとしたことが、大事なお客様のことをすっかり放ったらかしにしちゃって。歌い出すとほんと、何もかも忘れちゃうんだから。困ったおばさんね」
　舌を出し、そして笑うチポの声は、森中に響き渡る程の豪快さ。それから真顔に戻ったチポは、自分の目の前に立っている二人の女性と見詰め合った。オリビア、そして隣りにいる小柄の日本女性。月光が、三人の姿を闇の中に照らし出していた。
「ミサね。会いたかったわ」
　チポの声は低く、けれど深く心に染み入るそれだった。
「チポ」
　陽気に答えたいミサだったが、その声にはまだ泣いた後の湿り気が残っていた。しかしそんなことはお構いなし、チポは行き成りミサを抱き締めた。
「ミスュ、ミサ。本当に来てくれたのね」
　どきどき、どきどきっ……。逞しいチポの腕から、彼女の鼓動と体温そして体臭が伝わって来た。チポの情熱に包まれながら、温もりと感動で、ミサはまたしても泣いていた。
「チポ。わたしもあなたに会えて、本当に嬉しい」
　チポとミサはオリビアが見守る中、しばし抱擁し合った。チポも長身、百七十五センチメートルあるから、ふたりのシルエットは丸で親子のそれであった。ミサは子どもが母に甘えるように、チポの胸に抱かれた。懐かしいような、切ないような、大地に抱かれているような気がした。いつまでも、こうしていたいと願った。初対面のチポでありながら、昔からの知り合いだったような気がして、とても他人には思えなかった。そしてそれはチポにとっても同様であった。
「ミサはちっとも変わってないわね。昔ヤスオが送ってくれた写真のまんまなんだから。直ぐにあなたがミサだって分かったわ」
　写真。そうだったんだ、お父さん。見てみたいなあ、その写真。またしてもミサは、父保雄に思いを馳せずにはいられなかった。

　抱擁を解いた後もチポとミサはオリビアを交え、森の中でしばらく語り合った。打ち解けて話すふたりの姿は、仲の良い姉妹のようでさえあった。
「ねえ、チポ。その写真、まだあなたの手元に有るのかしら。もしそうなら、見てみたいんだけど」
　しかしチポの顔は俄かに曇った。
「ごめんなさい、ミサ。実はテロの襲撃を受けた際に、残念ながらみんな焼けてしまったのよ」
　テロの襲撃。そうだったのか。
「こっちこそ、ごめんなさい。気にしないで」
　かぶりを振り、ミサはチポに微笑んで見せた。
「ところでミサ、ヤスオはお元気」
　えっ。そうだった。
　今度はミサの方が顔を曇らせた。でも、そのことをはっきりとチポに告げなければならない。だってその為にもわたし、ここにやって来たのだから。
「実はね、チポ。わたし、父の代わりに来たの」
　父の代わりに。ミサの沈痛な面持ちに、チポは先を聞かずして、答えを察知した。
「ミサ」
　チポはじっとミサを見詰めながら、そっとミサの肩に手を置いた。
「父海野保雄は、十年前に、死にました」
「Ａｈ……」
　深いため息が、チポの口から漏れた。それは森の静寂の中に、やがて吸い込まれていった。チポは勇気付けるように、ポンポンと二度三度ミサの肩をそっと叩いた。その瞳には、薄っすらと涙が滲んでいた。
「そうだったの、ちっとも知らなかったわ。十年前って言ったら、まだあなたが子どもの時じゃない」
「うん」
「あら、良くがんばったわね。辛かったでしょ」
　慈愛に満ちたチポの顔に、ミサの涙腺もまた弛んだ。
「誰だって、いつかは死ぬものよ」
「そうね」
　ミサは神妙に頷いた。
「十三年前、さっき話したけどテロの時、シャングの村でも、たくさんの仲間が死んでいったわ」
「うん」
「ＰＦＡのオフィスも壊されて。そう、その時からずっと、ヤスオにエアメールが送れなくなってしまったのよ」
　残念そうに話すチポ。そうか、そういう訳だったのね。何にも知らなかった自分を、ミサもまた悔いた。
「でも、あなたがこうして来てくれた。ミスュ、ミサ」
「そんな、わたしなんか……」

　それまでずっと二人の話を聞いていたオリビアが、口を開いた。
「ねえ、そろそろ家に戻らない。カポたちも待ち侘びているわ」
「そうね。やだ、わたしったら、またお喋りに夢中になっちゃって。ふたりとも、晩御飯は食べたの」
　するとミサにウィンクを送りながら、オリビアが答えた。
「うん、わたしたちもう済ませて来たから。ね、ミサ」
「えっ、うん」
　ミサは苦笑いを浮かべながら答えた。今更ディナーを終えた人たちから、ご馳走になる訳にもいかないし。
「あらあら、それは残念ねえ。じゃまた明日。しばらくは滞在してくれるんでしょ」
「勿論。一週間、いるつもりよ」
　それを聞いて、安堵するチポ。三人はチポの家へと足を向け歩き出した。帰路でも三人の会話は、和気靄靄と弾んだ。
「ホテルは取ったの。なんなら、わたしの家に泊まりなさいよ」
「えっ」
「ホテル代もったいないし、狭いけど、ミサが寝るくらいの場所なら」
「そうねえ」
　答えに困っているミサに、オリビアが助け舟。
「チポ。ミサは今日ジャパンから来たばかりなんだし、行き成り泊まるなんて無理じゃない。ジャパンとここじゃ、生活習慣だって全然違うし」
　確かに、行き成りは無理かも。さっき入ったチポの家の中の様子を思い出すミサだった。
「分かったわ。じゃ、今度ね」
　チポの家の前に来たら家には入らず、オリビアとミサはそこでチポと別れ、広場のパジェロに戻った。
　それからオリビアにホテル・アシスエデンまで送ってもらい、礼を述べ、オリビアとも別れた。ミサはそしてひとりになった。ホテル内のレストランで夕食を取り、部屋に戻って、体中びっしょりと掻いた汗をシャワーで洗い流した。さっぱりしたら、ベッドに横になり、そのまま一直線で眠りに落ちた。と言いたいところ、衝撃的なチポとの出会いで興奮はまだ冷めやらず。なかなか寝付けなかった。
　眠れないベッドの中で先ず考えたことは、ホテルとシャング間の移動手段のことである。オリビアは毎日送迎して上げると言ってくれたが、彼女だって忙しい身。こっちは観光旅行なんだし、出来たらオリビアの負担になりたくない。どうしよう。そこで思い付いたのがレンタカー。こんなこともあろうかと、国際免許証も準備して来た。確かホテルの向かいにレンタカー屋さんがあったような気がする。よーし、明日確かめて、借りれそうなら借りちゃえ。そしてオリビアに道を教えてもらえば、後は自力でシャングまで通える。いいぞ、いいぞ。
　目を瞑れば、エデンの森のチポの歌声が今にも聴こえて来るようだった。天使のようなチポの歌声、お父さんが作ったあのメロディ、そしてお父さんのオルゴール。あっ、そうだ。オルゴールのこと、チポさんに聞くの忘れてた。明日、絶対確かめねば、お父さ

んのオルゴール……。木霊するチポの歌声の中で、いつしかミサは眠りに落ちた。朝まで一度として、目を覚ますことはなかった。

# (十二) ニ日目

# (十二) 二日目

アシスエデンで迎えた初めての朝、ミサは小鳥の囀りで目覚めた。一瞬自分が何処にいるのか、分からず混乱した。そんなミサを落ち着かせたのは、まだ耳の奥で木霊するチポの歌声であった。

そうだ。わたし、アシスエデンに来たんだった。疲れはなく、目覚めの気分も良かった。小鳥たちの囀りの中に、チポの歌声が聴こえて来る気がした。丸で天国にいるみたい。暑さだって、日本の夏と変わらないような感じ。いいなあ、アシスエデン。ミサはベッドから飛び起きた。

部屋の柱時計を見ると、七時を回っていた。カーテンの間から漏れて来る朝陽が眩しそうである。思い切ってカーテンと窓を開ければ、そこには雲ひとつない青空が。きれーい。でもやっぱ暑ーっ。直ぐに額と脇に汗が滲んで来た。それに流石は首都トピアの中心部。通りを忙しく歩くビジネスパーソンの姿も見えるし、賑やかな人々や車のノイズも聴こえて来た。

ホテルのレストランでモーニングサービスのクロワッサンと珈琲の食事を取りながら、棚に置いてあった英字の新聞をぱらぱらとめくった。読むと言うより、眺めただけ。どうでもいいわ。今のわたしに事件とか経済とか国際問題とか、その他諸々、何にも関係なーい。よし、オリビアが来る前にレンタカー屋でも覗いて来るか。と思ったが、のんびりし過ぎたせいか、既に八時半過ぎ。

オリビアは九時前に迎えに来てくれる。てことは彼女はシャングのシティを八時には出て来なきゃなんない。やっぱ、申し分けなーい。予定通りの時間に迎えに来たオリビアに、早速ミサはレンタカーを借りたい旨を申し出た。気を悪くするかと思ったが、オリビアはにこにこ快諾してくれた。

「ＯＫ。その方がミサも自由に動けるしね。でも困ったら、遠慮せず直ぐに言って頂戴」

「はーい。お姉さま」

オリビアに付いて来てもらい、ホテルの向かいのレンタカーショップに入った。オリビアのお陰で商談はスムーズに運び、六日間に念の為出発の日分を加えて七日間借りることにした。車はブルーのパジェロ。支払いはドル払い。ちなみに日本車は当然ながら直接日本から入って来る訳ではなく、南アフリカ経由でアシスエデンに輸入されているとのことだった。

よし、これで毎日ホテルとシャングを行き来出来るぞ。それに基本寝泊りはホテルだけど、もし何かあれば車中泊したって良いし、チポの家に泊まらせてもらうのだって有りかも。などと滞在期間中の行動に、ひとり思いを馳せるミサであった。

「では、遅くなったけど、出発しましょう」

「はーい」

ミサは車にギターを乗せ、オリビアのパジェロの後に付いてホテルを出発した。実はギターの他に、カセットテープレコーダーも持参した。日本にいる時からミサは、是非父のオルゴールを録音し、テープに収めて持ち帰りたいと願っていたからである。

さあ、目指すはシャング。先ずは道を覚えなきゃ。ミサはしっかりとオリビアの後に付いて、道と標識、風景を確かめながら走行した。先ずトピアの中心部、流石に日本の都会並みに交通量が多くかつ細い道を通過した。ここら辺は、標識を辿れば何とかなりそう。

それから郊外へ。しかしひとたび郊外へ出れば後はシャングまでは道一本の一直線。舗装された広い道路を、農村地帯に沿ってただひたすら走り続ければ良いだけ。

「あれっ、そうだったっけ」

「そうよ。だから楽勝でしょ」

にっこり微笑むオリビアに、ミサは拍子抜け。でも良かった。交通量だって大したことないし。ミサも余裕の笑みを浮かべ、リラックス。

「じゃ、こっからはがんがん飛ばすから、ちゃんと付いて来てよ、ミサ」

「ＯＫ。何処までも付いてゆきますわ、お姉さま」

車窓から叫ぶオリビアに、威勢良く叫び返した。日本での憂鬱などすっかり影を潜めたミサである。

オリビアのパジェロを見失わないように車を飛ばしながら、農村地帯の景色を眺めるミサ。畑、原野、地平線、何処までも果てしなく続く道。大地が広がり、緑が広がり、そしてみんな、大空の青さへとつながっている。原野においては、野生動物の姿も時より垣間見えた。キリン、シマウマ、インパラ、それにアフリカゾウも。わーっ、凄い。コンドルも飛んでる。水辺には、アフリカスイギュウやクロコダイルも。恐そう。でもみんな、のんびりとしてて、気持ち良さそう。

窓を一杯に開ければ、風が髪をかき乱し、頬を引っ叩いてゆく。ふーっ、強烈。それに蒸し暑ーい。でも、澄んだ空気が美味しい。気持ち良過ぎて堪んない。ふう、気分爽快。わたし、あんな狭っ苦しい日本の中で、一体何を悩んでいたんだろう、まったく。ちまちました下らないことなんか、どっかへ吹っ飛んでしまえーーっ。

身も心も軽くなり、アフリカの大地の中で解放されたミサの魂は、何処までも何処までも車ごと飛んでいってしまいそうだった。生きてるって、素っ晴らしい。今わたしは、確かに生きているんだ。わーーーっ。思いっ切り、大声で叫び出したい。そして、歌いたーーいっ。

……えっ、ちょっと待ってよ。ふと我に返ったミサ。それとこれとは話が別でしょ。あんた何考えてんのよ、いい歳こいて。兎に角、歌のことは駄ー目。もう日本で、歌なんか歌わないって決めたんだから、でしょ。でも……。ミサは自問自答する。でもここは日本じゃないし。でも、でもわたしやっぱり、歌いたい。我慢出来なーーいっ。このようなミサの歌への気持ちの変化には、当然昨夜のチポの歌が大きな刺激と影響を、与えているのは言うまでもない。

しょうがないなあ、もう。ミサは苦笑いを浮かべるしかなかった。そしてミサは、昨夜チポが歌ったあの歌、詰まり父保雄が作ったオルゴールのメロディを、ハミングで口遊み出した。短い歌だしかつ何度も聴いていたから、すっかりもうメロディを覚えていたのである。

けれど歌詞の方はまだ、残念ながら覚えられなかった。確かにもしチポが英語で歌っていたならば、歌詞も覚えられたであろう。しかしチポは、グリラ語で歌っていたのである。その為ミサは意味も理解出来ず、歌詞を覚えることも出来なかった。その為ハミングで口遊むにとどまったのであった。

でも歌詞があるってことは、誰かが作詞したってことでしょ。もしかしてお父さん。でもお父さんって、グリラ語分かってたのかなあ。それとも日本語か英語で作ったのを誰か、もしかしてチポ、が翻訳したのかも。よし、このことも後でチポさんに聞いてみよう。あーっ忙し。

こうしてミサは、最高のドライブを楽しみながら、あっという間にシャングに到着したのであった。

今日はもうＰＦＡの事務局には寄らず、シティを通過した。そのまま一本道を走り続けてしばらくすると、見覚えのある集落が見えて来た。チポの集落である。時刻は十時半少し前。

集落の広場の隅に二台の車が止まるのを、何事かと集落の人々が好奇の目で眺めていた。

「ビュテ」

先に車を降りたオリビアが、大声で皆に声を掛けた。すると人々も愛想良く挨拶を返して来た。

「ビュテ、オリビア」

「ビュテ、相変わらず元気な人ね」

みんな安心した顔で、それぞれの持ち場へと帰っていった。

「ビュテ。どういう意味」

パジェロを降りて、ミサが尋ねた。

「おはよう」

「ああ、ＯＫ」

チポの家へと向かいながら、オリビアが尋ねた。

「どう、明日からひとりで大丈夫」

「ＯＫ。今夜から、もう大丈夫よ」

そこへ、道の反対側から見覚えのあるひとりの女性が。逞しい身体付き、直ぐにチポだと分かった。

「グッドモーニング。ミサ、オリビア」

チポは大きく手を振りながら近付いて来た。答えて、ミサが叫んだ。

「ビュテ、チポーーッ」

「あら。ビュテ、ミサ」

チポは大きく手を広げ、豪快に笑いながらミサを迎えた。その笑顔に包まれると、ミサは安らぎを覚えずにはいられなかった。異国の地でありながらこのシャングの村が、自分の故郷であるかのようにすら思えるのだった。

「じゃ、わたしはお役御免ね。夕方立ち寄るから、なんかあったら声を掛けて頂戴」

「うん、ありがとう」
　チポへの挨拶を済ませると、オリビアはシティのオフィスへと戻っていった。
　これで初めて、チポとふたり切りになった。けれど緊張などない。ふたり並んで歩き出した。
「さ、家に入りましょう。今は誰もいないのよ」
　子どもたちは二人とも小学校に行ったし、旦那のカポもさっさと畑に出て、今頃は汗だくで働いていることだろう。シャングの男連中は大抵早朝から仕事を始め、お昼には切り上げるそうだ。後は広場に集まって、お喋りしたり、木陰で涼んだり、昼寝したり……。
「朝の食事は取ったの」
「うん、大丈夫」
　ミサは笑みを浮かべたが、チポの次の言葉に吃驚。
「アシスエデンでは、朝は食べないのよ」
「えっ、ほんと」
　チポは頷いた。
「だからグリラ語にも、ブレックファーストに相当する言葉はないの」
「へーーっ。知らなかった」
「尤も近頃では、欧米化されたトピアの街辺りで、食べてる人もいるみたいだけどね」
「そうね」
「アシスエデンじゃ昔っから、朝は透き通った空気と水と太陽の光さえあれば、それで生きてゆけるのよ」
　へえ、何だか仙人みたい。わたしも真似してみようかな、元々朝は小食だし。ミサがそんなことを思っているうちに、チポの家の前。
「どうぞ」
「はい、お邪魔しまーす」
　チポの家に入った。直ぐに昨夜と同じにおいがした。気にはなったがチポが窓を開けてくれたお陰で、多少和らいだ。それに直ぐに慣れるだろうとも思った。
　昨夜はここでゆっくりする暇もなかったが、見回すと部屋の中はかなり質素だった。玄関からベッドルームとキッチンとに分かれ、どっちの部屋にも窓が一つずつあった。ベッドルームには夫婦の大きなベッドがひとつと、子どもたちそれぞれのベッドが並んでいた。ベッドには棚があり、しかし他には何もなかった。天井から、はだか電球がひとつ垂れ下がっているだけ。
　一方キッチンを見ると食卓があり、それを四つの椅子が囲んでいた。四人家族。食卓の上には電気コンロが置かれていたが、全体にキッチンというより倉庫といった印象だった。床には水を貯めた大きな甕があったり、収穫したトウモロコシが積み重なって置かれていた。その他に、いも、トマト、大豆、ムリオという菜っ葉なども。棚があり、そこには食器、鍋、ナイフや食パン、ピーナッツバター、調味料が並んでいた。それから停電で電気コンロが使えない時の為に、木炭とそれをくべるコンロもあった。
　ふたりはキッチンの椅子に腰を下ろした。窓から差し込む午前の光が、部屋全体を明るく照らしていた。
「この土地の人は、みんな人懐っこいからね。ミサにも遠慮なく挨拶して来る筈だから、

グリラ語の挨拶、少し覚えておく」
　チポの問いに、望むところとミサは微笑み、頷いた。
「ありがとう。是非、お願い」
「じゃ、おはよう、が、ビュテ」
「ビュテ」
「こんにちは、が、ドリム」
「ドリム」
「今晩は、が、サンク」
「サンク」
「お休みなさい、が、リーヴ」
「リーヴ」
「さよなら、が、ハッピ」
「ハッピ」
「ありがとう、が、ミスュ」
「ミスュ」
「あと、挨拶の言葉じゃないけど」
「うん」
「幸福、が、テアズ」
「テアズ」
「夢、は、トモロウ」
「夢が、トモロウ」
「ＯＫ」
　満足そうにチポが笑った。トモロウと呟くミサの唇を、風がそっと撫でていった気がする。トモロウは、夢。

# (十三) ハルナッツとサウダ

# (十三) ハルナッツとサウダ

窓を開けっ放しにしているせいか、盛んに虫が入って来て、家の中を我が者顔で飛び回っている。顔、頭、首、腕、足、いたる箇所に留まって来るから堪らない。果ては下着の中に侵入して、おっぱいにまで。くう、鬱陶しい。ミサはいちいち手で払い除け、少し苛々しながら会話した。比べてチポの方は一向に気にする気配がなく、終始涼しい顔。くーっ、流石。わたしも慣れるかしら。ミサは羨ましくてならなかった。

主に大小の蝿と蚊であるが、時より日本では見たこともない綺麗な羽虫も飛んで来た。それに民家の窓辺にすら、野鳥が訪れ羽根を休めることも。事実ミサの目の前の窓辺に小鳥が憩い、しばしば二人の会話を中断させた。

青い鳥、赤い鳥、ホワイトバード、ブラックバード……。人間様が会話をしているその横で、お構いなしに鳴いている。

鳥と言えば、何処からか鶏の声もしていた。集落の中で何軒か、動物を養う家があると言う。鶏、山羊、牛、豚。自分とこの収穫物であるトウモロコシやトマト等と物々交換で、エンデ家はそれらの家から卵や鶏肉を手に入れているそうである。

とりとめのない世間話のうちに、気が付けばもうお昼になっていた。朝食を取らないチポのお腹が元気にグーーッと鳴いて、チポは豪快に苦笑い。

「あらあら、まあ、わたしとしたことが」

釣られてミサも、大笑い。

「ランチにしましょう」

「はーい」

早速調理に取り掛かるチポの様子を、ミサはしっかりと観察。メニューはアシスエデンの主食、ハルナッツである。

大きめの鍋に二人分トウモロコシの粉を入れ、水を少々加え、電気コンロの弱火で時間を掛けて温める。大きめのスプーンで丁寧にこねながら、とろりとろりと煮込むと言うか、炊くと言うのか。甘い香りを漂わせながら、トウモロコシの粉はいつしかこってりと粘っこく固形化していった。

「美味しそう」

ミサが声を上げると、悪戯っぽくチポがウィンク。心もとろけゆくような至福のひと時である。

さあ、これで主食の出来上がり。延々三十分の時を要した。大きな皿ふたつに、出来上がったハルナッツをミサが盛っていると、早くもチポは別の鍋を用いて、トマトを煮込んでいた。それにシティの市場で購入したルーを溶かし、トマトベースのシチューを作るという訳。具にはトウモロコシ、大豆、それにチキンを少々。いもは軟らかくなる

のに時間が掛かるから、今日のところは省略。これまたとろとろと時間を掛けて煮込みたいところだが、待っていたら折角のハルナッツが冷めてしまう。適当なところでコンロを切って、大きめのマグカップ様のコップに注いで出来上がり。
「さあ、召し上がれ」
　わあ、なんか感激。
「いただきまーす」
　ミサは子どもに帰った気分で、掌を合わせた。ミサのお腹もグーッと鳴いた。
　風がチポとミサの食卓へと吹いて来る。熱風である。ふーっ、やっぱり暑い。ちょうどショートカットで良かったとミサは思う。人生何が幸いするか、分かったもんじゃないわ。
　へー、そうなんだ。ほんと、嘘みたい。もぐもぐとご馳走を頬張りながら、ミサはチポが話すカポや子どもたち、近所のみんなのことに耳を傾けた。それから時間があったら行ってみましょうねと、昨夜行ったエデンの森から三キロメートル離れたハルカ砂漠や、畑地帯の方角にある五キロメートル先のアシタ湖のことなど。
　うん、うん、そうなんだ。なーるほど。ミサは頷き、大人しく相づちを打つだけ。チポってきっと、お喋り好きなんだろうなあ。そんなチポの話を聴いているだけで、ミサは充分に楽しかった。
　ハルナッツをスプーンですくい、シチューのコップに沈め、たっぷりとトマトの味を吸い込ませたら、そのまま口に持って来る。じわーっと広がる素朴な味。美味しい……。なんて美味しいんだろ。それだけで、涙が溢れそうになる自分がミサは可笑しかった。必死で涙を堪えた。何してんだろ、わたし。昨日からほんと、泣いてばっかり。気になっていた家の中のにおいも、もう気にならないし、おっぱいの中を未だうろちょろする羽虫のことも許せそうな気がした。滴り落ちる汗、野鳥と鶏の鳴き声、静かに置かれた収穫物たち。藁製の天井から吊り下げられたはだか電球が、幽かに風に揺れていた。遠くに聴こえる人々の、グリラ語のざわめきがしていた。ありがとうが、ミスュ。夢は、トモロウ。トモロウ、何もかもがやさしくてならなかった。
「ミサは、泣き虫なのね」
　チポが笑っていた。チポの頬に小さな蝿が留まっていた。その蝿は今、チポの笑みをどんなふうに受け止めているんだろう。チポの頬を、やさしい大地、故郷だと思っていてくれたらいいのに。ミサはそう願った。それまではだか電球を揺らしていた風が、ふっとチポの頬を撫でていった。チポの頬に付着した埃を払うかのように。驚いた蝿は、何処かへ飛んでいった。こそばゆいのか目を擦ると、チポは掌を合わせた。
「ご馳走さま、でした」
　続けてミサも、掌を合わせた。
「ご馳走さまでした」
「それじゃ、食後のお茶にしませんこと」
　チポは立ち上がり、お茶の準備を始めた。
　甕に貯めた貴重な水をポットに注ぎ、電気コンロでお湯を沸かす。お茶はサウダ。カップに粉にしたサウダの葉を入れ、お湯を注ぎスプーンで掻き混ぜれば、すぐさま溶けて、はい出来上がり。カップには抹茶のようなエメラルドグリーンの水面が広がっている。

飲むのが、勿体無い美しさであった。
「美味しそう。いただきます」
「はい、いただきます」
　口に含めば、ほのかに甘い味がやさしい。
　ひと息ついたら隣りの両親の家に行かないか、と誘われた。なんでも、長年のチポへの教育支援に対して、ふたりから礼を述べたいのだそうだ。
「わたしじゃないけど、いいのかな。それにもう十五年以上前のことでしょ」
「いいのよ。それでふたりの気が済むんだから」
「そっか。そうね、分かった」
　あっ、でもその前に。忘れないうちに一番肝心なこと聞いとかなきゃ。それは父保雄のオルゴールについて。するとチポも別の用事を思い出したらしく、急に椅子から腰を上げた。
「そうだ、その前に」
　チポはそのままベッドルームへと向かった。それから直ぐに手に何かを携え、戻って来た。初めは何か分からなかったが、見るとそれは折り畳まれた、すっかり古びた麦わら帽子だった。
「昨夜、テロの話をしたでしょう」
「うん」
「その時、わたしの家も爆破されちゃってね」
「えっ、嘘」
「その際に、昨日も言ったけど、ヤスオからもらったエアメールも、あなたが写った写真も、ヨコハマの海の写真もね、みんな、みんな焼けちゃったんだけど」
　てことは、あっ。ミサは悪い予感に襲われた。もしかしてオルゴールも。どきどき、どきどきっ……。ミサの鼓動が高鳴った。
「じゃ、父のオルゴールも」
　恐る恐る確かめるミサに、チポは曇った顔でかぶりを振った。
「ごめんなさい。命より大事なヤスオのオルゴールだったのに。それも、駄目だった」
　えっ、やっぱり。ミサは落胆した。そこへチポが、持っていた麦わら帽子を広げてみせた。
「これが、瓦礫の中から拾い集めた、部品」
「チポ。あなた、大事に取っておいてくれたのね」
　その時ミサの耳に、昨夜聴いたチポの歌が甦って来た。確かに残念ではあるけれど、でももうどうしようもないこと。そう思い、ミサは潔く諦めた。
「ありがとう、チポ。父も絶対喜んでくれてると思うわ。だって父のオルゴールは壊れても、あなたの歌の中で、今も父のメロディは生き続けているんだから。そうでしょ」
「そうね。あなたの言う通りだわ、ミサ」
　暗かったチポの顔に笑みが差して、いつものチポに戻っていた。ミサはそして、やっぱり歌って凄い、そう改めて思い直していた。そんな大事な歌を、わたしは日本で捨てようとしていたなんて。シンガーソングライターとしてわたしは恵まれた環境にありながら、あんな些細なことで、歌うことを止めようなんて。なんて愚かなわたし……。ミ

サは自分が恥ずかしくてならなかった。
　結局アシスエデンには来たものの、父保雄のオルゴールは既に壊れ、長旅の最大の目的でった、念願の父の幻のメロディを二十年振りに聴くことは叶わなかった。ミサはギターと共に車に載せて来た、カセットテープレコーダーのことを思い出した。
　どうしよう。もうお父さんのオルゴール、録音出来ない。でも……、そうだ。ミサは閃いた。チポの歌を録音させてもらおう。しかし、もし録音するとしても、それは今でもなければ、このチポの自宅の中ででもない。ミサは鮮烈だった昨夜のエデンの森でのチポの歌との出会いを、思い出さずにはいられなかった。もしチポの歌を録音するのであれば、あそこ。エデンの森で、しかも夜でなきゃ。それしか有り得ない。そこでミサは一旦、チポへの録音の申し出を先延ばしした。

　サウダを飲み干すと、ふたりは表に出た。
「あれっ、でもカポは」
「どうかしたの、ミサ」
「カポは、ランチを食べに戻って来ないのかしら」
「ああ。あの人のことなら、心配しなくて平気。広場で適当に食べるし、今頃はゴロンと横になって、くつろいでるから」
「へえ、のんびりしてるのね。羨ましい」
　チポの後に付いて、アポ・トウカの家詰まりチポの実家を訪ねた。と言ってもお隣りさん。トントンとドアを叩けば、中からミポ・トウカのしゃがれた声が返って来た。グリラ語である。
「はーい、入ってらっしゃい」
「さあ、入りましょう」
　ドアを開け入ってゆくチポに付いてゆく。家の間取りと構造は、チポの所と変わらない。しかしこっちのベッドルームに、ベッドはふたつ。その分空いたスペース、ベッドとベッドの間に、手作りのテーブルがひとつ置かれていた。トモロウの木で、アポがこしらえたそうだ。トモロウの木と言えば『サン＝テグジュペリ』の『星の王子さま』のお陰で、日本ではすっかり悪者扱いだが、広大な大陸にあっては貴重な存在なのである。
　トモロウの木のテーブルの前に、アポとミポのふたりがひっそりと佇んでいた。二人とも小柄な痩せた老人。ミサを見るなり、ふたりは静かな歓声を上げた。
「おお」
「あーら」
　チポの弟のタポは既に結婚し、集落の中に別の所帯を構えていた。
「パパ、ママ。連れて来たわよ」
　グリラ語でチポが威勢良く声を掛けると、老いたふたりはゆっくりとミサに近付いた。ふたり同時に握手を求めて来た。困りながらも右手でアポの、左手でミポの手を、ミサは握り締めていた。ふたりの手は細くて皺だらけ、でもあったかかった。
「ドリム、ミサ」
「ドリム、アポ」

　アポが顔を皺くちゃにして笑えば、ミポは涙ぐみながらミサに話し掛けた。
「会いたかったわ、ミサ。丸で夢みたいよ」
　チポの通訳で意味も分かり、ミサは感激と感謝で一杯、胸が熱くなった。
「駄目よ、ふたりとも。ミサは泣き上戸なんだから」
　しかしチポとて通訳係に徹し切れず、思わず目頭を熱くした。
　本当にここはいい人たちばかりで、羨ましい。みんな邪気のない子どもみたいな人たちばっかり。それに比べて、日本って国は……。でも今は日本のことは忘れよう、そう思うミサであった。
「さ、みんな。座って、座って」
　キッチンから椅子をふたつ、チポが運んで来た。チポとミサがそれに座り、アポとミポは各々のベッドに腰掛け、小さなテーブルを囲んだ。
「ランチは食べたの」
「さっき、うちで済ませてきちゃった。ごめんね」
「まったく気が利かないねえ、おまえって子は」
「だってふたりとも、お腹ぺこぺこだったのよ」
　ミポの問いに、チポが答える。グリラ語であるから、ミサには意味は分からない。しかし流石母娘、息ぴったり。それに感じも良く似てるし。ミポとチポとのやり取りをただ眺めているだけで、充分に楽しかった。自然ミサは、日本にひとり残して来た美鈴のことを思い出さずにはいられなかった。
　ところがアポとミポの表情が、突如崩れた。海野保雄の死を、チポがふたりに知らせたからのようである。ミポはミサの前に跪き、ミサの手を握り締めて言った。
「あらまあ、なんてことでしょう。真 (しん) に生きる人程、早く天に召されるものなのねえ」
　ミポの言葉に頷きながら、アポは沈痛な表情でミサとミポの肩に手を置いていた。言葉の意味は分からねど彼らの誠意を受け止めたミサは、老いたふたりに感謝の言葉を返した。
「ミスュ、アポ。ミスュ、ミポ」
　気を取り直したアポとミポはしみじみと語り、笑い合った。
「でも良かったねえ。生きているうちに、ヤスオの娘さんにお礼が言えたわ」
「そうとも。長生きも、たまには悪くないもんだ」
　それ程までに海野保雄から受けた恩、娘チポへの善行をいつまでも忘れないふたりであった。流石にミポのサウダまでは断れず、本日二杯目の喫サウダと相成った。
　サウダはミルクもシュガーも入れないのにそれでいてコクが有り、甘いのはサウダ自体に糖分があるからだと言う。これがサウダ糖となって、アシスエデンの人々の貴重な糖分になっているそうだ。そんなサウダはこの地球上で唯一、アシスエデンでのみ獲れる貴重な自然の恵みなのである。

　トウカ家を後にした。外に出れば、むせ返るような広大な大地に降り注ぐ強烈な太陽。ぎらぎらとした午後の陽射しが、ふたりの体に痛い程に照り付ける。チポにすればいつ

ものことであるが、慣れていないミサには堪らない。それに日焼け止めは持って来たが、帽子の類をうっかり日本から持って来るのを忘れた。
　そこで一旦自宅に引き返し、チポが自分の分と共に、娘ピポの帽子を持って来てくれた。麦わら帽子である。
「あの子には内緒よ。こっちにいる間、使って頂戴」
「でも悪いわ」
「いいから、いいから。あの子には学校のを貸してもらうから」
「じゃ、遠慮なく」
　ピポの麦わら帽は、ミサの頭にピッタリだった。試しにチポのそれを被ってみたら、ぶーかぶか。最初は帽子に染み付いた持ち主の頭のにおいが気になったが、直ぐに帽子の一部として慣れてしまった。
　チポに案内してもらいながら、集落の中をゆっくりと巡って歩いた。
「ドリム、チポ」
「ドリム、サマニ」
「ドリム、チポ」
「ドリム、ナミデ」
　通り掛かるチポに、気さくに声を掛けて来る近所のみんな。路地で立ち話をする主婦や、家の窓辺から顔を出す老人たち。みんな陽気で人懐っこそう。ミサも思い切って挨拶をしてみた。
「ドリム」
　すると聴き慣れない声に向かって、誰もがにこっと返してくれた。
「ドリム」
「ドリム」
　温かい声と笑顔である。いつしか好奇心でみんなが寄って来て、チポとミサを取り囲んだ。
「チポ、お客さん」
「何処から来たの」
　皆、グリラ語でチポに尋ねる。
「みんなに紹介するわ。ジャパンから来たミサよ。よろしくね」
「あーら、ジャパンからですって。珍しい」
「可愛らしいお嬢さんね」
「綺麗なお洋服、お高いんでしょ」
「ジャパンもこの時期は、暑いのかしら」
「ちょっと、みんな。グリラ語で話し掛けても、通じないってば」
　わいわい、がやがや。何処の国でも、おばさん連中は賑やかなものである。一頻り騒いだ後、波が引くように皆去っていった。
「ふうっ。みんな元気でしょ」
「うん。なんかパワフルで凄かった」
　しばし歩いた後、一軒の家に立ち寄った。うっ、臭い。周囲に独特の臭いが漂っていた。そしてそのにおいの原因も直ぐに分かった。

「ドリム、ムアナ」
　チポが呼ぶと、返事は家の裏の方から。
「チポ、悪いけど今そっち行けないから、こっち回って来て」
「あいよ」
　チポと共に、声のする方へ向かった。するとそこには、小さな家畜の小屋が建っており、奥で女が忙しそうに牛の世話をしていた。
「ムアナ、友人を連れて来たわ」
「あーら、あら。こんなとこから、どうしましょ」
「いいのよ、そのまんまで。ジャパンから来たミサ。よろしくね」
「これはこれは。ドリム、ミサ」
「この人が、ムアナ・カポーテ。五人家族で、ほら、牛と豚を育ててるのよ」
「ほんとだ、凄い。ドリム、ムアナ」
　ムアナの背中に大声で呼ぶと、済まなそうにムアナの声が返って来た。
「ミサ、ごめんなさいね、取り込み中で。今手が汚れちゃってるもんで、握手も抱擁も出来ないのよ」
「いいの、気にしなさんな。じゃ、またね」
　ミサに代わって、チポが答えた。
「じゃ、また。広場でお会いしましょう、ミサ」
「はーい。ハッピ、ムアナ」
「ハッピ、ジャパンの可愛い娘さん」
　何処の家もエンデ家同様、トイレも風呂もなく、水道もなかった。女も男も大人も老人も子どもたちも、集落のみんなは広場にある共同トイレと井戸、そしてシャワーを仲良く使っているのだった。
　このように水廻りに関しては、共同でも集落内に使える場所があるから良いが、ＴＶ、ラジオ、新聞に関しては、集落の集会所にすらなかった。アシスエデンの人々はトピアの市街地まで行かなければ、マスコミの情報を入手することは出来ないのである。
　教育環境だって、チポが子どもの頃と大きな違いはないらしい。みんな小学校までが精一杯で、チポのようにＰＦＡの援助によってなんとか中学校まで行けるのである。
　それでも集落の人々はみんな元気で、いつもにこにこ、実に幸せそうでならなかった。きっとみんなで互いに信頼し合い、助け合って生きているからなのではないかとミサは思った。
　日本とは全然違う、いや西欧のどんな先進国とも異なる。ここは別世界のようだ。そしてお父さんはこんな遠い国のチポに、教育支援をしていたのだ。凄ーい。現にチポは顔を合わせた集落のみんなに、こう言ってミサを紹介するのだった。
「わたしを中学まで行かせてくれた恩人、ヤスオ・ウミノのお嬢さんなのよ」
　するとみんなはあたかも自分が世話になった恩人であるかのようにミサと接し、ミサに握手を求め、抱擁して来るのだった。生前ミサに対しては無口で無愛想だった父保雄のことが、急にいとおしく思えてならなくなった。

# (十四) カセットテープレコーダー

# (十四) カセットテープレコーダー

「どう、疲れたでしょ、ミサ。ちょっと静かな場所を散歩してみない。それとも家に帰って休憩の方が良いかしら」

シャングの人々と会って疲れたであろうミサを気遣い、チポが尋ねた。

「うん、じゃ散歩しよう」

「ＯＫ。それじゃ、森まで歩きましょう。とても涼しいから」

集落を出て、エデンの森へと続く一本道を歩いた。昨夜オリビアと歩いた時はまっ暗だったから景色どころではなかったが、そこにも道に沿ってトモロウの木がぽつりぽつりと立ち並んでいた。シャングの人々は、この道を『トモロウの道』と呼んでいた。トモロウの木の立つ砂地の地面には赤い花が咲き、草も茂っていた。

オレンジ色の鳥が一羽、何処からか飛んで来てトモロウの木にとまった。立ち止まりミサはその鳥を眺めた。チポも振り返り、足を止め一緒に眺めた。

「カラカラ鳥って言うのよ。あんまり愛想は良くないけどね」

チポが笑っている間にも、鳥は鳴き出し、カラカラカラ……。遮る物のない大地に、その声は響き渡った。確かにあんまり良い声じゃないわね。ミサは苦笑いを浮かべた。

カラカラ鳥が飛び去り、静かになった大地の中で空を見上げながら、ミサはふっわーっと大欠伸。それから背伸びしながら、深呼吸。限りなく澄んだ空気が美味しかった。

近くにあるトモロウの木の下に、ふたり並んで腰を下ろした。森に行くのは止め、ふたりはしばしここで休むことにした。ミサは額や頬に浮かぶ汗をタオルで拭った。エデンの森の緑が見えた。ハルカ砂漠から吹いて来る砂混じりの風にトモロウの木の枝がゆらゆらと幽かに揺れ、丸でふたりに手を振っているようであった。

ぼんやりとその景色を眺めているうち、いつしかミサはうとうと居眠りを始めた。なんとか睡魔に抗おうとしたけれど、旅の疲れには勝てない。チポはそんなミサを黙って見守っていた。

「さ、そろそろ家に帰りましょう、ミサ」

しばし眠った後にミサが目を覚ますと、チポがやさしく言った。ミサは苦笑い。

「ごめんなさい。わたしったら、つい寝ちゃって」

立ち上がるチポに、ミサも続いた。アシスエデンの時刻に合わせた自らの腕時計を見ると、午後四時を回っていた。陽はまだ明るかったが、そろそろ夕ご飯の支度を始める時刻である。

「今日は夕ご飯、食べて行くんでしょ」

前を歩くチポが、振り返り尋ねた。ミサは喜んでと、微笑み返した。

「お邪魔でなければ」

「何言ってんの。あなたはもう家族の一員なんだから」
　チポは一瞬怒ったような顔をしてみせたが、直ぐに笑顔に戻った。
「ごめんなさい」
「その後、ふたりだけで森へ行きましょう」
「やった」
　家に着くと、既にみんな帰っていた。ミサは第一に、ピポに麦わら帽子を借りたお礼を述べた。返そうとしたが、ピポは受け取らずにこう言った。
「ここにいる間、ミサに貸してあげる」
「ほんと。ありがとう」
　キッチンでチポが夕飯の支度を始める。ヤポとピポはベッドルームでお勉強。カポは今日収穫したトウモロコシを、キッチンの床に並べ整理している。ミサも何か手伝いたいが、反って邪魔になりそうな気配。
「むこうで、ゆっくりしてて」
「はーい」
　チポの言葉に、素直に従った。
　子供たちの勉強の邪魔をしないように、ミサはベッドルームの窓辺に佇み、シャングの夕暮れを眺めた。空いっぱいに広がる夕焼けの色がまばゆく目に沁みて来る。野鳥の群れが鳴きながら、何処かへ飛んでゆく。隣近所を見れば何処の家も夕飯のようで、耳を澄ませば賑やかな声が漏れ聴こえて来る。
　村のディナーの時刻が早いのには訳があって、いつ停電になっても困らないように、明るいうちに済ましておこうという知恵である。
「ミサがいる間は、電気落ちなきゃいいんだけどね」
「うん」
「こればっかりは、どうにもなんないわ」
　チポは肩をすくめて苦笑い。でも今夜はまだ大丈夫。昼間に続いて電気コンロが各家庭で大活躍のまっ最中。ハルナッツの香ばしい香りが、集落のあちこちから漂って来る。
「はーい。みんな、お待たせ、出来たわよ」
　威勢の良いチポの声で、キッチンのテーブルに全員集合。
　いっただきまーす。
「今夜はお客様がいらしてるんだから、お行儀良くしてよ」
　チポの忠告に、子供たちは思い思いに答える。
「わかってるってば」
「いつも行儀良くしてるよ」
「はいはい、お利口さんばかりで嬉しいわ」
　カポは寡黙な人。でもちゃんと家族の様子を見守っている。落ち込んでいないか、しっかりご飯は食べているか……。ヤポはそんな父親に似て外では無口だけれど、内弁慶なのかチポやピポとの会話は賑やか。
「いいから、お喋りばかりしてないで、さっさと食べなさい」
「はーい」
　ピポはチポに思いっ切り甘えている。ミサは明日ヤポとピポが学校から帰って来たら、

ふたりと一緒に遊ぶ約束をした。

「ミサと出掛けるんだろ。行っておいで」
　食事の後、カポが後片付けを引き受け、チポに森へ行くよう促した。
「でも、あんまり遅くならないようにな」
「分ってる。それじゃ行ってくるわ」
　普段は威勢の良いチポも、カポの前では大人しい。お似合いの夫婦だなあ。羨ましくてミサはため息を零し、不倫相手だった大黒寅造の顔を思い浮かべて苦笑い。ほんと、あんな男最低。カポの真摯さが眩しくてならなかった。
　ふたりで家を出ると、外は既に薄暗かった。
「あ、ごめん。忘れ物しちゃった。ちょっと待ってて」
　ミサは思い出したようにチポに告げた。それから頷くチポを待たせ、急いで広場に停めた車に戻った。ミサの忘れ物とは、カセットテープレコーダーである。
「お待たせ。行きましょう」
　昼間歩いたトモロウの道を、ふたり黙って歩いた。夜になっても風は強く、森の木々の枝が唸るように揺れていた。夜の帳が降りて、空には月と星々の瞬き。空から降り注ぐ光だけを頼りに、暗い森へと入っていった。
「集落から近い割りに、ここには滅多に人が来ないの。だからわたしは子どもの頃からいつもここに来て、思いっ切りひとりで歌っていたのよ」
「怖くなかったの、こんな暗い場所で」
「全然。それからヤスオからもらったオルゴールを聴いたり、そのメロディに詞を付けて歌ったりもしたわ」
「じゃ、あの詞は、チポが作ったの」
「そうよ。下手な詞だけどね」
　チポは照れ臭そうに、苦笑いを浮かべた。
「でも楽しかったわ。この森の中で毎晩が夢のように過ぎていった。ひとりでも全然寂しくなんかなかった。だっていつもヤスオがそばにいてくれる、そんな気がしていたから」
　チポの言葉にミサは胸が熱くなり、返す言葉も見付からずただ黙って頷くばかりだった。
　ふたりは森の中央にあるトモロウの木の下に腰を下ろした。熱帯夜であるから、確かに汗は止め処なく零れ落ちて来る。しかしそんなことも気にならない位、夜の森はミサの胸にやさしかった。ミサは静寂に浸った。木々の葉のざわめき、風の音、息を潜めた動物たちの気配、野鳥たちの寝息さえ聴こえて来そうな程。そんなミサに、チポが不意に尋ねた。
「それは何」
「あっ、これ。これはね」
　チポが指差したのは、ミサのカセットテープレコーダーである。
「これはね、録音する機械」
「録音。そんなことが出来るの」

頷くとミサは早速、森の中で鳴いている野鳥の声にカセットテープレコーダーのマイクを向けた。それから録音した野鳥の声を直ぐに再生し、チポに聴かせた。吃驚するか、喜んでくれるだろうと期待したが、チポは意外に冷静だった。
「凄いわね。でもそんなことして、どうするの」
どうするって。答えに困ったミサへとチポは続けた。
「すべての歌は、例えば鳥たちのさえずりのように、その時々に生まれ、そして同時に消え去ってゆくもの。でしょ」
うん。ミサは頷いた。
「それが歌の、そして自然の定め。そうでしょ。だから、それで充分なのよ」
充分。でも……。ミサはチポに反論した。
「でも、残しておきたい歌だってあるでしょ。例えば」
「歌を残すって、どういうこと。歌は物とは違うのよ。歌はね……。わたしは自然に逆らいたくないわ」
そんな大袈裟な。
「今この一瞬に生まれ、そして一瞬で失われてしまうからこそ、歌はいとおしいのよ」
分ってる、そんなことは分ってるわ。でもそんなこと言ってたら、音楽産業なんてとても成り立たない。
「チポ、あなたの言うことは分る。でもわたしは。ねえ、わたし日本に帰っちゃったら、もう二度とあなたの歌聴けなくなるのよ。父のオルゴールが壊れた今、あなたの歌を通してしか、オルゴールのメロディを聴くことは出来ないのに」
「それは、そうだけど」
チポは困惑して、ミサを見詰め返した。
「ねえ、お願いだから、チポ。あなたの歌を、今ここで録音させて欲しいの。そしたらわたしはお父さんの作ったメロディを、日本に持って帰れるんだから」
「ヤスオが作ったメロディを」
「うん」
夢中で訴えるミサに、観念したようにチポが苦笑いを作った。
「ＯＫ。そんなに言うんなら分ったわ」
風に誘われるように、チポは立ち上がった。風はそよぎ、チポの頬を撫でてゆく。ミサがカセットテープレコーダーの録音ボタンを押すと、同時にチポが歌い出した。ララバイ・オブ・シー、その歌を。
それは昨夜初めて耳にした時の衝撃を呼び覚ます、澄んだ歌声であった。魂が震え出すような感動と歓喜がミサを包んだ。
チポが歌い終わると、ミサは録音ボタンを止めた。これでチポの歌の録音が完了。ちゃんと録音出来ているか確認したミサは、ほっと胸を撫で下ろした。ああ、これでもう何も思い残すことはない。世界でたったひとつだけの宝石を手に入れたような満足感に浸った。
「それじゃ、今度は一緒に歌いましょう」
「えっ」
チポの誘いにミサは戸惑った。わたしなんかが、チポとデュエットなんて恥ずかしい。

それにグリラ語の歌詞だし……。ところがチポはミサにウインクしながら、ララバイ・オブ・シーを歌い出した。
「これなら歌えるでしょう、ミサにも」
　チポの歌う言葉は、英語だった。元々グリラ語の歌詞を、英語に訳したものである。ああ、確かにこれなら歌えそう。ミサはチポの後を追って、恐る恐る口遊んだ。
　幾度となく、チポとのデュエットを楽しんだ。短い歌であるから、ミサは直ぐに英語の歌詞を覚えた。再びカセットテープレコーダーで、英語版のララバイ・オブ・シーも録音した。ふたりで歌ったことはミサにとって大きな喜びであったが、それ以上にチポの方も喜び、目を潤ませた。
「ウワォー、気分、最高。ミサ、あなたも最高よ」
　子どものようにはしゃぐチポ。ミサも感無量だった。こんな遠い異国の地で、亡き父のメロディを口遊んでいるなんて。
　歌い終わるとチポは思い切りミサに抱き付き、体いっぱいで喜びを表した。なんてワイルドなの、でも嬉しい。ミサも思わず涙ぐんだ。いつまでもこうして、チポと歌っていたい。
　でも。矢張りチポの声にはとても敵わない、自分など足元にも及ばない。辛い現実ではあるが、そう痛感したのも事実だった。しかし格の違いというか、その差は歴然としていて却って清々しい程。最早嫉妬することすら愚かしく、ただただ天賦の美声と讃え、それに酔い痴れる方が賢明であった。
　チポの歌の録音も無事済んだ。チポとのデュエットも思う存分楽しんだ。という訳でチポと共に、ミサは満足げにエデンの森を後にした。チポの家へと帰る道すがら、しかしミサはふっと疑問が浮かび、それをチポに向けた。
「ねえ、チポ」
「なあに。どうかした、ミサ」
「うん。なぜわたしの父は、あなたに横浜の海の写真なんか送ったのかしら。それにどうしてあなたは父のオルゴールの為に作った詞に、ララバイ・オブ・シーという、やっぱり海にちなんだタイトルを付けたの」
　するとチポは、こう答えた。ヤスオの教育支援を受けていた少女期を、感慨深げに思い出しながら。
「アシスエデンに海がないことは、知っているでしょ」
　ミサは頷いた。
「わたしは生まれた時からずっと、一度もまだ海を見たことがないの。これからだって、多分ないでしょう。ヤスオはね、そんなわたしにいつも海の話をしてくれた。そして海の歌だと言って、あのオルゴールを送ってくれたのよ」
　海の歌。へえ、そうだったんだ。わたし、なんにも知らなかった。ミサはカセットテープレコーダーを恋人のように抱きしめながら、チポの後に続いた。
　チポの家を出て、レンタカーでホテルに帰ったミサは、風呂もそこそこにカセットテープレコーダーの再生ボタンを押した。改めて録音したチポの歌を聴き、それを譜面に落とした。いつでもギターで演奏出来るよう、コードも付けた。

後はベッドに横になり、どっと押し寄せる疲労の中、死んだように眠りに落ちるミサだった。

# (十五) 三日目・停電、スコール

# (十五) 三日目・停電、スコール

朝、ミサはシャングに行く前に、シティの市場に足を運んだ。そこでポリエチレン製の水筒を買った。チポの集落に着いたら、昨日同様広場の隅に車を停め、井戸で水を汲み水筒の中に入れた。朝食はチポたちを真似て、摂らなかった。空腹がないと言えば嘘になるが、気分はちゃんとしているし、むしろ身軽に感じられる程だった。

チポの家の前に到着すると、Tシャツに下はジャージ姿のチポが待っていた。今朝はチポも畑に出るらしい。慣れて来たせいなのか、今日は家の中の臭いも気にならなかった。

「退屈だと思うけど、畑を見にいかない」

チポの誘いに頷きながら、ミサは答えた。

「うん。見るだけじゃなくて、何かわたしも手伝いたい」

「OK。じゃ、トマトの収穫をお願いするわ。それなら服も汚れないし」

「トマトかあ。楽しみ」

家の裏に鍬が三本並んでいる。その内のひとつをチポが持ち、ミサは藁で作った、両腕を丸くした位の大きさのザルを手に、畑へと向かった。ザルの中にはトマト収穫用のハサミが入っている。ふたりは水分補給用に、肩から水筒も下げていた。

集落をエデンの森とは正反対の方角に歩けば、やがて広大な農地が見えて来る。集落全世帯分、約五十ヘクタールの畑である。しかし柵や囲いで仕切っている訳ではない。代わりに畑と畑との境界には、トウモロコシの木が並び、ちょうどそれが囲い代わりになっていた。

他所の家の畑の端を歩いて、エンデ家の畑に辿り着いた。その間農作業する集落の人たちから、気さくに声を掛けられた。

「ビュテ」

「ビュテ」

陽射しは朝から強く、ミサは今日もピポの麦わら帽子を借りて被っていたが、それでも歩いているだけで汗だくになった。

エンデ家の畑では、カポが鍬を持って畝 (うね) 作りに精を出していた。そこで、いもを育てるのだそうだ。トウモロコシの立派な木の列が、エンデ家の畑の四方を囲んでいた。隣りにトウカ家の畑がある。でも今朝はまだ誰もいないようだ。

チポはミサをトマト畑に連れてゆき、トマトの収穫の手順を教えた。と言っても簡単。実の成熟度をチェックして、充分に赤くなったトマトを枝から切ってザルに入れる。ザルが一杯になったら、それを抱えて一旦家まで持ち帰りキッチンの隅に並べておいて、再度畑に戻る。

「無理しちゃ駄目よ、ミサ。疲れたら、遠慮せず休んで」

「はーい」

チポはミサをひとり残してカポの所へゆき、夫婦仲良く肩を並べて鍬を構えた。

ひとり残されたミサは鼻歌混じり、トマトのひとつひとつを丁寧に丁寧に収穫していった。ザルは直ぐにトマトの実三十個位で一杯になった。

ふう、疲れた。でもこれなら、楽勝じゃん。トマトで一杯のザルは抱えると結構重たかったが、ミサは頑張ってひとりで家に持ち帰るつもりでいた。ところが様子を見に来たチポが、ミサに声を掛けた。

「もういいわよ、ミサ。トマトはそれ位で充分だから。後は休んでて」

「えっ。はーい」

昼近くまでミサは草の上に腰を下ろし、チポたちの様子と周りの景色を眺めていた。しかし退屈などしなかった。空を見上げれば、眩しい青空の中を巨大な白い雲が果てしなく流れてゆき、一時として同じ顔をしていないのである。風に乗って見たこともない虫も飛んで来るし、畑の周りには、野性の花も咲いている。

黙々と働いていた筈のカポがいつのまにか姿を消し、ミサの許にチポがやって来た。

「さあ、家に帰りましょう。お腹も減ったでしょ」

「はーい。もうペコペコ」

いつのまに収穫したのか、藁で作られた袋の中にはトウモロコシの実が一杯。チポはトウモロコシの袋を肩にしょい、鍬を手に持って歩き出した。ミサはトマトのザルを抱えてチポの後に続いた。ふーっ、重たい。でも自分が収穫したトマトだから、いとおしい。

さあ、ランチ。今日のメニューはハルナッツとムリオの油炒め。それにミサが収穫したトマトを使って、大豆のトマト煮も。

「うわーっ、美味しそう」

トマトは自分たちで消費する他に、集落の中で卵やムリオと交換するそうである。食後は例によって、午後のサウダ。ふーっ、労働の後の一服は天国ねえ。チポの家にもすっかり慣れて、思い切りくつろぐミサであった。

午後はキッチンで、チポのお手伝い。トウモロコシの粒を取って集め、それを石臼を使って粉にする。

「ドリム、チポ」

その間にも近所の主婦連中が訪れ、グリラ語で賑やかな会話が交わされた。意味は分からなかったが楽しそうで、ミサも話に加われたらなあと思いつつ、チポたちの豪快な笑い声を耳にし皆の笑顔を嬉しそうに眺めていた。それに英語にて、時よりミサも会話に加わった。

「ただいまーーっ」

そうこうしているうちに、ヤポとピポが元気に小学校から帰って来た。ふたりは勉強道具をしまうと直ぐにキッチンに飛んで来て、チポとお喋りしているミサにじゃれ付いて来た。

「ねえ、ミサ。遊ぼうよ」

ふたりはミサの顔が見たくて、学校から競争して帰って来たのだと言う。確かにふたりは汗びっしょり。しかし遊ぶといっても、どんな遊びがあるんだろう。多少戸惑いつ

つ、ミサは尋ねた。
「じゃ、何して遊ぼっか」
　するとピポが、片言の英語で即答した。
「お散歩。わたしが案内したげる」
　早くもピポは、ミサの手をぎゅっと握り締めている。小さくて柔らかなその手が汗ばんでいるのが分かる。ヤポはと言えば、照れ臭そうにピポの後ろで笑っているだけ。
「よっし。じゃ行こうか」
　手をつなぎ歩き出すミサとピポに、ヤポが後ろからくっ付いて来る。
「あんたたち、夕御飯までには帰ってらっしゃいよ」
　釘を刺すチポに、三人で声を揃えて答えた。
「はーい。分かってまーす、ママ」
　家を出ると、直ぐにピポが尋ねて来た。
「ねえ、森には行った」
「うん、ママと行ったよ」
「じゃ、畑はどう」
「今朝、行って来たところ」
「そっか」
　ちょっとがっかり気味のピポ。森か畑に連れてゆこうと、思っていたのかも知れない。かと言って散歩するには、シティや砂漠や湖までは遠過ぎる。
「じゃ、広場はどう」
　それまでずっと黙っていたヤポが、待ちかねたように言葉を発した。
「あっ、いいかもね」
　そう言えばいつも車を停めるや、後はチポの家に直行していたから、広場についてはまだよく見ていなかったミサである。
　ヤポ、ピポと三人で広場へと向かった。広場にはベンチが並び、多くの人々が思い思いに過ごしていた。集落の広場は集落の中心に有り、集落の人々が集まり、休んだりくつろいだりする憩いの場である。そこには集会所、舞台と観客席、トイレ、シャワー室、井戸など、みんなの暮らしに欠かせない環境が揃っていた。
　広場内を散歩した後、三人は集会所に入った。中には椅子とテーブルが並び、大人たちは勿論、子どもたちも腰を下ろしていた。子どもたちは騒ぐことなく、大人しく勉強していた。
　クラスメイトを見付けたピポは、ミサのことを得意げに紹介した。
「こちら、わたしの家のお客さんのミサ。ジャパンから来たのよ」
　と言ってもミサの噂は既に集落中に伝わっていたから、みんな知っていた。
「ミサ、友だちのカナよ」
「ドリム、ミサ」
「ドリム、カナ」
　何人かの子どもたちと握手と挨拶をした。みんな屈託のない、にこにこ眩しい笑顔である。
　集会所を出て、広場の隅のレンタカーを止めている場所まで来た。ヤポもピポも興味

深々、車の中を覗き込む。ふたりはオリビアの車に何度か乗せてもらった、と言う。
「じゃ、今日はわたしの車に乗ってみる」
　ミサが試しに尋ねると、ふたりは大喜び。
「やったーーっ」
　歓声を上げて、喜びを爆発させるヤポ。あらら、ヤポったら、流石男の子。実はわたしより、こっちがお目当てだったのね。
　すると今度はピポが、車内の別の物に興味を抱いた。
「あれ、なーに」
　ピポは後部座席に置かれたギターケースを指差した。
「あれはね、ギターっていう楽器なの」
「楽器、へえ。ねえ、どんな音色なの。聴かせてよ」
　きらきらと目を輝かせながら懇願するピポに、それじゃ仕方ない、とミサは後部座席のドアを開け、ケースからギターを取り出した。ギターを抱えたミサの姿に、それまで車に夢中だった筈のヤポも、思わず注目を寄せた。
　ここじゃ、なんだから。ミサは演奏場所を求めて移動し、広場の一番端のベンチに腰を下ろしてギターを構えた。ミサの両サイドにヤポとピポがいる。
　あれっ、でも何歌おうか。ミサは迷った。わたしのオリジナルは日本語の歌詞だし……。良し、じゃ、洋楽でいっちゃえ。曲目は直ぐに浮かんだ。ミニー・リパートンのラヴィング・ユー。
　イントロを弾き出すと、ギターの音色は昼下がりの風に乗って、広場中に拡がっていった。わーっ、気持ちいい。異国の地に響く澄んだギターの音に、ミサの胸は躍った。しかし気付いたら、自分たちのベンチの周りには人だかりが出来ていた。一体何が始まるのかと、広場中の村人、子どもも大人も集まって来たのである。
　ウワーオ。流石のミサも、思わずドキドキッ。人前で歌うのなんて、わたし久し振りなんだけど……。でもそこはプロ。直ぐに落ち着きを取り戻し、遂に歌い出した。隣りのヤポとピポに、にっこりと歌い掛けるように。
「Loving ｙｏｕ……」
　歌い終わるや、拍手喝采。
「ヒューヒュー、ブラボー」
　大人も子どもも大喜び。ヤポとピポのふたりだって、眩しそうにミサを見詰めているではないか。やっぱい。焦ったのはミサ。なぜならミサの瞼に、じわーっと涙が込み上げて来たから。
　やっぱり、歌って凄い。歌って素晴らしい。ついでに人前で歌うのも最高ーっ。やっぱりわたし、歌がなきゃ生きられない。歌こそ、わたしの人生そのもの。改めて歌への、熱き想いに駆り立てられるミサであった。
　こうして最早歌うことへの抵抗、拒否感など、ミサの心の中から完全に消え去っていた。思えば旅の初日、チポの歌を耳にしたあの瞬間から、ミサはこうなるような予感がしていた。
「ミサ、素敵だったわ」
「夢のようなひと時をありがとう、ミサ」

「アンコール、ねえアンコール」

聴衆である集落のみんなは、ミサを取り囲んだ。握手を求め、惜しみない賛辞を送った。

ミサはみんなの拍手に送られながら、ヤポ、ピポと共に広場を後にした。家ではチポが待っている。さあ、急がなきゃ。時は既に夕暮れ時であった。

ところが家に着くと、チポは渋い顔。逞しい二本の腕で、腕組みをしていた。何事かと問えば、チポは苦笑い。

「停電しちゃったのよ」

ゲッ。遂に来るものが来たかあ。道理で集落のどの家も灯りがなかったのね。でも良い経験だと思って、受け入れよう。ミサは覚悟を決めた。こんな時の為に登場するのが、炭火のコンロである。

「こうやって火を起こすのよ」

器用にチポが、火を起こした。細長い板の上に細い木片の、錐 (きり) のように尖った先端を押し当て、両掌で挟んで回転させ摩擦を起こす。摩擦の熱によって、やがて火が起こる。その火を薪 (木炭) に移して着火させ、炭火とする。そして数本の炭火をスタンドにくべれば、自然のコンロの出来上がりである。

後はいつもの要領で、時間を掛けてハルナッツを煮込む。ミサも手伝い、大豆のトマトシチューを作り、ムリオを炒めて出来上がり。

「さ、すっかり遅くなっちゃったけど、出来ましたよ。みんなで食べましょう」

チポの号令で、全員集合。

「頂きまーーーす」

「うわあ、美味しそう」

窓の外にはまだ僅かに陽が残っており、辛うじて食事が出来る。

「蝋燭点けなくて、平気」

心配するチポに、一同かぶりを振った。

ハルナッツを頬張りながら、ピポがチポとカポに話をする。

「さっきね、ミサ、広場でみんなの前で歌ったのよ」

「あら、凄いじゃない、ミサ。わたしも聴きたかったわ」

笑みを浮かべながら自分を見詰めるチポに、ミサは恐縮。そんな。チポに敵う訳ないんだからと、ミサは照れ臭そうに笑みを返した。その顔の表情も段々と定かでなくなる程に、宵闇が少しずつ迫っていた。ミサは、さっき自分のギター演奏で終わってしまい、子どもたちとドライブ出来なかったことを思い出した。今度は絶対連れてって上げよう。そう誓うミサ。それからチポにギターを聴かせることも。

今夜はミサも食後の後片付けを手伝い、その後チポとふたりだけでエデンの森へと出掛けた。ところが途中で天から雨、スコールである。

ザーッ。降り始めたかと思うと雨はどんどん強さを増し、大粒の雨がふたりの頭上に叩き付けるように落ちて来た。当分止みそうにない気配。

「兎に角森まで行って、雨宿りしましょう」

「うん」

チポの言葉に従い、びしょ濡れのミサはチポと共にまっ暗な道を森へと急いだ。でもトモロウの木なんかで、雨宿り出来るのかしら。ミサは訝った。

案の定、エデンの森に着いて、トモロウの木の下に身を置いてはみたものの、ふたりはびしょ濡れ。ありゃりゃ、やっぱり。ため息吐くミサに、けれどチポは涼しい顔で笑っている。

「通り雨だから、直ぐに止むわよ」

「ほんと」

果たしてチポの言葉通り、十分も経たないうちにスコールはぴたーっと止んだ。同時に夜空を覆っていた厚い雲が消え去り、今度は銀河の瞬きがこの地上へと降り注いで来るようであった。

「雨が降るとね、空気が洗い清められるから、わたし大好き」

そう零した後、チポは歌い出した。チポの歌声を耳にしながら、ミサは思った。雨に洗い清められたエデンの森の大気が、チポの歌声によって更に更に清められてゆくのだと。ミサは天国にいるような気がして、いつまでもこうしていたいと願った。しかしチポが、ミサに囁き掛けた。

「さあ、ミサ。あなたも歌いましょう」

うん。ミサは小さく頷き返すと、歌い出した。ララバイ・オブ・シーのデュエットである。

こうしてチポの歌を間近で聴けば聴く程、ミサの胸には或るひとつの想いが生じ、それはどんどん大きく、強くなる一方だった。

その想いとは、チポを歌手としてメジャーデビューさせられないだろうかということだった。

こんな美しいチポの歌声を、このままこのアフリカの大地、アシスエデンの片隅で埋もれさせて良いものだろうか。いや絶対勿体無い。きっとチポの歌を知れば、世界中の人が彼女の歌を聴きたがるようになるだろう。そしてチポの歌声は、世界中の多くの人々の慰めと喜び、希望になるに違いない。

何とかして、チポの歌を世に知らしめたい。その為なら、わたし何でもする。そう思わずにはいられないミサであった。

# (十六) 四日目・ヤポの夢、ピポの夢

# (十六) 四日目・ヤポの夢、ピポの夢

朝ミサがシャングの村に行くと、昨夜の停電は既に復旧していた。チポの家にゆくと、チポが家の前にどっしりと腰を下ろして、洗濯をしていた。プラスチック製の青い大きなたらいの中に、家族みんなの洗濯物を入れ、ひとつずつごしごしと手洗いしてゆく。
「退屈でしょ、もう少し待っててね」
「平気、平気」
洗濯が終わったら、家の裏の物干し台に張ったロープに干しておく。雨さえ降らなければ、夏なら半日も経てば乾いてしまうそうだ。
ランチをチポとふたりで食した後、チポが小学校の見学に連れて行ってくれると言う。
「吃驚すると思うわ。日本とは全然違うって、オリビアが話していたから」
へえ、どんなところが違うんだろう。ミサは期待に胸を膨らませながら、チポと出発した。
昔カポもチポも通い、現在はヤポとピポが通っているシャング小学校は、全校生徒約三百人。チポの集落からシティの方角へ一キロメートル離れた場所にある。炎天下ふたりは汗だくになりながら、二十分程歩き続けた。
「着いたわよ」
「やった。あれっ、でも何処」
問うミサに、チポが指差した。そこにはけれど校舎と呼べるような建物は一切なかった。ただそこには平原が広がり、中央に大きなトモロウの木が数本並んで立っているのみであった。しかし良く見るとトモロウの木の周りに椅子がズラリと並んでおり、椅子の上には子どもたちが座っていた。詰まり野外の学校である。
「三組に分かれているのよ」
「三組」
「そう。一、二年の組。三、四年の組。それから五、六年の組」
各組に担任が一人いて、その内一人は校長が兼任している。組毎に黒板がひとつ有り、生徒はみんな黒板と貸し出された教科書とを見ながら、屋外の授業に集中していた。頭上に青空が広がり、風が吹く平原のまん中で、暑さに負けず、砂ぼこりにも虫にも負けず、そして雨にも負けず……。
「雨の日なんか、どうするの」
「そんな時はね、授業は中断。みんなでトモロウの木を囲んで雨宿りするの」

チポは先にひとりで帰宅し、ミサだけが平原に残った。ヤポとピポの授業が終わるのを待って、ふたりとドライブする為である。

　そのふたりはチポとミサが来ていることに気付いていて、さっきからそわそわ落ち着かなかった。授業が終わるや、飛んでミサの許にやって来た。三人で集落の広場まで戻り、ミサのパジェロに乗り込んだ。
「学校、楽しい」
「まあね。あっ、こら、ピポ。ぼくがミサの隣りに座るんだぞ」
「嫌、わたしが座るの」
「ね。ピポは、学校楽しい」
「うん」
　ミサの問いに、可愛らしくにこっと答えるピポ。でも、どっちが助手席に座るかで揉めるヤポとピポは、学校の話どころではない。
「まあまあ、落ち着いて。じゃ、こうしましょう。行きがお兄ちゃんで、帰りがピポ。ね、いいでしょ」
　ミサの提案に両者渋々納得し、いよいよドライブ開始。
「でも、何処行く」
「アシタ湖」
　ピポの提案に、ヤポも黙って頷いている。
「よっし、じゃ道案内お願いね」
「任しといて」
　今度は助手席のヤポが威勢良く答えた。
　アシタ湖はチポたちの畑地帯からまっ直ぐに五キロメートル程したところにある。従って車なら十分も掛からない。ヤポに案内を頼むまでもなく一直線に走れば、直ぐに湖の景色が見えて来た。が子どもふたりは車に乗っていることで、終始興奮していた。
　車を降りて、三人で散歩した。湖の周りには緑豊かな木々が立ち並び、足下には草花も咲いていた。何処か北欧の森にでも迷い込んだような景色。湖面では魚が跳び跳ね、水鳥たちが気持ち良さそうに泳いでいた。清らかな湖の水は、周囲の緑を鏡のように映していた。
「勉強は好き」
「まあね」
「ピポは」
「わたしは大好き」
　オリビアに聞いたが、ふたりには各々ＰＦＡペアレントがいて、熱心に入学前から支援してくれていると言う。ヤポは再来年から中学生だが、その分の支援も約束されている。
「科目は何が好き」
　ヤポは、算数で、ピポは英語、と答えた。
「じゃ、ふたりの夢は何」
　夢。問い掛けてから、それが良かったことなのかどうか、ミサは迷った。この未開の大地で果たして子どもたちは、夢なんて持てるのだろうか。しかしそんなミサの心配をよそに、ふたりからは元気な答えが返って来た。
「ぼく、宇宙飛行士になりたいんだ」
「うわあ、凄い」

　そしてピポ。
「わたしはね、ママみたいになりたいの」
　チポみたいに、へえ。ふたりの瞳はきらきらと輝いていた。それは夜のエデンの森から見上げる、あの銀河の瞬きのように。そして澄んだシャングの風の中で、確かに眩しく揺れていた。ミサは無性に、チポの歌が聴きたいと思った。

　家に戻れば、既に日暮れ時。チポが用意しておいたディナーをみんなで食べた。
「ねえ、ミサ。今夜は森でなく、広場に行ってみない」
　チポからの提案である。広場かあ。何かあるのかしら。ミサは快く返事した。
「ＯＫ」
「わたしも連れてって」
　せがんだのは、ピポだった。
　チポとピポと一緒に、広場に向かった。するとまっ暗な中に光が見えた。近付いてゆくとそれは、スタンドの中で燃え上がる五、六本の大きな薪の炎だった。その炎を取り囲んで地べたに座り、集落の人々が集まっていたのである。
「チポ、遅いじゃない。あら、ミサも一緒」
「サンク、アマーラ」
　チポと共にみんなの輪に加わり、ミサも地面に腰を下ろした。クラスメイトを見付けたピポは、直ぐにそっちへ行ってしまった。
「こうやって、夜は女たちで集まるのよ」
　成る程。かと言って大騒ぎするでもない。皆で星を見上げ、その日あった出来事を語り合う。誰彼となく話をし、何も言わず頷くだけの人もいる。けれどみんな満足そうに笑っていた。
「ねえ、ミサ。わたしまだ、あなたの音楽聴いていなかったわ。ちょっとでいいから、聴かせて」
　アマーラがミサに頼む。すると他の女たちも好奇心一杯で頷いた。ミサは困って、チポの顔を覗いた。チポは、にこっと微笑み返した。
「わたしも、聴きたいわ。ミサ」
　うん、分かった。ミサは頷き、車からギターを取って来ると、地面に座ってギターを構えた。
　拍手と沈黙。ミサは緊張した。みんなの前だからというより、チポの前で歌うことに。チポは喜んでくれるかしら、こんなわたしの拙い歌に……。曲は今夜も、ミニー・リパートンのラヴィング・ユーにした。
　みんな大人しく耳を傾け、じっとミサを見詰めていた。チポも見守るように、見ていてくれた。そんなチポの顔だけをまっ直ぐに見詰めながら歌っている自分に気付いて、ミサははっとした。やっぱりチポには敵わない、チポの前で歌うなんて恥ずかしい。ミサの気持ちとは裏腹に、歌い終わると盛大な拍手で皆がミサを讃えた。
「素敵だったわ、ミサ」
「ねえ、ミサ。あなたはいつまで、ここにいるの」

　ミサの代わりに、チポが答えた。
「あと、三日よ。ね、ミサ」
　うん。あともう三日間しかいられないのか、このシャングの村に。急に寂しさが込み上げ、ミサは黙って頷いた。
「じゃ、ミサのパーティしなきゃ」
　パーティ、そんな大袈裟な。吃驚するミサを置き去りに、けれどみんなはすっかり盛り上がっている。
「土曜の夜でいいかしら」
「明後日の夜ね、ＯＫ」
　チポも乗り気。
　さ、パーティの話が出たところで、今夜はお開き。それじゃ、また明日ね。手を振って、ひとりまたひとり姿を消してゆく。
「さ、わたしたちも帰りましょう」
　そう告げるチポに答えて、ミサ。
「じゃ、わたしこのまま、ホテルに戻る」
「そうね。今夜はとっても楽しかったわ。だって、あなたの歌が聴けたから」
「そんな」
　顔をまっ赤にしてかぶりを振るミサだった。
　ひとりになってパジェロを走らせながら、ミサは例の夢想に耽った。それは日増しに大きくなるばかりだった。どうしてもチポを歌手にしたい。チポなら、どんな国に行っても絶対に成功する。チポの歌で、この世界中を震わせてみたい……。

# (十七) 五日目・シティの買い物

# (十七) 五日目・シティの買い物

朝、集落の広場の井戸へと水汲みにゆくチポを手伝った。頭の五倍はある甕を頭に載せて水を運ぶのである。その後ランチを済ませ、午後からはシティへと買い物に出掛けた。ミサの車は使わず、チポたちの普段通りの手段つまり徒歩で。しかもチポとふたりだけでなく、珍しくカポも一緒に行くと言う。

収穫したトウモロコシといもを藁の袋に詰め、それをシティの市場に持ってゆく。小売店に買ってもらう為である。これで初めてエンデ家は、お金を手に入れる。そしてそのお金で、市場で必要な物を購入するのである。

ミサも手伝い各々三人で袋を背負いながら、シティまで約五キロの道を歩いた。カポとチポはいつものことで平気だが、ミサには正直きつかった。何しろ十五キロはある荷物なのだから。

「ミサ、無理しなくていいのよ。あとはわたしが持つから」

チポに言われたが、ミサは最後までやり通した。少しでもチポたちの役に立ちたかったから。ミサは汗だくになりながら、シャングの夏の大地と風の中を一歩一歩進んだ。そして二時間半掛けて、遂にシティに到着。

先ず取引先の店に顔を出した。その店先にはシャングで育った野菜が所狭しと並べられていた。カポと店主との威勢の良いグリラ語のやり取りを耳にしつつ、ミサは野菜を見て回った。交渉が済み、エンデ家の本日の売り上げは締めて三百エデン也。現金はカポからチポへと直ぐに手渡された。

無事資金を手に入れたら、次は買い物。三人で市場を見て回った。食パン、蜂蜜、香辛料、油、髭剃り、石鹸、子どもたちのノートと鉛筆……。蜂蜜はトモロウの木から採れたもの。締めて二百エデン也。

これでエンデ家には百エデンの現金が残った訳だが、実はエデン貨幣には使用期限が定められており、一年間。その間に使い切らねばならない。よってグリラ族には、貯金とか遺産という概念はないのである。

買い物の荷物を抱えて、一足先にカポが帰宅の途に就くと、チポとミサはしばらくシティの街並みを散策した。ＰＦＡの事務所に顔を出して挨拶し、チポたちが日頃礼拝するキリスト教の教会にも立ち寄った。教会といっても、民家を改造したもの。それからチポが通ったトピア北中学校。校舎は木造で、日本の昭和初期の学校を彷彿とさせる趣きがあった。

「さ、そろそろ帰りましょうか」

気付けば既に昼下がり。チポの言葉に、名残惜しそうにミサは頷いた。

再び長い道のりを歩かねばならない。シティを離れると、直ぐに空と地平線だけの景

色になった。やわらかな陽射し、頬に吹くやさしい風に包まれながら、チポと黙々と歩き続けた。
「あと二日ね」
　珍しくチポが寂しげに零した。
「うん」
　ミサもしんみりと答えた。
「ほんと一週間なんて、あっという間なんだから」
　頷きつつミサは、いつまでも何処までもこうしてチポとふたりで歩いていたいと願った。

　家に着くと、もう日暮れ前。子どもたちは元気に帰宅していた。チポを手伝い、夕御飯の支度。エンデ家四人とミサで食卓を囲んだ。
　その後はいつものように、チポとふたりだけでエデンの森へ。アカペラでチポとデュエット。チポの美声に聴き惚れながらも、「あと二日ね」のチポの言葉が甦って、ミサの心を憂鬱にさせた。
　やっぱりこのままこのチポの美しい歌声を、このシャングの村の中だけで埋もれさすなんて、絶対に勿体無い。大袈裟に言えば、人類の大いなる損失なのよ。なんとかしなきゃ。またもミサは、夢想せずにはいられなかった。いっそわたしがマネージャーになって、チポをシンガーとしてデビューさせようかしら。初めは日本で、そしてゆくゆくは世界へと……。

# (十八) 六日目・ハルカ砂漠の砂

# (十八) 六日目・ハルカ砂漠の砂

本日は土曜日。シャング小学校の授業は午前中で終わり、子どもたちが昼には帰って来る。午前中ミサは畑でチポを手伝い、トウモロコシの収穫を行った。アシスエデンのトウモロコシは遺伝子組み換えなどでは決してない、天然、本物のそれである。アシスエデンの人々の生命を支えるトウモロコシであるから、当然のこと。太陽の光を浴びた一粒一粒の黄色い実が、眩しくピカピカと宝石のように輝いていた。しかしもし近隣の国々が多国籍バイオ化学メーカーの甘い言葉にそそのかされ、遺伝子組み換えの種を使い始めたならさあ大変。いつその種が風に乗って、この清らかなアシスエデンの大地に落ちて来るか分からないのだから。

トウモロコシの収穫を終え家に戻ると、ヤポとピポも帰宅していた。四人分のハルナッツを皆で手伝いながらこしらえ、賑やかに食した。

ランチが済んだら、午後からはドライブへ出発。今日はチポも一緒。パジェロを駐車した広場に四人で移動すると、広場では大勢の子どもたちが遊んでいた。鬼ごっこ、かくれんぼ、陣取りゲーム等々、昔日本の子どもたちが夢中で遊んでいた遊びに興じていた。あちこちで木霊する子どもたちの無邪気な笑い声がきらきらと煌めいて、森を照らす木漏れ陽のように眩しかった。子どもたちはやっぱり、こうでなきゃ。感心するミサを、さっさと助手席に陣取ったヤポが催促。

「ミサ。ねえ、早く出発しよう」

「はい、はい」

チポとピポは大人しく後ろの席に座っている。

「よーし、レッツゴー」

広場で遊ぶクラスメイトたちに大きく手を振りながら、ヤポが叫んだ。広場の子どもらはぴたーっと動きを止め、走り出すパジェロをそれは羨ましそうに見送っていた。

「でも、何処行くの」

問うミサに、ヤポが即答。

「砂漠だよ」

「砂漠って、ハルカ砂漠」

「イエース」

良し、分かった、とミサはアクセル全開。約三キロ離れたハルカ砂漠へと向かった。

エデンの森を通過すると、舗装された道路がハルカ砂漠まで続いていた。見渡す限りの地平線。砂混じりの風が頬を叩いた。しばらくは窓を開けていられたが、砂漠に近付くにつれ砂ぼこりが激しくなり、とうとう窓を閉めた。やがて道路は行き止まり。そこから先はもう、歩いてしか進めなかった。

　みんなで車を降りて、てくてくと歩いた。眼前には直ぐに、果てしない砂の大地が現れた。それが何処までも続いている。黄金色の砂がさらさらと風に舞い、眩しい程である。
「うわーっ、きれい」
　思わず声を上げ、ミサは手を伸ばした。一粒一粒が宝石のように思えたが、手に取るとやっぱりただの砂粒でしかなかった。それはミサに、東京や横浜など、ごみごみとした日本の大都会の中に生きる人々の姿を思い起こさせた。平凡な無数の人々の群れ、夢を忘れた大人たちの無気力な背中また背中……。
　かけっこをするヤポとピポを見守りながら、チポとミサは砂漠の静けさの中に黙って身を置いていた。すべてが静かだった。砂と風と太陽と空だけが、そこには存在していた。時より風がヒュルヒュルと唸り声を上げ、大地の歌をふたりの頬に歌い掛けていった。何年も何十年も何百年もの間、この大地に立つ者へと、ずっとそうして来たように。そして歌は時を越え、人間たちへ、生きる者たちの胸へと伝わって来たように。
「あっ、雨」
　突然ピポが立ち止まり、掌を広げた。確かに雨だった。乾いた砂の大地を濡らして、ほんのひと時スコールが駆け抜けていった。そして砂だらけの乾いたミサの頬に、一滴の湿り気を残して……。
「さあ、そろそろ帰りましょう」
　チポがやさしく、ミサに笑い掛けた。
「今夜はあなたの、パーティなんだから」
　パジェロを飛ばしてエンデ家に戻ったら、既に日暮れ時。いつものようにディナーを食した後、みんなで広場に向かった。何でも集落の全員が集まると言う。
「えっ。そんなに大袈裟にしなくたっていいのに」
　照れるミサに、チポが答えた。
「いいのよ、気にしなくても。土曜の夜は何かしら理由をつけて、みんなでいつも集まるんだから」
　そうか、だったらいいんだけど。少し安心するミサだった。

　ドンドコドン、ドンドコドン、ドンドコ、ドンドコ、ドンドコドン……。威勢の良いジャンベが鳴り響く。チャッチャカチャ、チャッチャカチャ、チャッチャカ、チャッチャカ、チャッチャカチャ……。マラカスも軽快にリズムを刻み。ピーヒョロロ、ピーヒョロロ、ピーヒョロ、ピーヒョロ、ピーヒョロピー……。横笛のユートも負けじと、澄んだ音色を響かせる。松明が掲げられ、威勢の良い掛け声と共に、さあ、パーティの始まり、始まり。
　暑かろうにグリラの民族衣装、それはマサイ族のそれに似ている、をまとった若者たちが、パラダのリズムに乗って、ダイスを踊り出す。みんな、汗びっしょり。
「凄いでしょ」
「うん、最高にエネルギッシュ」
　設けられた来賓用の椅子に腰掛け、チポとミサはパラダとダイスを楽しんだ。
　パラダが終わったら、長老バボバからミサへの挨拶である。
「皆さん、静粛に。では、ゴッホン。親愛なるミサ、遥か遠い異国の地日本より、わたし

たちの村シャングへようこそ。あなたとあなたのお父様ヤスオ・ウミノは、わたしたちに国境と民族の違いを越えた、深い愛と友情とを教えてくれました。あなたとわたしたちは、永久不変なる魂の友であります。今夜は拙い歓迎の饗宴ではありますが、どうぞお楽しみ下さい」

バボバのスピーチが終わるや、熱狂的な拍手がミサへと向けられた。そんな大袈裟な。照れながらもミサは立ち上がり、拍手に応えて何度も何度もお辞儀をした。それから立食パーティ風に、人々の交流と雑談が始まった。

集落のみんなが列を作り、順番にミサと握手を交わし、挨拶の言葉を伝えた。丸で女王様、日本で言えば皇族にでもなったような気分のミサである。

「サンク、ミサ。どう、シャングの滞在は満足してもらえたかしら」

「サンク、トーマ。ええ勿論よ、シャングはこの星の楽園」

「サンク、ミサ。日本の夏も物凄く暑いって聴いたけど」

「サンク、ポアロ。ええ、その通り。よっぽどシャングの方が涼しい位よ」

「サンク、ミサ。もうすぐ日本に帰っちゃうなんて、わたし悲しくて泣きたい位よ」

「ミスュ、ユアナ。ゴメンね、シャングとみんなのことは、絶対に忘れないから」

ミサの肩をポンポンと叩くユアナと抱擁すれば、思わず目はうるうる。そうこうしているうちに、気付けばチポがスピーチに立っていた。

「みんな、楽しんでるかしら。実はね、我等の友ミサは、日本では有名なシンガーなのよ。いつもね、大勢の人の前で歌っているって」

拍手が起こる。やだ、チポったら。ミサはまた照れ笑い。

「どうかしら、今夜も少し歌ってもらおうと思うんだけど。ミサ、ＯＫ」

みんなが注目する中、ミサは黙って頷いた。すると更に拍手と歓声。急いで車からギターを持って来ると、ミサは広場の中央に立ちギターを構えた。

緊張を覚えながら広場を見渡すと、みんなは草の上に座りミサを囲んでいた。温かくやさしいその眼差しに緊張は解け、ミサはリラックス。よし、今夜は思い切り、歌うぞーーっ。心の中でミサは叫んだ。

先ずはお馴染み、ミニー・リパートンのラヴィング・ユー。続いて、ソウ・メニー・スターズ。更にアメージング・グレースをアップテンポで。すると歌の最中に手拍子が起こり、一緒に口遊む者、踊り出す者も現れた。みんな陽気に笑い、楽しんでくれている。ふう、良かった。

そしてラストは一転しんみりと。シャングの友たちに語り掛けるように、リッキー・リー・ジョーンズのカンパニー。チポを始めとするシャングの人々は、今やミサにとって大切な魂の友である。たとえ日本に帰り遠く離れてしまっても、みんなのことは絶対に忘れないから。でもやっぱり別れは辛い。そんな思いを歌に託すミサの気持ちが伝わるのか、チポたちも真剣に耳を傾けていた。

同時にミサは、歌う喜びを噛み締めてもいた。歌いながら、心の中で叫んでいた。やっぱり歌は凄い。歌って素晴らしい。そうよ、やっぱりわたしは歌いたいんだわ。心の底から歌いたい。歌がなきゃ、生きられないのよ。歌こそわたしの人生、そのものなんだから。うわーーーっ……。

ミサが歌い終わるや、観衆は一斉にスタンディングオベーション。熱狂の中、チポが

駆け寄り、がばっとミサを抱き締めた。
「ミサ、良かったわよ。みんな感動してた。やっぱり歌って素晴らしいわね。言葉なんか通じなくても、ちゃんと分かり合えるんだから」
　そうよ、そうなのよ。と頷きつつも、ミサはチポにこう告げたかった。
　うん。でもね、チポ。あなたが歌ったら、わたしなんか比べものにならない位、もっともっと感動させられるのに。もっと凄いことになる筈なのに。あなただったら、一瞬にして世界中を震わせられるのに。ねえチポ、あなたがもしも世界のスポットライトが当たる場所に立って、歌ったならば……。
「さ、パーティのフィナーレよ。みんなで踊るから、ミサもおいで」
　ドンドコドン、ドンドコドン、ドンドコ、ドンドコ、ドンドコドン……。燃え盛る松明の中で、再びパラダの演奏が始まった。大人しくミサの歌を聴いていた人々が、リズムに乗って踊り出した。チポに誘われたミサもさっさとギターを置いて、チポと共にダイスの渦の中へと入っていった。
　やがてパラダのリズムが止めば、パーティは終わり。
「ミスュ、ミサ」
「ミスュ、ミサ」
　みんなはミサの許に駆け寄り、順番にミサと抱き合った。感極まったミサは、泣きながらみんなを抱き締めた。汗臭さも、暑さも何も気にならなかった。
　こうしてミサのアシスエデンの滞在も、あと僅か一日を残すのみである。

# (十九) 七日目

# (十九) 七日目

日曜日はシャングの村も、安息日である。チポの集落の人々も家でのんびり過ごしたり、シティの教会に礼拝に出掛けたりと、各々一日を穏やかに過ごしている。エンデファミリーは、全員朝から教会へと出掛けた。

ミサはと言えば、朝はホテルの部屋で明日の帰り支度をしていた。昨夜のパーティで歌ったことからも、最早ミサの中に歌うことへの拒絶反応とか、歌手なんか辞めてやるといった気持ちは微塵もなかった。むしろ帰国後のシンガーソングライターとしての再出発、活動再開へと心は熱く燃えていた。

チポには敵わないけれど、わたしはわたしなりに歌っていくしかない。精一杯わたしの歌を歌ってゆこう。初心に返って、謙虚に素直な気持ちでそう思えた。昨夜の疲れからついうとうとしてしまい、シャングに向かったのは結局お昼過ぎだった。

正直なところ、チポたちに会うのが辛かった。今日で最後だと思うと、どうにも胸が締め付けられそうで。でもやっぱり行かなきゃ。だって辛いのは、恐らくチポたちだって同じなのだから。そう自分に言い聞かせ、ミサはシャングへとパジェロを飛ばした。

先ずシティに寄って、ＰＦＡのオフィスに顔を出した。支援家庭からの緊急連絡に対応出来るようにと、休日でもここには必ず誰かが待機していた。幸い今日はオリビアも来ていた。オリビアと握手を交わし、感謝の言葉を述べた。

「オリビア、ほんとうにありがとう。もしもあなたがいてくれなかったら、今回のわたしの旅は、とても実現しなかったでしょう」

「こちらこそ、ありがとう。あなたと会えてとても楽しかったわ、ミサ。日本での活躍を祈っているわね」

オリビアと別れたら、後はシャングへ。

チポの集落に着いたら、いつものように広場に車を停め、チポの家へと歩いた。

「遅かったわね」

チポの家のドアを叩くと、直ぐにチポが出て来た。カポと子どもたちはベッドルームにいると言う。一言挨拶しようとベッドルームに顔を出し、みんなと笑顔を交わした。カポ、ヤポ、ピポ、ひとりひとりの顔がいとおしくてならなかった。その後チポとふたりだけで、キッチンの椅子に腰掛けた。

「お昼は食べたの」

「大丈夫」

心配するチポに、ミサは笑顔で答えた。

「じゃ、サウダでも飲みましょう」

「うん」

　サウダの用意が出来ると、キッチンの窓辺に椅子を並べ、ふたりで静かにサウダを飲んだ。
「あっという間だったわね、一週間なんて」
「ほんと、すべてが夢みたい。今でも信じられない、わたしがアシスエデンにいるなんて」
　他愛無い会話をしながらも、ミサはチポにどうしても話したい大事なことがあった。それはチポのこれからの人生へのひとつの提案でありプランであった。が、なかなか言い出せずにいた。かと言って今日という最後の日を逃したら、もう一生話す機会はないであろう。ミサは焦ったが、家族のみんなもいることだしと、今は黙っていた。兎に角、今夜エデンの森でふたり切りになった時、何とか話してみよう。ラストチャンスに賭けるしかないミサであった。
「今日はどうするの、ミサ」
「どうするのって」
　問い返すミサに、チポは頷きながら答えた。
「今日はここに泊まっていかない。ミサさえ良ければだけど」
　あっ、そうか。結局わたし、まだチポの家に泊まっていなかったんだ。
「お風呂なら広場のシャワーがあるし、虫除けのお線香だってあるわよ」
「そうね。うん、じゃ、お言葉に甘えて」
「ｏｈ、ワンダフル」
　ミサの返事に、丸で子どものようにチポははしゃいでウインク。
「よし、そうと決まったら……。じゃ、わたしは夕御飯の支度を始めるから、その間ミサは子どもたちと散歩でもしてて頂戴」
「ＯＫ」
　チポと共に、再びベッドルームに顔を出した。
「あんたたち、ミサと散歩して来て。でもドライブは駄目よ、もう時間ないんだから」
「はーい」
「はーい」
　元気なヤポとピポの返事。ミサは年の離れた弟と妹が出来たような気分だった。この子たちが大人になった時、一体どんな夢を見るんだろう。どんな仕事に就いてもいいから、心のやさしい大人の人になって欲しいと心から祈った。この遠い国の弟と妹へ。
　ヤポとピポと共に集落をぶらぶらしながら、トモロウの道まで来た。三人でトモロウの木の下に腰を下ろして休憩を取った。ハルカ砂漠から吹いて来る砂混じりの風に吹かれながら、ミサははっと閃いた。
　そうだ、例の話。チポに話す前に、先ずこの子たちに話してみよう。だってもし仮にチポがわたしのプランに乗り気になったとしても、この子たちが反対したら元も子もないんだから。よーし。ミサは緊張を覚えながら、ふたりの子どもたちに自分の正直な思いを打ち明けた。
「ねえ、ふたりとも聴いて。わたしね、きみたちのママを、日本に連れて行きたいと思っているの」
「ええっ、日本にだって」
　くりくりと済んだ瞳で驚くふたり。

「うん」
「でもママだけなの。ぼくたちも一緒に行きたい」
　懇願するヤポに、ミサは小さくかぶりを振った。
「ごめんね。先ずはママだけにしたいの」
「どうして」
　今度はピポが不服そうに問う。そこでミサは、はっきりと理由を述べずにはいられなかった。
「うん。実はママをね、日本で歌手としてデビューさせたいの」
「えっ、歌手だって。うちのママを」
「うっそーっ。でも凄ーい」
「どうかしら。きみたちの正直な意見を聞かせて」
　すると始めこそ驚いたり、興奮したりのふたりだったけれど、最終的な彼らの意見は冷静なものであり、かつ一致した。
「ママは、きっと断ると思う」
「どうして」
「だって、ママはシャングを愛しているから」
　それは、分かってる。わたしだって、チポを日本に移住させようなんて、そこまでは思ってないし……。迷うミサを、ピポが励ました。
「でも、兎に角ママにアタックしてみたら」
「そうね。ミスュ、ピポ」
　トモロウの木に別れを告げ、三人はチポの待つ家へと戻った。

　最後の晩餐。これがエンデ家での最後のディナーであった。まだ幽かに夕陽が残っていたが、キッチンのはだか電球を点して食卓を囲んだ。チポの作ったハルナッツは、相変わらず美味しかった。けれど今夜のみんなは大人しい。元々寡黙なカポはいいとして、お喋りなチポも子どもたちも、何処かしょんぼりとしている感じ。場を盛り上げなきゃ、とミサは気負ったが、どんな話題も白々しく思えて結局黙った。みんなが食事を取る音だけが、キッチンに響き渡った。
「ご馳走さまでした」
　チポが合掌し、皆が後に続いた。
「ご馳走さまでした」
　ミサも呟き、チポに微笑み掛けた。
「どういたしまして」
　立ち上がり、後片付けを始めるチポに、カポが囁く。
「後はやっとくから、おまえたちは行っておいで」
　分かった。カポに無言で頷くと、チポはミサに告げた。
「今夜は星が綺麗よ。さあ、行きましょう、わたしたちの森へ」

# (二十) トモロウの木

# (二十) トモロウの木

　シャングに夜の帳が降りて、暗黒の地に遥か遠い夜空の星々が瞬いていた。満天の星、降り注ぐような夏の銀河の煌めきである。ハルカ砂漠から吹く風が、エデンの森の木々の葉を揺らしていた。
「これであなたと歌うのも、最後なのね」
「チポ」
　星と月明かりを頼りに、ミサはチポの顔を見詰めた。
「あなたのパパ、ヤスオは、わたしに掛け替えのない人生の宝をくれたわ」
「人生の宝」
「それは、歌。歌がわたしの支えであり、生きる望み、喜び、だった」
「チポ」
「さあ、歌いましょう、わたしたちの大切な歌を。たとえどんなに遠く離れても、この歌がいつでもあなたとわたしを、ひとつにしてくれる筈だから。ね、そうでしょう、ミサ」
「うん」
「なぜならこの歌を口遊む時、わたしはいつでも、あなたのことを思い出すから」
「わたしもよ、チポ」
　そしてふたりは、ララバイ・オブ・シーをデュエットした。森の動物たちも聴き惚れるかと思う程のチポの美声である。これはもう、絶対に言うっきゃない。ミサはすべての躊躇いを捨て、遂に今決意した。そして歌が終わるや、ミサは満を持してチポに告げた。
「ねえ、チポ。実はわたし、あなたに相談したいことがあるの」
「相談。何、何でも言って頂戴」
　笑みを浮かべ問い返すチポをじっと見詰めながら、ミサは言葉を続けた。
「初めてあなたの歌を聴いたあの瞬間から、ずっとわたし、このことばかりを考えていたの」
「だから、何よ。さあ、勿体振らずに言ってみて」
「うん」
　頷くとミサは、思い切って声を発した。
「チポ。あなた、歌手にならない」
「えっ」
　驚くチポ。
「歌手に……って、どういうこと」
　月の光りがまっ直ぐに、チポとミサへと降り注いでいた。ふたりとも汗びっしょり。その汗の滴が、月光にきらりと光る。

「だからあなたさえ良ければ、わたしと一緒に日本に来て、日本で歌手としてデビューするのよ」
「ええっ。何言ってるのよ、ミサ。わたしにそんなこと、出来る訳ないでしょ」
「どうして。あなたなら、あなたの歌だったら出来るわ。きっと成功する筈よ」
「ミサ。お願いだから、冗談は止めて」
「冗談。違う、わたしは本気よ。日本での面倒はわたしがみるし、何にも心配いらないから。あなた単身でも良いし、何なら家族全員で日本に移住したって良いと思うわ」
「家族で日本に」
「そうよ。でもそれが嫌だったら、今迄通りシャングで暮らしながらだって不可能じゃないわ。例えばレコーディングの時だけ、一週間とか、どんなに長くても一ヶ月間だけ、日本に来るの。ねえ、どう」
「でも、ミサ」
　しかし懸命に説得しようとするミサの熱意に、流石のチポも圧倒された。
「良く聞いて、チポ。もし世界中の人があなたの歌を聴いたら、どう思うかしら。みんな感動し、生きる喜びに浸れるんじゃないかしら。ね、世界中の人の魂を、あなたの歌声で震わせることが出来るのよ。あなたの歌がみんなを幸せにし、人生の支えとなり、人々の生活の一部になるの。これは、凄いことじゃない」
「でも……。お願い、待って頂戴、ミサ」
　しかしミサの情熱は止まらない。
「それだけじゃないわ。あなただって、あなたの家族だって幸せになれるのよ。日本で成功すれば、お金に困ることもないし、今よりずっと良い暮らしが出来る。例えばトピアの一等地を購入し、そこに家を建てるの。トイレだってお風呂だってあるし、水だっていつでも欲しい時に手に入れられる。停電だって滅多に起こらないし、便利なコンロでハルナッツだって短時間で簡単に作れるわ。農作業もしなくていいし、食べ物が足りなくて飢えることもなくなる。それにヤポとピポをカレッジまで行かせられるわ。ねえ、凄いでしょ」
　ふう。チポの瞳を見詰め続けながらも、自分の言いたいことはすべて伝えたと、ミサは一息吐いた。替わってチポ。
「確かに凄いわね、ミサ。あなたが語ることはすべて、丸で遠い夢のよう」
　けれど言葉とは裏腹に、チポの顔は冷めていた。チポは冷静に言葉を選びながら、ミサに答えを返した。
「ありがとう、ミサ。あなたの気持ちは痛い程分かったわ。でもね、ミサ」
「チポ……」
　ミサは今にも涙が溢れそうな位、感極まっていた。しかしじっと堪えて、チポの言葉を待った。
「ちょっと座りましょう、疲れたでしょ」
「そうね」
　トモロウの木の下に腰を下ろしたチポの横に、ミサも座した。見上げれば、木と木の間から見える星の光りがきれいだった。
「本当にミサが言うように出来たなら、どんなに素敵かしら。もしもわたしが今よりも

若く、そして独身だったなら……。もしかしたらわたしは、あなたの夢に喜んで飛び付いていたでしょう」
「だから、今のあなただって大丈夫なのに」
「ほんと、ありがとう。確かにわたしも昔は、わたしの歌をたくさんの人に聴いてもらいたい、聴いてもらえたならどんなにいいかしら。なんて願ったこともあったわ。でもそれはね、少女時代の単なる憧れ。決して夢なんて大袈裟なもんじゃなかったし、そんなこと誰にも恥ずかしくて言えなかった。歌うことが、わたしの歌が、わたしの夢になるなんて……」
　チポは沈黙し、月の光、星々の瞬きを仰ぎ見た。それから森を見渡し、頬に吹く風を確かめるように笑みを浮かべた。
「今わたしには愛する家族がいるし、わたしはこの国が好き。わたしはこの森で歌うことが、大好きなのよ。ほらミサ、見て頂戴。ここには動物たちがいて、鳥たち、虫たちがいて、草花やたくさんの木々が生い茂り、清らかな雨が降り、やさしい風が吹き、空には幾千万、無数の星が瞬いている。ハルカ砂漠から吹いて来る砂まじりの風は、丸で黄金の糸のよう……。だから、ミサ」
　うん。ミサは、小さく頷いた。そしてチポの言葉を噛み締めるように聴いた。
「わたしは、この場所で歌っていたいの。愛する子どもたちの為に。そしてわたしはこのシャングの村で、家族と集落のみんなと一緒に、静かに年を取りたいの」
　ああ、駄目だ。ミサはそう思った。きっとチポの歌は、チポが歌うということは、このシャングの村で生きることなのだ。シャングの地で生きることが、チポには即ち歌そのものなのだ。
　シャングの夜空の眩しく清らかな星を仰ぎ見ながら、そして静かにミサは諦めた。
　ミサの目には止め処ない涙が溢れていたが、それは自らの願いが叶わなかった悔し涙ではなかった。チポの生き方への、尊敬と羨望とに他ならなかった。
　今にも泣き崩れんとするミサを、チポはしっかりと力強く抱き支えた。母が娘を抱くように、逞しいお姉さんが頼りない妹を励ますように。漆黒の闇の中でシャングの夏の星の光だけが、そんなふたりの背中を照らしていた。

　エデンの森に別れを告げたミサは、チポと共にチポの家へと足を向けた。途中広場に立ち寄った。
「車に忘れ物して来ちゃった」
「じゃ、待ってるわ」
　チポを待たせ広場に駐車したパジェロに乗り込むと、ミサはカセットテープレコーダーを手にした。それまで録音したチポの歌を、そしてすべて消去した。これでいいのだ、と自分に言い聞かせながら。だって、チポの歌はこのシャングの地で、いつまでもいつまでも生き続けるのだから。そしてわたしの心の中で。それに、お父さん、あなたの心の中でね……。
　家に戻るとチポとミサは、洗面用具を手に再び広場へと逆戻り、そしてシャワー室に入った。シャワー室は男女別々で、各々五個のシャワーが用意されていた。チポと並ん

で髪と体を洗い、シャワーを浴びた。直ぐまた汗びっしょりにはなるだろうが、一日分の汗と涙を洗い流したミサは束の間でも気分爽快。
　チポの家に帰ると、時刻は二十一時過ぎ。まだそんなに晩い時間でもないが、ミサは明日朝から出発せねばならない。その為ミサに合わせて、エンデ家も早々と就寝である。
「俺はキッチンの椅子に座って寝るから、ベッドはミサとチポが使え」
　カポとチポのベッドはダブルベッドサイズ。カポがそう申し出たが、ミサは申し訳ないからと断った。
「じゃ、どうする」
「そうね」
　チポとカポが話し合う。結果、チポの意見に従った。
「じゃ、わたしとミサがキッチンで寝るわ。寂しいだろうけど、あんたは独りで寝て頂戴」
「分かったよ。それじゃ、リーヴ、ミサ。いい夢を」
「リーヴ、カポ」
　子どもたちとも、お休みを交わし合った。
「リーヴ、ミサ」
「リーヴ、ミサ」
「リーヴ、ヤポ。リーヴ、ピポ」
　そしてカポと子どもたちはベッドルームに消え、早々と眠りに就いた。
　キッチンに残されたチポとミサ。
「さあ、どうしましょう、ミサ」
　問うチポに、ミサは答えた。
「わたしなら、床でも平気よ」
「ほんと。じゃ、ふたりで床に寝ましょう。タオルケットを敷けば、少しは柔らかくなるわよ」
　話が決まって、食卓を隅に押しやり、二枚のタオルケットを床に並べて敷いた。虫除けのお線香に火を点した後、下着姿になってそれぞれのタオルケットの上で横になった。
　床は硬く、ひんやりと土にも似た冷たい感触が背中に伝わって来た。天井の点けっぱなしだったはだか電球が、なぜか突然ぷつっと切れた。お陰で世界中まっ暗。
「あらあら、停電のようね」
　呆れた声で笑いながらチポが起き上がり、蝋燭を灯して床に戻った。線香の効果なのか窓を開け放していても、虫は殆ど飛んで来ない。それに線香の香りは丸でエデンの森にいるような緑の香りを仄かに放って、家に染み付いた体臭や黴臭さを消してくれた。
「いい香りでしょ」
「うん。森にいるみたい」
「そうなのよ。トモロウの木の成分で作ったお線香だから」
「そうなんだ」
　そしてふたりは沈黙した、停電による蝋燭だけが頼りの暗闇と深い静けさの中で。ただ幽かにハルカ砂漠から吹いて来る、砂混じりの風の音だけがしていた。砂の一粒一粒たちの歌声すら、聴こえて来る程に思えた。それから隣りの部屋で眠るカポたちの寝息もしていた。目を閉じるとミサも、うつらうつらして来る。チポはもう寝ただろうか。

「ねえ、チポ」
　恐る恐る囁くように、声を掛けてみた。するとチポの声も、やさしく囁くように返って来た。
「なーに、ミサ」
　それから、チポはこう付け加えて笑った。
「今夜は眠れそうにないわね。だって明日はもう、あなたが帰ってしまうんだから」
「ごめんなさい」
「ミサが謝ること、ないわよ」
「そうね。あのね、チポ」
「なに」
　闇に慣れた目で天井を見詰めながら、ミサは続けた。チポもまた天井を見ていた。
「あなたを日本に連れてゆくことは、もう諦めたんだけど」
「うん」
「海に行くっていうのは、どう」
「えっ」
　驚いたチポは、ミサを見詰めた。
「海に行くって、どうやって」
「だから、ここから一番近い海にみんなで旅行するの。海外旅行ってことになるけど」
「海外旅行。みんなで、旅行ねえ」
「そう。費用ならわたしが出すから、ねえ行こう、みんなで」
「そうねえ」
　これはいけるかも。満更でもないチポの反応に期待を抱きながら、ミサは続けた。
「ここから一番近い海っていったら、何処がいいのかしら」
「それならね、昔ヤスオが教えてくれたわ。今でも覚えてる。モザンビークに行きなさいって」
「良し、じゃ決まり。みんなでモザンビークに、海を見に行こう」
　簡単に言ってはみたものの、旅行プランとか費用とか、それにモザンビークの治安は大丈夫だろうか。などと、あれこれ考えねばならないことは一杯ある。が、先ずはチポの気持ちが第一。
「ねえ、チポ」
　しかし考え込むチポ。
「うーん、そうねえ」
　ミサはチポの答えを待って、どきどきしながら沈黙した。チポも黙り込んだ。それは一瞬のようにも思え、また長い長い沈黙でもあった。遂にチポが答えた。
「やっぱり、ごめんなさい。止めておくわ」
「ええっ、どうして」
　落胆するミサのため息が、闇と静寂の中に沈んでいった。その瞳に、再び涙が……。
「確かにこの目で、海が見れたらどんなにいいかしら。子どもの時から、幾度となくそんな夢も見て来たわ。でも……、わたしにはヤスオが教えてくれたララバイ・オブ・シーがあるから。わたしの海は、わたしにとっての海はね、あの壊れたヤスオのオルゴール

だったのよ」
「えっ」
「寂しい時も、どんなに辛い時も、いつもあのオルゴールのメロディが、慰めてくれたんだから」
「でも」
「本当にありがとう、ミサ。あなたのその気持ちだけで充分よ。だって、ほら。目を閉じれば今も、わたしの心へとあのきらきらと煌めくヤスオのオルゴールの音色が、それこそ海の波の音のように響いて来るから」
「チポ」
　ミサは言葉に詰まった。でも諦めるしかない。
「ほら、ミサも目を瞑って御覧なさい。海の歌が、聴こえて来るでしょ」
　ミサはチポの言葉に従った。するとチポはミサに向かって、囁くように小さな声で歌い出した。それはララバイ・オブ・シー、しかも英語ではなく、グリラ語の歌詞で……。
　あっ、もしかして。
　その時ミサは、はっと自分が何かに気付いたことを悟った。それは遠い日の記憶、過ぎ去りしあの日のことである。

　あの日とは、春三月の夜。ミサはまだ中学を卒業したばかりの十五歳の少女だった。父保雄の死を悲しみ、横浜の大桟橋の外れに立って、ひとりぼっちで泣いていたあの夜。ところがそんなミサの耳に、幽かに何かが聴こえて来た。吃驚したミサは、耳を澄ました。それは誰かの歌う声のようだった。
　ミサは何度も耳を疑った。しかし確かに、それは女性の歌う声だった。歌っている歌詞は分からない。日本語ではなく、異国の知らない言語のようであった。ミサは夢中で、その歌に耳を傾けた。
　ミサはその歌声が、海の方から聴こえて来るのに気付いた。波音に混じって、確かに聴こえ来る。ミサは声のする方角に目を向けた。暗い海の水平線の彼方へと。
　ミサはその歌声が美しいと思った。何てやさしい歌なのだろうと、思った。わたしもこんなふうに歌いたい。こんなふうにやさしく、人の心を慰められるような歌を、歌いたい……。

　我に返ったミサの耳に、まだチポの歌う声が聴こえていた。ミサは恐る恐る目を開いた。闇の中に横たわり、自分を見守るように見詰めながら自分に向かって歌い掛ける、チポの顔をそして見詰め返した。涙を拭いながらミサは、心の中でチポに向かって合掌していた。
　ミスュ、チポ。
　あの夜のあの歌は、あなた、だったのね……。
　歌い終えたチポに、ミサは尋ねた。
「ねえ、チポ。どうして突然、あなたは父にエアメールを送って来たの」

　チポは答えた。
「きっとヤスオがあなたを、わたしに会わせたかったからじゃない」
　悪戯っぽくウインクするチポに、ミサもウインクを返した。耳を澄ますとシャングの夜の静寂の彼方に、遠い海の音が聴こえて来るような気がした。いつのまにかふたりは、深い眠りへと落ちていった。

「ハッピ、ミサ」
「ハッピ、チポ」
　朝陽の中でエンデ家と集落の人々に見送られながら、ミサはシャングの地を後にした。農場地帯に沿って走らせるパジェロの開け放した窓からハルカ砂漠の砂混じりの風が吹き込んで、ミサの頬を荒々しく撫でていった。
　ハッピ、シャング。
　ハッピ、トピア。
　ハッピ、アシスエデン……。
（了）

# 終わりに

# 終わりに

お読み頂き、ありがとうございます。

ハルカ砂漠とトモロウの木

著　　青大井空

制　作　Puboo
発行所　デザインエッグ株式会社